

るんだ。』

『ぢや降伏は？』

『そんな事は決してない。戦闘準備はすつかり出来ちやつたんだよ。』

アンドレイ公爵は聲の聞える戸口へ進んだ。併し彼が戸を開けようとした時、部屋の中の聲はばつたり止んで、戸がひとりでに開いた。そして腫れぼつたい顔に驚鼻を聳やかしたクトゥゾフが闕の上に現れた。アンドレイ公爵はクトゥゾフの眞向ひに立つた。けれど種々の想念や配慮が強く總指揮官の心を領して、其の視覚を曇らしてゐるやうな工合であつた。それは鋭い隻眼の表情で見分けられた。彼は自分の副官の顔を眞正面から見乍ら、未だそれと氣が附かなかつたのである。

『何うだ、濟んだかな？』と彼はコズローフスキイに言つた。

『只今直ぐでございます、閣下。』

バグラチオンはしつかりした、動きの少い、東洋的型の顔をタイプした、脊の低い、沾ひのない、未だ左程年取つてゐない男であつたが、總指揮官の後から出て來た。

『只今歸つて參りました。』アンドレイ公爵は封書を差し出し乍ら、可成り大きな聲で繰り返した。

『あ、維納からか？宜しい。又後で、後で！』

クトゥゾフはバグラチオンと一緒に玄關の方へ出て行つた。

『ぢや公爵、失敬。』と彼はバグラチオンに言つた。『どうか無事で。君が偉勳を樹てるやうに祝福するよ。』

クトゥゾフの顔は不意に柔か味を帯び、涙が其の目に現れた。彼は左手を伸してバグラチオンを引き寄せ、指環の嵌つてゐる右手で、さも馴れたやうな手振で十字を切り、自分の片頬を前へ差し出した。が、バグラチオンは其處でなく頸筋に接吻した。

『どうか無事で！』かうクトゥゾフは繰り返して、幌馬車に近寄つた。『俺と一緒に乗らんか。』と彼はボルコンスキイに言つた。

『閣下、わたしは此處で何かお役に立ち度うございます。何うかバグラチオン公爵の枝隊に残して下さい。』

『まあ乗れ。』とクトゥゾフは言つた。そしてボルコンスキイの躊躇してゐるのを見て、『わし自身にもい、將校が必要なんだ、わし自身にも必要なんだよ。』

二人は幌馬車に乗つて、幾分かの間無言の儘で進んだ。  
『これから先に未だく澤山いろんな事があるよ。』恰もボルコンスキイの心中を察したやうに、彼は老人らしい明察の表情を浮べながらかう言つた。『若しあの枝隊の中からせめて十分の一

だけでも、明日無事に歸還したらわしは神に感謝するよ。』クトゥゾフは獨り言のやうにかう言ひ足した。

アンドレイ公爵はクトゥゾフを眺めた。と、一尺餘り離れた邊に、クトゥゾフの片一方潰れた目と、イズマイルの役で銃丸に貫かれた蟬谷の傷痕の綺麗に洗はれた皺が、アンドレイ公爵の眼に映つた。「さうだ、將軍は部下の人々の死に就いて、あゝいふ冷靜な口を利く権利を持つてるのだ！」とボルコンスキイは考へた。

『それですから、わたしもあの枝隊へ遣つて下さいとお願ひするんです。』と彼は言つた。

クトゥゾフは答へなかつた。彼はもう自分の言つた事を忘れて了つたかのやうに、物思はしげにじつと坐つて居た。五分ばかり経つてから、柔かい馬車の螺旋に調子よく體を揺られ乍ら、クトゥゾフはアンドレイ公爵の方へ向いた。その顔には昂奮の跡すら見えなかつた。彼は微妙な冷笑を浮べつ、フランツ皇帝謁見の詳細や、クレームスの役に關して宮中で耳にした批評や、互に知り合つてゐる婦人の噂などを、アンドレイ公爵に訊くのであつた。

#### 一四

十一月一日クトゥゾフは味方の斥候を通じて、麾下の軍隊を殆ど出口の無い状態に陥らせるやう

な、恐しい情報を受け取つた。斥候の報告に依ると、佛蘭西の大軍は維納の橋を渡つて、目下露西亞内地から進軍しつゝ、ある援軍と、クトゥゾフ軍との交通路を目掛けて進んでゐるのであつた。若しクトゥゾフがクレームスに留らうと決心すれば、十五萬のナポレオン軍は一切の交通路を遮断し、僅か四萬の疲憊し盡した軍勢を圍んで、ウルムに於けるマックと同じ状態に陥らせるに相違ない。若しクトゥゾフが、露西亞の援軍と友軍とを繋ぐ道路を放擲すれば、彼は優越せる敵の軍勢を防ぎながら、不案内な道もないボヘミヤの山地に分け入つて、ブクスゲヴデン(ロシア増援軍の指揮官一七五〇—一八一二年)との連絡に對する、一切の望みを放棄しなければならぬ。若しクトゥゾフが増援軍との連絡を望んで、クレームスからオルミューツに向つて退却を決心すれば、維納の橋を渡つて來た佛蘭西軍に途中で先んじられる虞れがある。さすれば三倍も優勢な敵に兩方から挟まれた儘、すべての重砲類や輜重類に煩はされ乍ら、行軍中の戦闘を餘儀なくされる事になる。

クトゥゾフは此の最後の方法を選んだ。

斥候の報告に依れば、佛蘭西軍は強行々程でツナイムへ進んでゐるのであつた。ツナイムはクトゥゾフの退却の途上に横たはつてゐる町で、此處からは百露里(俄三)以上も前方にある。佛蘭西軍に先んじてツナイムに達するのは、つまり友軍救助の大希望を得る事となる。佛蘭西軍をして味方よりも先にツナイムに入らせるのは、つまり確實に味方の軍隊をウルム役と同じ恥辱に陥れる

か、或ひは全滅させて了ふか、二つに一つを意味するのだ。併し全軍悉く引率して佛蘭西軍に先んじるのは、到底不可能であつた。維納からツナイムに至る佛蘭西軍の道路は、クレームスからツナイムに至る露西亞軍の道路より、短くて而も良好である。

報告を受け取つた夜クトゥゾフは、四千人より成るバクラチオンの前衛隊を右方の山越しに、クレームス・ツナイム街道から、維納ツナイム街道へ向けて出發させた。バクラチオンは此の行程を少しの休息もなく押し通して、ツナイムを後ろに維納に面して軍を留め、若し佛蘭西軍に先んじる事が出来たなら、出来るだけ敵を抑制するといふ手筈であつた。クトゥゾフ自身は一切の重砲輜重類を率ゐて、ツナイムさして出發した。

空腹を抱へた跣足同様の兵士を率ゐ、嵐の吹きすさむ夜四十五露里の山中を、路らしい路もなく乗り越えて、落伍者の爲めに三分の一の兵力を減じ乍ら、バクラチオンは維納ツナイム街道なるホルラブルンに出た。それは維納からホルラブルンに向つて進行中なる、佛蘭西軍よりも二三時間先の事であつた。クトゥゾフが重砲類を曳いてツナイムに到着するには、未だまる、一晝夜行進を続けなければならなかつた。で、味方の軍を救ふ爲めに、バクラチオンは僅か四千の餓ゑ疲れした兵士を率ゐて、ホルラブルンに相會した敵軍を、一晝夜の間支へなければならなかつた。が、それは明かに不可能の事であつた。けれど不思議な運命は、不可能を可能にしたのである。

かの戦はずして維納の橋を、佛蘭西軍の手に與へた偽りの成功は、今度も同様にミュラートをして、クトゥゾフをも欺いて見ようといふ氣を起させた。ツナイム街道でバクラチオンの微弱な枝隊を迎へたミュラートは、これをクトゥゾフの全軍だと考へた。此の軍勢を確實に潰滅させる爲めに、彼は少し遅れて維納を出發し、今前進の上にある本軍を待ち合せることにした。彼は此の目的を以て、兩軍が自分の位置を換へず、又今の場所から少しも移動しないと云ふ條件の下に、三日間の休戦を申し込んだ。ミュラートは日下講和の義が進行中であるから、無益の流血を避ける爲めに、休戦を申し込むのだと稱した。前哨に立つてゐた埃太利の將軍ノスチーツ伯爵は、ミュラートの軍使の言葉を信じて、バクラチオンの枝隊を曝露し乍ら退却した。今一人の軍使は露西亞の線内に入つて来て、矢張り講和條約の情報を披露し、三日間の休戦を露西亞軍に提議した。バクラチオンは自分一人で休戦を承諾する事も、又拒絶する事も出来かねる由を答へて、休戦の申込を報告す可く、副官をクトゥゾフの許へ遣はした。

休戦はクトゥゾフに取つて、時日の餘裕を作り出す唯一の方法であつた。其の間に疲れ切つたバクラチオンの枝隊を休息させ、輜重や重砲類をツナイムに向けて、僅か一行程だけでも進める事が出来る（輜重類の輸送は佛蘭西軍に隠して行はれてゐたのである）。休戦の申込は友軍を救助する唯一の、而も思ひ掛けない可能を與へたのである。此の報告を受け取ると、クトゥゾフは早速自

分の屬僚たる侍従武官、ギンツェンゲローデ將軍を敵の陣營へ送つた。ギンツェンゲローデは單に休戦を受諾するのみならず、降伏の條件をも提出す可き手筈になつてゐた。その間にクトゥヅフは副官等を後方へ遣はして、全軍の輜重類をクレームス・ツナイム街道に沿うて、出来るだけ急がすやうに命令した。疲れて餓ゑ切つたバグラチオンの軍隊は、本軍と輜重隊の動作の墻をし乍ら、自分より八倍も優勢な敵軍と、單獨に相對峙してゐなければならなかつた。

クトゥヅフの豫察は的中した。何等の義務をも生じない此の降伏の申込は、輜重の幾部分を通じてさせる餘裕を與へるだらうといふ豫想も、亦ミュラートの過失は即刻發見されるに相違ないといふ想像も、立派に的中したのである。ホルラブルンより二十五露<sup>ワエルスタテ</sup>里離れてゐる、シエンブルンヌにあつたボナバルトが、ミュラートの報告と休戦及び降伏に關する案文を受け取るや否や、即座に敵の詭計を見破つた。そしてミュラートに宛て、次の手紙を書いた。

ミュラート公へ。千八百五十五年<sup>フルユイール</sup>露月<sup>(佛國第二共和政の時用ひし曆の第二月、太陽曆)</sup>二十五日

午前八時、シエンブルンヌにて

余は卿に對する不満を表すべく、適當の言葉を發見するに苦む。卿は余の前衛を指揮するのみにして、余の命令を待たずして休戦をなすの權を有せず、卿は余をして戰役の果實を失はしめたるの便宜を有す。

り。即刻休戦を破棄して敵に向はれよ。此の降伏狀に署名せし將軍は、これをなすべき權利を有せざるのみならず、露西亞皇帝一人を除くの外、何人も此の權を有せずと宣告せられよ。

とは言へ、若し露西亞皇帝にして此の條件を承諾なさば、余も亦これに賛同すべし。然れども、こは一箇の奸策に他ならず、行きて露西亞軍を潰滅せよ……卿は露西亞軍の輜重と大砲を鹵獲するの便宜を有す。

露西亞皇帝の侍従武官は要するに一箇の……權利を有せざる將校輩に何等の意味無し。此の侍従武官も同じく權利を有せず……奧太利軍は維納渡橋の際、卿の手に乗りたり。今や卿は露西亞侍従武官の手に乗りつゝあるなり。

ナボレオン

ボナバルトの副官は此の恐しい手紙を以て、全速力でミュラートの許へ馬を驅つた。ボナバルト自身も、最早將軍を信任出来なくなつたので、殆ど調理の出来上つてゐる犠牲を逸する事を恐れて、全軍を率ゐて戰場に向つた。所で、バグラチオン枝隊の四千人は、愉快けに焚火を圍んで、濡れたものを乾かしたり、體を暖めたり、三日目にやつと始めて粥<sup>カシヤ</sup>を煮たりし乍ら、誰一人として目前に迫つてゐる事を知りもしなければ、考へもしないのであつた。

午後三時過ぎにアンドレイ公爵は、強つて自分の願をクトゥゾフに承知して貰つて、グルントへ到着すると直ぐバグラチオンの許へ出頭した。ボナバルトの副官は未だミュラートの枝隊へ着かなかつたので、戦ひは開始されて居なかつた。バグラチオン枝隊では大局の進行を知らないで、講和の噂などしてゐるけれど、其の實現の可能を信じるものはなかつた。又戦闘の噂もしてゐたが、矢張り近く戦闘のある事を信じなかつた。バグラチオンはボルコンスキイが、クトゥゾフの愛と信任を受けつゝある副官だと知つてゐるから、特別に破格な遜つた待遇をするのだと云ふやうな、上官らしい態度で彼を引見した。そして多分今日明日にも戦争があるだらうと言つて、戦闘中自分の傍に居るとも、又は後衛にあつて退却の秩序を監督するとも、「これも矢張り非常に重要な事だ」、何方でもボルコンスキイの自由に任せると言つた。

『尤も今日は多分ないでせう。』アンドレイ公爵を安心させるかのやうに、バグラチオンはかう言ひ足した。

「若し此の男が、只勳章に有り附く爲めに掛ける世間並の參謀附の伊達男なら、後衛にゐたつて賞與を貰ふに違ひない。が若し俺と一緒に居たいといふなら、それもよからう……勇氣のあ

る將校なら何かの役に立つだらう。」とバグラチオンは考へた。アンドレイ公爵は何にも答へないで、陣地を一巡して軍の配置を知り度いと許可を乞うた。それは何か命令を託された場合、自分の行く可き所を知つて置かねばならぬからであつた。はいからな服装をして、人差指にダイヤモンドの指環を箴め、下手な癖に佛蘭西語で話し度がる美男子の常直將校が、アンドレイ公爵の案内を自分から申し出た。

何方を向いても濡れしよぼけた沈んだ顔附で、何やら探してゐるやうな將校達や、近在から戸、床几、垣根など引つ張つて来る兵士等が見受けられた。

『公爵、此の連中にはとても敵ひませんよ。』常直佐官はこれ等の人々を指さし乍らかう言つた。『隊長達が勝手に出歩かせるもんですから、ほら此處に、其の邊に張られた酒保の天幕を指さして、皆集つて坐り込んでるんですよ。今朝程すつかり追つ拂つたんですが、御覽なさい又一杯です。公爵、一つ彼處へ寄つて、脅かして遣らなきやありません。ほんの一寸です。』

『寄りませう。わたしも乾酪と麵麩を買つて行きますから。』未だ腹を拵へる暇のなかつた、アンドレイ公爵はかう言つた。

『何うして言つて下さらなかつたのです、公爵？わたしが何かお振舞ひしましたのに。』彼等は馬を下りて酒保の天幕へ入つた。疲れ切つた眞赤な顔附をした將校が幾人か、卓に向つ

て飲んだり食つたりしてゐた。

『え諸君、一體これは何事ですか？』もう幾度も幾度も同じ事を繰り返した人のやうな調子で、當直佐官は詰じるやうにかう言つた。『そんなに受持の部署を離れちやいかんぢやありませんか。誰も此處に來ちや不可ないといふ、將軍のご命令ですよ。あ、君、二等大尉。』脊の低い、汚い、瘠せた砲兵將校に向つて、彼はかう言つた。此方は靴なしの（彼は靴を酒保に渡して、乾かさせてゐたのである）鞆一つで、あまり自然でない微笑を浮べ乍ら、入つて來た二人の前に突つ立つて居た。

『え、トゥッシン大尉、何うしたんです、君は恥しくないんですか？』と當直佐官は語を次いだ。『君は砲兵將校として、一軍に範を示すべき筈ぢやありませんか。それなのに、靴も穿かないでゐる。危急の報があつた時、その靴なしの恰好は悪い、事だらうね。（當直佐官はかう言つて苦笑した）。さあ、諸君、各々自分の部署に就いて下さい、みんな、みんな。』と彼は長官らしい調子で附け足した。

アンドレイ公爵は二等大尉トゥッシンを眺めつゝ、我れともなしにほ、笑んだ。トゥッシンは無言で微笑を含んだ儘、裸足の足を交るゝ踏み變へ乍ら、大きな、賢さうな、而も人の好い目で、アンドレイ公爵と當直佐官を見較べるのであつた。

『兵隊がよくいふぢやありませんか——跣足の方が樂だつて。』トゥッシンは微笑し乍ら、おづおづとかう言つた。察する所、ばつの悪い自分の位置を冗談らしい調子に變へようとしたものらしい。

が、終ひ迄言ひ切らぬ中に、彼は自分の洒落が洒落として受け取られず、失敗に歸したのを見て取つて、へどもどして了つた。

『さあ、それ／＼部署について下さい。』眞面目な調子を持ち堪えようと努め乍ら、當直將校はかう言つた。

アンドレイ公爵は今一度此の砲兵將校の小柄な姿を眺めた。彼の體つきには幾分滑稽ではあるけれど、而も非常に人を惹付けるやうな、全然非軍隊式な、一種特別な或る物があつた。

當直佐官とアンドレイ公爵は馬に跨つて、尙先の方へ進んだ。

途中しつきりなしに色々の隊の兵士や將校に、追ひ付いたり行き會つたりし乍ら、やつと二人が村を出端れると、目下工事中の堡塞が左手に聳え、今掘り起されたばかりの新しい粘土が赤く見えた。幾大隊かの兵士が寒風にも拘らず襯衣一枚になつて、此の堡塞の上を白蟻か何ぞのやうに動いてゐた。壘の蔭からは誰の仕事やら、しきりに赤い粘土がシヨベルで抛り上げられる。二人は堡塞に近寄つて暫く眺めた後、又先の方へ進んで行つた。その直ぐ後ろで、絶えず入れ換つ

ては堡塞から逃げ出して行く、數十人の兵士に行き當つた。二人は此の毒を含んだ空氣から遁れる爲めに、鼻に蓋をして、早足で馬を驅けさせなければならなかつた。

『Voilà l'agrément des camps, monsieur le prince (これが陣中の愉たのしみだ、公爵)』と當直佐官は言つた。

二人は正面の小山へ登つた。此の山からはもう佛蘭西の軍が見えた。アンドレイ公爵は立ち止つて展望を始めた。

『ほら、あすこの處に味方の砲兵中隊がゐるのですよ。』一番高い地點を指さしつゝ、當直佐官はかう言つた。『あの例の靴なしでゐた變人の中隊です。あすこからすつかり見渡せますよ、参りませうか、公爵。』

『どうも有難うございました、もうわたしは一人で出掛けますから。』此の當直將校から免れたかつたので、アンドレイ公爵はかう言つた。『もう御心配なく、何うぞ。』

當直佐官は別れて歸つた。公爵は一人で先へ進んだ。

彼が段々敵へ近づくに随つて、軍隊は次第に秩序立つて樂しげに見えて來た。一番烈しい混雜と疲弊を示して居たのは、今朝アンドレイ公爵が通つて來た、佛蘭西軍から十露里エルスタフ離れてゐる、ツナイム市の前面に於ける輜重隊であつた。グルントでも若干の不安と、何物かに對する恐怖が感じられた。併し、アンドレイ公爵が佛蘭西の戦線に近附くにつれて、次第に友軍の様子が持つ

所ありけに見えて來た。外套姿の兵士が列を正して立つてゐると、曹長と中隊長が人員の點呼をし乍ら、小隊の一番端に當る兵士の胸を指でついて、手を上げるやうに命じてゐる。見渡す限り一面に撒き散された兵士達は薪や柴を運んだり、樂しげに笑つたり話し合つたりしながら、假小屋を拵へてゐる。焚火の傍には服を着たのや裸の兵隊が、シャツや脚絆を乾かしたり、靴や外套を繕つたりし乍ら暖まつてゐるし、釜や粥鍋カクレヤの傍にも大勢たかつて騒いでゐる。或る中隊では食事の支度が出來上つて、兵士等は物欲しさうな顔附で湯氣の立つ釜を眺め乍ら、味き、が濟むのを待ち兼ねてゐた。食事係の下士は出來上つた食物を椀に入れて、自分の假小屋の前なる丸太に腰掛けてゐる、將校の所へ運んで行くのであつた。

又それよりもつと仕合せのよい中隊もあつた。(どの中隊にもウオートカがあるといふ譯で無かつた)。一人の痘痕あはた面づらをした、肩幅の廣い特務曹長が、兵士の群に圍まれ乍ら、樽を傾けて順々に差し出す罐の蓋に酒を注いでゐた。兵士等はさも勿體なさうに、罐の蓋を口の傍へもつて行き、ぐつと一息に傾けると、口を嗽すすひして外套の袖で口を拭きながら、愉快さうな顔附で曹長の傍を離れるのであつた。一同の顔は驚く程落ち着き拂つてゐて、少くとも支隊の半數は此處に遺棄されねばならぬといふ、大事を控へて敵前に立つてゐるらしい風はなく、まるで故國の何處かの地方で、穩かな宿泊を待つてゐるやうな工合であつた。

アンドレイ公爵は獵兵隊を通り過ぎて、元氣のい、若者に充ちた、キーエフ精兵隊の列へさし掛つた。此處でも同じ平和な仕事に従つてゐるが、他の小屋とは一目で見分けのつく、聯隊長の高い假小屋から程遠からぬ邊りで、精兵小隊の正面に行き當つた。と、其の小隊の前に、一人の男が素つ裸にされて臥てゐる。二人の兵士が其の男を掴まへてゐると、今二人が靱かな鞭を振つて、規則正しく間隔を置いて、露な背中を打ち据ゑるのであつた。所罰に遭つて居る男は不自然な聲を立て、叫んだ。よく肥えた少佐は正面を歩き乍ら、其の叫び聲には注意を拂はないで、止み問なしにかう言ふのであつた。

『兵士たるものが人の物を盗むといふのは恥づべき事だ。軍人は正直で高潔で勇敢でなかりやならん。若し友達の物を盗んだ奴があれば、其の男には名譽心がないのだ。其奴は唾棄す可き陋劣漢だ。もつと、もつと！』

一人の若い將校は顔に疑惑と苦痛の色を浮べて、物問ひ度けな様子で通りすがりの副官を振り返り乍ら、所罰に遭つてゐる兵士の傍を離れた。

アンドレイ公爵は第一線へ出て、正面に沿うて進んで行つた。敵味方の戦線は左翼も右翼も遠く離れてゐるが、今朝軍使の往復した中央部隊は非常に近く相接して、互に顔を見合つたり、話し合つたりする事が出来る位であつた。敵の方からも味方の方からも、此處で戦線を固めてゐる

兵士等の他に、物好きな連中が大勢集つて、不思議な見馴れぬ敵を笑ひ乍ら、眺め合つてゐるのであつた。

戦線に近寄つてはならぬといふ禁令にも拘らず、上官達は早朝から押し掛けて来る物好きの連中を追つ拂ひ切れなかつた。戦線に立つてゐる兵士等は、何か珍しい物でも見せる人のやうに、もう佛蘭西軍の方を見ないで、押し掛けて来る人々の視察をし乍ら、退屈に苦しみ、交替を待ち兼ねてゐた。アンドレイ公爵は佛蘭西軍を眺めようと立ち止つた。

『見ろツたら見ろよ。』一人の兵卒が友達に、或る露西亞の銃兵を指して見せ乍らかう言つた。此の銃兵は一人の將校と共に戦線に近寄つて、佛蘭西の選抜兵と何やら早口に、熱した調子で話してゐた。

『何うだ、素敵に巧く喋るぢやないか。佛蘭西の奴も後から追つ附いて行けない位だ。おい何うだ、シドロフ！』

『待て、聞いてろよ。いや、巧いもんだなあ！』佛蘭西語の名人とされてゐるシドロフがかう答へた。

兵士等が笑ひ乍ら指さしてゐたのはドーロホフであつた。アンドレイ公爵はそれと氣附いて、會話に耳を傾け始めた。ドーロホフは中隊長と一緒に、自分の聯隊の屬してゐる左翼の方から、



此の接觸線へやつて來たのである。

『さあ、もつと、もつと!』前の方へ屈み掛つて、自分に取つて譯の分らない言葉を、一語たりとも聞き落すまいと焦慮り乍ら、中隊長はかう言つて嗾しかけた。『何うかもつと早くやつてくれ給へ、一體彼奴は何を言つてるんだね?』

ドーロホフは中隊長に答へなかつた。彼は佛蘭西選抜兵との烈しい争論で夢中になつてゐた。

彼等は當然さうある可き事だが、戦争の話をしてゐるのであつた。佛蘭西兵は埃太利を露西亞と一緒にして、露西亞軍が降伏してウルムから遁走したのだと論じた。ドーロホフは又露西亞は降服などしない、却つて佛蘭西軍を撃破したのだと論證した。

『此處からお前達を追ッ拂へといふ命令なんだから、本當に追ッ拂つて見せらあ。』とドーロホフが言つた。

『ぢや、お前達は御自慢の哥薩克兵と一緒に、擒にならないやうに用心しろ。』と佛蘭西の選抜兵が答へた。

佛蘭西側の見物人や聴手は笑ひ出した。

『以前スプーロフ將軍がやつたやうに、今度もお前達を踊らして見せるぞ。』とドーロホフは言つた。

『Qu'est ce qu' il chante? (何を彼奴は唱つてやがるんだ)』と一人の佛蘭西兵が言つた。

『Du 1<sup>re</sup> histoire ancienne (昔の話)』以前の戦争の事を言つてるのだと氣が附いて、今一人の佛蘭西兵がかう言つた。『皇帝陛下はお前等の「スプーラ」たつて、他の奴等と同じやうに、酷い目に合してお遣りになるから……』

『ボナバルト……』とドーロホフが言ひかけた。が、佛蘭西兵は遮つて、

『ボナバルトぢやない。神聖なる皇帝陛下だぞ……』と彼は腹立たしげに叫んだ。

『勝手にしやがれ、手前の皇帝陛下なんぞ!』

ドーロホフは露西亞語で兵隊式に亂暴な言葉遣ひで罵つて、銃を肩に擔ぐと其の場を離れて了つた。

『行きませう、イヴン・ルキッチ。』と彼は中隊長に言つた。

『成程、あれが佛蘭西語か。』戦線の兵士等ががやく話し出した。『さあ、今度はお前の番だ、シドロフ!』

シドロフは一寸目交ぜをして佛蘭西人に向ひ、譯の分らない言葉を全速力で喋り出した。

『カリ、マラ、タフ、サフ、ムーテル、カスカア!』自分の聲に表情の有る調子を附けようと苦心しながら、彼はこんな事を喋るのであつた。

『ホ、ホ、ホ！　ハ、ハ、ハ、ハ！　ウフ、ウフ！』など、いふ健やかで愉快さうな笑ひ聲が、どつと兵士等の間に起つて、それが自然と戦線を越えて、佛蘭西兵にも移つて行つた。それを聞いてゐると、今にもみんなが銃の装弾を抜いて爆發させ、其の儘各々の家へ分れて歸らねばなるまい、と思はれる程であつた。

併し銃は装填された儘で残つた。そして銃眼は家屋に設けられたのも堡壘にあるのも、依然として嚴めしげに前方を睨み、前車から外された砲車は前と變らず、互に相對して向き合つた儘であつた。

一六

右翼から左翼まで軍の全線を廻り盡したアンドレイ公爵は、當直佐官の言に依ると、戦場が一面に見晴らせるといふ、砲兵中隊を指して登つて行つた。此處で彼は馬を下りて、前車を外した四門の大砲の中、一番端の砲に近く立ち止つた。砲の前には歩哨の砲卒が歩いてゐて、將校と見て反り返らうとしたが、アンドレイ公爵が合圖をしたので、又規則正しい退屈な歩みを繰り返した。砲の後ろには前車、其の又後ろには繫馬杭と焚火があつた。右端の大砲に近く、枝で編んだ新しい小屋が有つて、其の中から將校連の賑かな話し聲が聞えた。

實際此の砲兵隊からは露西亞軍全部と、敵軍の配置が大部分展開して見えた。砲兵隊の眞向ひに當る小山の上には、シエングラベンの村が見えた。右にも左にも焚火の煙の間から、三箇所ばかりに佛蘭西軍の集團が見分けられた。尤も大部分は村の中央部や、山の向う側に居るらしかつた。村の左寄りに煙の蔭から、何か砲兵隊らしいものが見えたが、肉眼ではよく見分けが附かなかつた。我軍の右翼は佛蘭西軍の陣地の上に臨んでゐる、可成り険しい高地の上に配置されてあつた。其の中に歩兵隊が置かれて、一番端には龍騎兵が見えてゐた。今アンドレイ公爵が立つて陣形を觀察してゐる、トッシンの中隊を含む中堅部は、一番勾配の急な所で、友軍とシエングラベン村とを別つ小川に達する迄に、傾斜の烈しい昇降があつた。左方に陣取つた我軍は森に接してゐるが、其處では薪を切る歩兵の焚火が煙を立て、ゐる。佛蘭西軍の戦線は味方のそれよりも廣いから、敵が容易に我れの兩翼を迂廻し得る事は、一見して明らかであつた。又味方の陣地の後ろには險阻な深い谷があつて、それを越えて退却する事は、砲兵や騎兵に取つて困難であつた。

アンドレイ公爵は砲に凭れて紙入れを取り出し、自分の控へとして軍の配置圖を引き始めた。彼はバグラチオンに報告する積りで、二箇所に鉛筆で注意の印をして置いた。彼は第一にすべての砲兵隊を中央に集中し、第二に騎兵を後方——即ち谷の向う側に移さうと考へた。アンドレイ公爵は常に總指揮官の傍にあつて、大集團の行動や一般作戰に注目し、絶えず戦闘の史的研究に

のみ従事して居たので、將に起らんとしてゐる此の戦ひに付いても、自然大體の運動しか、想像に上らないのであつた。彼の頭には、次のやうな大掴みな場合はかり浮んで來た。『若し敵が右翼に向つて攻撃を試みたら』と彼は獨り言ちた。『キーエフ精兵隊とポドリスク獵兵隊とは、中央の豫備軍が到着する迄、自己の陣地を支持しなくてはならぬ。此の際龍騎兵は敵の側面を突いて潰走させる事が出来る。若し中央を突かれた場合には、此の高地に中央部の砲兵中隊を据ゑ、其の掩護の下に左翼を引いて、梯陣で谷の所まで退却する。』彼は獨りでこんな事を考へてゐた。よく有る事だが、彼が此の中隊で砲の傍に立つてゐる間ぢう、小屋の中から將校達の話聲が、止み間なく聞えて居たけれど、彼はそれが何の話やら少しも分らなかつた。と、不意に小屋から洩れる話聲の中である一人の聲が、恐しくしんみりとした調子で彼の耳朶を打つたので、彼は我ともなく耳を傾け始めた。

『違ふよ、君。』何だかアンドレイ公爵に取つて聞き覚えのある、氣持のいい聲がかう言つた。

『僕はね、死んでから何うなると言ふ事が知れたら、誰一人として死を恐れるものが無くなつて了ふ、とかう言ふんだよ。さうだらう、君。』

今一人少し年若らしい聲が遮つた。

『恐れたつて恐れなくなつて——何うせ遁れつこなしだ。』

『何時もく、恐しがる連中だ——本當に君等みたいな學者にや敵はんよ、』と第三の男らしい聲が二人を遮つた。『全く君たち砲兵將校は餘り學者過ぎるぜ、それと言ふのがウォーターカも下物も、みんな持つて歩けるからだよ。』

かう言つて男らしい聲の持主——歩兵將校らしい——は笑ひ出した。

『何うも恐しいんだ。』と第一の聞き覚えのある聲が語り續けた。『未知が恐しいんだ、それなんだよ。靈魂が天へ昇るとか何とか言つたつて……天など無くてたゞ空アトセスフェア氣がある切りだつて事を、我々はちやんと承知してゐるんだからね。』

再び男らしい聲が砲兵將校を遮つた。

『おい、君の草入り酒でも奢らんか、トゥッシン。』と彼は言つた。

「あ、これはあの靴なしで酒保に居た大尉だ。」此の哲學論をしてゐる、氣持のいい、聲の主に氣が附いて、アンドレイ公爵は満足な氣持でかう考へた。

『草入り酒もい、けれど、』とトゥッシンは言つた。『兎に角來世を理解するといふ事は……』

彼は終ひまで言ひ了らなかつた。此の時空中にひゆうといふ唸り聲が聞えたのである。段々と近く、段々と迅く音高く、段々と音高く迅く、砲弾は恰も必要な事を皆まで言ひ了らなかつたやうに、人間業とも思はれぬ力を以て砂煙を上げ乍ら、小屋から程遠からぬ地面に當つて破裂した。

大地は此の恐しい打撃に悲鳴を上げたやうに見えた。

此の刹那小屋の中から第一番に小柄なトゥッシンが、パイプを横咬へにした儘飛び出した。人の好さ、うな、伶俐らしい彼の顔は幾分蒼褪めてゐた。續いて男らしい聲の持主たる歩兵將校が出て来て、歩き／＼服の釦を掛け乍ら、自分の中隊の方へ駆け出した。

一七

アンドレイ公爵は馬上の儘砲兵中隊に止つて、今丸を飛ばした大砲から出る煙を眺めてゐた。彼の目は廣々とした戦場を走つてゐた。けれども、以前じつとしてゐた佛蘭西兵の集團が色めき始めたのと、左の方に見えてゐたのが實際砲兵隊であつた、といふ事だけしか分らなかつた。砲兵隊は未だ煙に包まれて居た。副官らしい二人の佛蘭西騎兵が小山の上を疾驅してゐる。散兵線の増兵の爲めでもあらう、小山の麓へ向けて餘り大きくない敵の縦隊が、進んでゐるのが明らか。指點された。未だ第一發の煙が散り失せない中、もう次の煙が現れ、續いて發射の音が聞えた。戦鬪は始つた。アンドレイ公爵は馬を返して、バグラチオン公爵を探し出す可く、グルントの方へ一散に歸つて行つた。彼は後ろで砲撃の音が段々頻繁に高まつて行くのを聞いた。味方も應戦し初めたらしい。下の方の、今朝軍使の往復した所では、小銃の發射が聞えてゐた。

ボナバルトの恐しい手紙を携へたレマルアが、たつた今ミユラートの所へ着いたばかりなのである。辱められたミユラートは自分の過失を償はうと思つて、直ちに麾下の兵を中央と兩翼に進出させ、夕方皇帝の到着迄に、自分の前に立つてゐる取るにも足らぬ一枝隊を、粉碎して呉れんと心構へた。

「始つた！ 到頭やつて来た！」 血が一層烈しく心臓に押し寄せるのを感じながら、アンドレイ公爵はかう考へた。「併し俺のトゥロンは何處にあるのだ、そして何んな工合に現れるのだらう。」と彼は考へた。

つひ十五分前に粥を食べたり、ウオートカを飲んだりしてゐた中隊の間を通り乍ら、彼は到處で同じやうに列を組んだり銃を解いたりしてゐる、兵士等の慌ただしい動作を見た。彼の心中に感じてゐると同じ生々した感情は、すべての顔の上に讀まれた。始つた！ 到頭やつて来た！ 恐しい、だが愉快でもある！」 兵隊から將校に至るまで、各々の顔がかう言つてゐた。

工事中の堡塞まで行き着かぬ中に、彼は秋の曇り日の暮に近い光を透して、自分の方へ向けてやつて来る騎馬の一隊を見附けた。先頭の人は哥薩克風の外套に灰色羊の毛皮の略帽をかぶり、白い馬に跨つてゐた。それバグラチオン公爵であつた。アンドレイ公爵は彼を待ち受けて立ち止つた。バグラチオン公爵は馬を止めた。そしてアンドレイ公爵に氣が附くと、一寸點頭いて見せ

た。彼はアンドレイ公爵が自分の見聞を報告してゐる間、じつと向うの方を眺めて居た。

「始つた！判頭やつて来た！」といふ表情は、バグラチオン公爵のがつしりした鶯色の顔にさへ讀まれた。彼は丁度寢の足りないやうな、どんよりとした、半ば閉ぢたやうな目附をして居た。アンドレイ公爵は不安な好奇心を抱き乍ら、此の顔に見入つて居るうちに、果して此の人は此の瞬間に、考へたり感じたりして居るのだらうか？若しさうとすれば何を考へ、何を感じてるのだらう？——それが知り度くて堪らなくなつた。「全體として、此のじつとして動かない顔の蔭に、何か隠れたものが有るのだらうか？」とアンドレイ公爵は彼を見詰め乍ら、自分で自分に問ひ掛けて見た。バグラチオン公爵は、アンドレイの言葉に同意を表するやうに首を傾けて、「宜しい。」と言つたが、それはまるで今起つてゐる事や、アンドレイの報告した事は、丁度自分の豫期したところである、といつたやうな表情であつた。アンドレイ公爵は餘り早く馬を驅つた爲めに、息を切らし乍ら早口に物を言つたが、バグラチオン公爵は「何も急ぐ事はない」と言ひ聞かせるやうに、東洋風のアクセントで格別ゆつくり發音した。併し彼は早足でトゥシンの中隊をさして馬を急がした。アンドレイ公爵も幕僚と共に其の後からついて行つた。バグラチオン公爵に随つてゐる人々は、公爵附の副官たる幕僚將校、傳令使のジェルコフ、美しい英吉利風の馬に跨つた當直佐官、單なる好奇心の爲め戰場に同行を許して貰つた文官の理事であつた。理事は顔の丸々とした肥え

た男であつたが、子供らしい悦の微笑を浮べて、馬の上に揺られながら邊を見廻してゐた。駱駝の外套を着て輻重の鞍に跨つたその姿は、輕騎兵や哥薩克や副官などの中に交つて、異様な對照を示してゐるのであつた。

『此の人は戦争が見度いと言ふんですが、』ボルコンスキイに理事を指し乍らジェルコフはかう言つた。『もう今からみづおちが痛いんださうですよ。』

『え、もう澤山ですよ。』と理事は晴れぐしした子供らしい、同時に狡さうな微笑を浮べ乍ら言つた。其の様子から察すると、ジェルコフの冗談の的となるのが嬉しくて、わざと實際より間拔に見せ掛けようと努めてゐるらしい。

『Très drôle, non monsieur prince (實に滑稽な公爵)』と當直佐官は言つた(彼は佛蘭西語で公爵といふ稱號に、何とか特別な言方があるのを覺えてゐるが、何うしてもそれが出て來ないのであつた。)

此の時一同はもう大分トゥシンの中隊に近寄つてゐた。と、彼等の前方に砲彈が落下した。

『今落ちたのは何ですか？』とナイーヴな微笑を浮べ乍ら理事が訊いた。

『佛蘭西のお菓子ですよ。』ジェルコフは答へた。

『あれで以て殺すんですな、して見ると？』と理事は訊ねた。『恐しいもんですね、實に！』と言つた彼は、満足のあまり顔の紐を弛めたやうに見えた。が彼が口を噤むか噤まないかに、

不意に又思ひ掛けなく、凄じいひうといふ響がしたかと思ふと、急に何かぐしゃぐしゃした物に打ツつかつて唸り聲が止んだ——シユ、シユ、シユ、グシャリ——と、少し右手に寄つて、理事の後ろから進んでゐた哥薩克が、馬と共に地上に崩れ落ちた。ジェルコフと當直佐官は鞍の上に身を屈め、急いで馬を傍の方へ轉じた。理事は哥薩克の眞向ひに立ち止つて、注意深い好奇心を以て眺め廻すのであつた。哥薩克は死んでゐたが馬は未だ躁あそいてゐた。

バグラチオン公爵は目を細めつゝ、振り向いた。そして今の動搖の原因を見附けると、「そんな下らん事にかゝらつてゐる事があるか？」といった風に、自若として又頭を元の方へ轉じた。彼は馬を止めて、巧妙な騎手らしい態度で心持半身を屈め乍ら、外套に絡まつた刀たを正した。刀は今一般に用いられてゐるのと違つて、昔風のものであつた。アンドレイ公爵はスプーロフが伊太利で、バグラチオンに刀を贈つたといふ話を想ひ出した。此の場合かうした追憶が殊に心よく感ぜられた。一同は先程ボルコンスキイが立つて戰場を視察した、かの砲兵中隊へ乗り近附いた。

『誰の中隊だ？』バグラチオン公爵は、砲車の傍に立つてゐる火工卒に訊いた。

彼は「誰の中隊だ」と訊いたけれども、實際は「お前等もうびくびくついてゐるんぢやないか？」と訊いたのである。で、火工卒もそれと覺つて、

『トッシン大尉であります、閣下。』雀斑そはがだらけの赤毛の火工卒は、反り返り乍ら愉快さうな聲

で叫んだ。

『さうか、さうか。』バグラチオンは何やら考へ合せらうにかう言つて、一番端の砲を指しながら、前車の列を通り過ぎた。

彼が近附かうとした時に、彼を始め幕僚の耳を聳せんばかりの發射の音が、此の大砲から響き渡つた。見る／＼砲を包む煙の隙から、砲に捕つかまつて満身の力を込め乍ら、元の位置へ押し戻さうとする砲卒等の姿が見えた。肩幅の廣い大柄な第一砲手が手に砲弾を持ち、兩股を廣く踏み開き乍ら車輪の方へ飛び退うつた。第二砲手は慄へる手で砲腔に装薬を入れた。小柄で猫背のトッシン大尉は、砲身に突き當り乍ら前の方へ駈け出して、將軍には氣も附かずに、小さな手を翳かざして彼方を見遣つてゐた。

『もう二度増せ、それで丁度よくなるんだ。』と彼は叫んだ。彼は其の細い聲に勇敢な調子を附けようと苦心したが、それは彼の體の恰好ふあに相應はなかつた。『第二砲車撃て！』彼は黄色い聲で叫んだ。『やツつける、メドゼーヂェフ！』

バグラチオンは此の將校に聲を掛けた。するとトッシンは普通軍人が敬禮するのとは全然違つて、僧侶が祝福でもするやうな、臆病で無器用な手附で三本指を帽子の庇へ當て乍ら、將軍の方へ近寄つた。トッシンの砲は凹地の攻撃を命ぜられてゐたのだが、彼は前方に見えるシエングラベ

ン村を焼弾で砲撃し始めた。村の前面には佛蘭西の大軍が進出してゐたのである。

どの方向を何で攻撃しろと言ふやうな命令は、誰からも受けて居なかつたので、彼は常々非常に尊敬してゐる、曹長のザハルチェンコと相談して、村を焼いたが宜からうといふ事に決めたのである。

『よし！』バグラチオンは將校の報告に對してかう答へると、何やら思ひ巡らすやうなさまで、すつかり目前に展けてゐる戦場を見廻すのであつた。右翼の方は何處よりも一番佛蘭西軍に接近してゐた。キーエフ聯隊の立つてゐる高地より一寸下つた、小川に近い凹地の上では、胸を掻き撈るやうな小銃の音がぱち／＼と鳴り續けた。又それよりもすつと右寄りの龍騎兵隊の向うに當つて、佛蘭西の縦隊が我が軍の側面を迂回せんとしてゐるのを、幕僚將校が公爵に指さして見せた。左翼の方は森の爲めに視野を遮られて居た。バグラチオンは中央の二箇大隊を、援助の爲め右翼へ移すやうに命じた。幕僚將校は若し此の二箇大隊が去つたなら、砲の掩護隊が無くなるだらうと、忌憚なく公爵に注意した。バグラチオン公爵は幕僚將校を振り返つて、鈍い目で黙つて彼を見詰めた。アンドレイ公爵にも幕僚將校の注意は至極尤もで、實際争ふ餘地がないやうに思はれた。併し此の時、凹地に陣して居る聯隊長の所から副官が駆け附けて、佛蘭西の大軍が低地から襲うて來た爲め、聯隊は潰走してキーエフ精兵隊の方へ退却しつゝある、といふ報告を齎ら

した。バグラチオン公爵は、承諾と賛成のしるしに首を傾けた。彼は竝足で右方へ馬を進め、佛蘭西軍を攻撃せよといふ命令を以て、副官を龍騎兵隊へ遣はした。が、其處へ送られた副官は三十分の後歸つて來て、龍騎兵聯隊長は既に谷の向うに退却した由を報告した。それは此の聯隊へ猛烈な砲火が注がれて、空しく兵員を失つたので、狙撃兵を森の中へ急がしたといふのである。

『よし！』とバグラチオンは言つた。

彼が此の砲兵中隊を立ち去らうとした時、左方の森の中でも發砲の音が聞えた。自分自身左翼の方へ駆け附けるには餘り遠過ぎたので、バグラチオン公爵はジェルコフを其方へ派遣した。それは古參の將軍に向つて(例のブラウナウでクトゥゾフから聯隊の檢閲を受けた將軍である)もう長く敵を支へる力が右翼に無いらしいから、出来るだけ急いで谷の向うへ退却するやうに、といふ命令を傳へる爲めであつた。トゥシンの隊やそれを掩護してゐる大隊の事などは、すつかり忘れられて了つた。アンドレイ公爵はバグラチオン公爵と他の上官達との會話や、彼等に授けられる命令などに注意深く耳を傾けた。が、驚く可き事には、命令といふやうなものは少しも發せられなかつた。バグラチオン公爵は、かうして必然と偶然と、各部々々の上官の意志に依つて行はれた一切の事が、よし自分の命令に依つて行はれたのではない迄も、自分の企畫に一致したものだといつた風附を見せようと努力してゐるに過ぎない。ボルコンスキイもこれに氣が附いた。併しこれ等

の事件が悉く偶發的で、指揮官の意志と没交渉であるにも拘らず、バグラチオン公爵の存在は非常に多くの効果を奏した。それはバグラチオンの示す世馴れた態度に依つて、慌ただしげな顔付をして近附いて来る上官達も、暫くすると落ち着いて了ふし、兵士や將校達も愉快さうに彼を迎へて、彼の前面では何となく活氣づいて來た。そして彼に對して自分の勇氣をひけらかすやうであつた。アンドレイ公爵もそれに氣が付いたのである。

一八

バグラチオン公爵は我が右翼の最高地點に出ると、下の方へ降り始めた。其處にはばちくと爆ぜるやうな小銃の音が聞えて、硝煙の爲めに一物をも見分ける事が出来なかつた。彼等が段々と凹地へ下るに従つて、次第に狀況が分らなくなつて來たが、本當の戦場の近づいた事は愈々明瞭に感じられるのであつた。時々負傷兵に出會すやうになつた。帽子もない血みどろの頭をした一人の兵士を、二人が、りで兩腋を支へ乍らやつて來た。負傷者はぜいぜいとしゃべれた息をつき乍ら、しきりに唾を吐いてゐる。大方丸が口か咽喉に當つたのであらう。其の次に一行に行き當つた兵士は、只一人銃もなしに元氣よく歩いてゐるが、大きな聲でお、くと呻き乍ら、新しい傷の痛みに堪へ兼ねて手を振るのであつた。其の手からは丁度瓶から溢れるやうに血が流れて、

ぼたく、外套の上に滴れてゐた。彼の顔は苦しさうといふより、寧ろびつくりしたやうな表情を示してゐた。此の男はつひ一分前に負傷したのである。一行は道路を越えて急な坂を下り始めた。坂の途中では幾人かの倒れた人達が目に入つた。又負傷しない人々をも交へた、一群の兵士等に行き會つた。兵士等は重苦しげに息をつき乍ら、坂を登つて行くのであつた。そして將軍の姿が見えてゐるのも構はずに、大聲に話し合つたり、手を振つたりしてゐた。

前方の煙の中にはもう灰色の外套の列が見えた。一人の將校がバグラチオンを見掛けるや否や聲高に怒鳴り乍ら、群をなして行く兵士等の後を追つ掛けて、引つ返すやうに命じた。バグラチオンは列に近づいた。列の間では彼處でも此處でも、ばちくと忙しげな發射の音が起つて、人の話聲や號令の叫びを揉み消すのであつた。空氣はすっかり硝煙が染み込んでゐた、兵士等の顔は何れもこれも、火藥に煤けて活氣付いてゐる。或る者は柵杖をがちやくやつてゐるかと思へば、或る者は袋から裝藥を取出して藥池に籠め、又或る者は發射してゐる。併し彼等が誰に向つて射撃してゐるかは、風にも散らされぬ硝煙の爲めに少しも分らなかつた。ぶんぐといふ音、しゆつしゆつといふ音、かうした快い響きは可成り頻繁に聞えてゐた。「一體これは何だらう？」これ等兵士の群に近寄りつ、アンドレイ公爵は考へた。「これは突撃であらう筈がない。何故つて動かないでじつとしてゐるから。又方陣であらう筈もない、隊形がまるで違つて居る。」



聯隊長は瘦せた一見弱々しさうな老人であつた。臉は半分以上老人らしい目を蔽つて、その顔に謙遜な表情を帯びさせてゐた。彼は氣持のよい微笑を浮べながら、バグラチオン公爵に近附いて、家の主が貴顯の客に對するやうに彼を迎へた。彼はバグラチオン公爵に向つて、自分の聯隊を佛蘭西騎兵が襲撃した事、そして其の襲撃は撃退されたが、聯隊は半分以上の人員を失つた事を報告した。聯隊長は自分の聯隊で生じた出來事に此の兵語を適用して、「襲撃は撃退された」と言つたのだが、實際の所自分に委任されてゐる隊の中で、此の三十分間に何が生じたのやら、彼自身にも分つてゐなかつた。果して襲撃が撃退されたのか、或ひは襲撃の爲めに自分の隊が潰滅したのか、正確に言ふ事が出来なかつた。唯戦闘の始つた頃、聯隊へ砲彈や榴彈が飛んで兵員を殺し始め、やがて暫く経つて誰かが『騎兵だ！』と叫ぶと、味方が射撃を開始したと、これだけの事を知つてゐるばかりであつた。かうして今迄射撃を續けてゐるが、其の目標はもう疾くに姿を隠した騎兵でなくて、凹地に現れて友軍を射撃してゐる佛蘭西歩兵であつた。

バグラチオン公爵は、それはみな自分が希望し、且つ豫想してゐたと全然同じ事だ、といつたやうに頭を傾けた。そして副官の方へ振り向いて、今傍を通つて來たばかりの第六獵兵聯隊の二箇大隊を、山から此方へ移すやうに命じた。此の瞬間バグラチオン公爵の顔に起つた變化は、アンドレイ公爵を驚かした。彼の顔は暑い日に水の中へ飛び込まうとして、最後の力を奮つて疾驅

する人によく有る、一生懸命な幸福らしい決斷を現してゐた。今迄寢不足のやうにどんよりした眼附も、故意とらしく考深さうな様子も失くなつてゐた。丸い、つかりした隼のやうな兩眼は、幾分輕蔑したやうな勝ち誇つた色を帯びて前方を眺めたが、別段何に其の視線を落ち着けようとするのでもない。尤も彼の舉動には以前の遲鈍と中庸とが残つてゐた。

聯隊長はバグラチオン公爵に向つて、後へ引つ返すやうに懇願し始めた。此處にゐる事があまりに危険な業だつたからである。『何うぞ閣下！お願ひでございます！』と彼は相槌打つて貰ひ度さに、幕僚將校の方をちよいと見遣り乍らかう言つた。此方は其の度に外方そとを向いた。『あれ、御覽なさいまし！』彼は邊りで絶えず甲高い聲を揚げたり、唱つたり、口笛を吹いたりしてゐる彈丸に、上官の注意を向けさせるのであつた。彼の言葉の哀願と譴責の調子は、丁度大工が斧に手を掛ける主人に向つて、『わたくし共にしては馴れ切つた仕事でございますが、あなた方は直ぐ手に肉刺こめを出してお了ひになります。』といふやうな風であつた。彼はまるでこれ等の彈丸が、決して自分を殺すやうな事はないと、信じ切つてゐるやうな調子で話したが、其の半ば閉ぢた目は彼の言葉に、一層對手を説伏せずに置かぬやうな表情を與へるのであつた。當直佐官も聯隊長と一緒になつて懇願し始めた。併しバグラチオン公爵は彼等に答へないで、唯射ち方止めを命じて、今應援の爲め此方へ向つてゐる二箇大隊に場所を與へるやう、隊形の轉換を命令した。彼がかう言

つてゐる時、丁度目に見えぬ大きな手の仕業か何ぞのやうに、凹地を蔽つてゐた煙の幕が、吹き起る風につれて、右から左の方へ棚引いた。すると眞向ひの山と、それに沿うて動いてゐる佛蘭西軍とが、彼等の前に現れた。一同の目は我れともなしに、此方を指して進み乍ら、地形の凹凸に随つて蜿々と續いてゐる、此の佛蘭西の縦隊へ注がれたのである。もう彪毛立つた兵士の帽子まで見え出した。もう將校と兵士との區別さへ出来るやうになつた。軍旗が柄に當つて、はたはたと鳴るのも辨別された。

『中々見事な行進だなあ。』バグラチオンの幕僚の中で誰やらかう言つた。

縦隊の先頭はもう凹地の中へ没して了つた。衝突は傾斜の此方側で起るに相違ない。

實戦に加つてゐた我聯隊の殘部は、急がしげに列を作つて右の方へ立ち去つた。其の蔭から第六獵兵聯隊の二箇大隊が、遅れた連中を追ひ散らすやうにし乍ら、隊伍整然と近寄つて來た。彼等が未だバグラチオンの傍まで來ない中に、もう大群集が一齊に踏みしめると、つしりと重々しい足音が聞えた。左翼の方から一番バグラチオンに近い所を、愚かしい仕合せさうな表情をした、丸顔で格幅のい、一人の中隊長が歩いて居た。これは例のトッシンの假小屋から飛び出した將校である。見受けた所彼は此の瞬間、立派に上官の傍を通過せねばならぬといふより他、何にも考へて居ないらしかつた。

彼は些かの努力もなく半身を反り返らせ、自分の歩調に隨ふ兵卒等の重苦しい足取とはまるで違つた軽い歩き振りで、晴れがましいやうな自足の色を浮べ乍ら、筋肉の發達した足をすつくと運んで居た。彼は細身の抜刀（武器とは思はれない程小さな反の強い刀であつた）を股の邊に支へ、上官の方と後方とを交るゝ見返り乍ら、歩調を亂さぬやうにして、強健らしい體を自由にしなくと曲けるのであつた。察する所彼の全精神の力は、此の上なく立派に上官の傍を通過しよう、といふ事だけに注がれてゐるらしい。而も見事にそれを實行して居ると感じたので、彼は非常に幸福であつた。「左右……左右……左右……」と一足毎に心の中で繰り返してゐるやうに見えた。十人十色の鹿爪らしい顔をした、背囊や銃の重みに壓された兵士等の姿が、壁のやうに連りながら此の拍子につれて動いて行つた。これ等數百の兵士等は一人一人心中で、一步毎に「左右……左右……」といつてゐるやうな工合であつた。肥満した少佐はあく息を吐き乍ら、歩調を亂して道端の灌木を迂回した。又落伍した兵卒は自分の不規律に慍えたやうな顔附で、息を切らしながら、駈足で中隊に追ひ附かうとしてゐる。と、砲彈が空氣を壓縮し乍ら、バグラチオン公爵と其の幕僚の頭上を掠め、「左右——左右！」の足拍子に合せて縦隊に落下した。「列を合せ！」中隊長の氣取つた聲が響いた。兵士等は砲彈の落下した箇所で、弓狀に彎曲し乍ら何物かを迂回した。年取つた翼下士の騎兵は暫く戦死者の傍に留つてゐるが、やがて自分の中隊に追ひ

附いて、飛び上るやうに踏替へをして歩調を合せ、腹立たしげに邊りを見廻した。何となく威嚇するやうな沈黙と、一齊に地を打つ足の單調の響の陰から、「左右……左右……左右……」といふ聲が聞えるやうな氣がした。

『皆しツかりやつて呉れ！』とバグラチオン公爵は言つた。

『……下の爲めに！』といふ叫びが列の間に起つた。左の方から進んでゐた難かしい顔付の兵隊は、怒鳴り乍らバグラチオンの方へ視線を向けたが、其の表情は、「自分で心得てゐますよ」といふ風に見えた。又一人は氣が散るのを恐れるやうに、振り向かうともしないで、大きく口を開けて喚き乍ら通り過ぎた。

やがて停止して背囊を下すやうに命令が下つた。

自分の傍を通り過ぎた列をすつかり巡回して、バグラチオンは馬から下りた。彼は手綱を哥薩克に渡し、次に外套を脱いでこれも矢張り従者に渡すと、兩足を踏みひろけて、頭の軍帽を正すのであつた。佛蘭西縦隊は數人の將校を先頭にして、山の下から現れた。

『では無事に！』バグラチオンはしつかりした明瞭な聲でかう言つて、一寸正面の方へ振り返つた。そして軽く兩手を振り乍ら、騎兵出身の人に特有の危かしい難かしさうな足取で、でこぼこした原を前方へ進んで行つた。アンドレイ公爵は何かしら強い不可抗力が、自分を前方へ牽いて

行くのを感じた。彼は非常な幸福を覺えた。

もう佛蘭西軍は近々と迫つて來た。バグラチオン公爵と並んで進んでゐたアンドレイ公爵は、もう明かに佛蘭西兵の負革や赤い肩章や、顔すらも見分ける事が出來た（彼は脚絆穿きの兩足を外輪に擴けて、やつとの事で山を登つて來る、一人の年寄つた佛蘭西將校をはつきりと見留めた）。バグラチオン公爵は新たに命令を發しないで、依然として無言のまま、列の前に立つて進んでゐた。不意に佛蘭西兵の間に銃聲が一つ響くと、續いて二つ三つ……やがて混亂した敵の全線に亘つて、煙が漲り銃聲がばち／＼と響き出した。味方の兵が五六人倒れたが、其の中には例の愉快さうに一生懸命歩調を取つてゐた、丸顔の將校も交つてゐた。併し最初の一發が響き渡ると同時に、バグラチオンは後を振り向いて叫んだ。「ウラー！」

『ウラーアアアア！』といふ引き伸したやうな叫喚が、味方の全線に響き渡つた。そしてバグラチオン公爵を追ひ越して、互に追つ掛け合ひ乍ら、整つては居ないけれど愉快けな生き／＼した群を作つて、味方は混亂した佛蘭西軍の後を追つて山を馳せ下つた。

## 一九

第六獵兵聯隊の突撃は右翼の退却を安全にした。忘れられたトゥシンの中隊は、又シエングラベン

村を焼き拂つて、中央に於ける佛蘭西軍の動作を停止した。佛蘭西軍は風に擴る火事を消さうとして、我軍に退却の餘裕を與へた。谷を越えて行く中央部隊の退却は、慌ただしく騒々しく行はれたが、それでも各隊は退却の際に指揮を間違へるやうな事をしなかつた。併しアゾフ及びボドーリスク歩兵聯隊と、バヴログラードの輕騎兵聯隊から成り立つてゐる左翼は、ランヌ指揮下に於ける優勢な佛蘭西軍に、同時に攻撃され迂回されて、すっかり混亂に陥つて了つた。バグラチオンはジェルコフを左翼指揮官の將軍に遣はして、即時退却するやうに命じた。

ジェルコフは帽子から手を放さずに、元氣よく馬を驅つて駆け出した。併しバグラチオンの傍を離れるか離れないかに、早くも氣力が彼に背いた、彼は打ち克ち難い恐怖に襲はれて、危険な方面へ出て行く事が出来なかつたのである。

左翼の隊に近附いた時、彼は戦闘の行はれてゐる正面へ出ないで、居るべき筈のない所で、將軍や長官達を探しに掛つたので、到頭命令を傳へる事が出来なかつた。

左翼の指揮権は古參順に依つて、彼のブラウナウでクトゥゾフの檢閲を受けた聯隊——例のドーロホフが一兵卒として勤務してゐる、聯隊の長官に屬してゐた。所で、左翼末端部の指揮権はロストフの勤務してゐる、バヴログラード聯隊の聯隊長に屬してゐた。其の爲めに一つの紛擾が生じたのである。此の兩聯隊長は互に何か憤懣を感じ合つて、もう右翼では疾くに戦闘が開始され、

佛蘭西軍が攻撃に着手してゐるにも拘らず、對手を侮辱し合ふ事を目的とした交渉に、夢中になつてゐたのである。騎兵聯隊も歩兵聯隊も目前に迫つた戦闘に對しては、本當に準備してゐなかつた。聯隊の兵員は將軍より一兵卒に至る迄、戦闘を豫期しないで呑氣な仕事に従つてゐた——騎兵では馬を水かひ、歩兵では薪を集めてゐた。

『けれどもあの人は階級わたしより高くありますから、騎兵聯隊長の獨逸人は赤くなつて、使に來た副官に向つてかう言つた。『まあ、あの人のし度いやうにさせて置くが宜くあります。が、わたし自分の部下を犠牲にする事出来ません。喇叭手！退却！』

併し事態は段々急になつて來た。砲聲銃聲は一緒になつて、右翼にも中央にも轟き始めた。そしてランヌ部下の佛蘭西狙撃兵の上衣が、もう水車場の土手を此方側へ越えて、射て銃の構へで二列横隊に整列した。歩兵の聯隊長は、びよい／＼飛び上るやうな足取で馬に近寄り、ひらりと其の上に跨ると、恐しく反り返つて脊を高くし乍ら、バヴログラード聯隊長の許へ赴いた。二人の聯隊長は胸に毒念を潜めつゝ、恭しい會釋を以て相對した。

『しつこいやうですがね、』と少將は言ひ出した。『わたしは何うも兵の半數を森の中へ残して置くやうな事は出来んです。わたしは君にお願いします、わたしは君にお願いします。』と彼は繰り返した。『陣地を占領して、攻撃に着手して下さらんか。』

『わたしは閣下にお願します、他人の事干渉せんで下さい。』と大佐は熱くなつて答へた。『若し閣下が騎兵將官であつたなら……』

『わたしは騎兵將官ぢやないです、大佐、併しわたしは露西亞帝國の將官ですぞ。若し君がそれを御存じだつたら……』

『よく存じてあります、閣下。』不意に大佐は馬を進め乍ら、紫色になつてかう叫んだ。『併しいつそ、戦線へ出て、よく御覽なさつたらよくありませんか、そしたら此の陣地が何の役にも立たん事お分りになりませう。わたし閣下の満足の爲めに自分の聯隊を滅す厭であります。』

『君は前後を忘れてゐるんですね、大佐。わたしは自分の満足を求めてるんぢやありません。そんな事を黙つて言はせて置く譯に行かんです。』

將軍は大佐の勇氣較べの申込を承諾して、胸を張り眉を擧め乍ら、戦線を指して一緒に馬を進めた。それは恰も自分達の不和は其處で——戦線で——弾丸の下でのみ決せられねばならぬ、と信じ切つてゐるやうであつた。彼等は戦線へ出た。幾つかの弾丸は二人の頭上を飛び過ぎた。二人は黙つて立ち止つた。實際の所戦線へ出て見ても何もなかつた。何故と言つて、彼等が先程まで立つてゐた所からでも、かういふ灌木や谷の中に騎兵の活動する餘地のない事、佛蘭西軍が既に左翼を迂回してゐる事は、明らかに見えてゐたからである。將軍と大佐は、今にも蹴合ひに掛

らうと身構へてゐる二羽の雄鶏のやうに、相手の臆病の兆を空しく待ち設けつ、嚴めしく意味ありけに何時迄も互の顔を見詰めてゐた。が兩方とも試験に及第した。言ふ迄もなく、何方も「あれは俺より先に弾丸の中から逃げ出した」など、相手に言はれ度くなかつたので、打つちやつて置いたら、何時迄其處に立ち通してゐるか知れない程であつた。が、此の時殆ど彼等の直ぐ後ろの森の中で、ぱちくはぜるやうな小銃の發射の音と、わアツといふ多くの聲の入り錯つた鈍い叫喚が聞えた。それは薪を取りに森へ入つてゐた兵士等に、佛蘭西軍が襲ひか、つたのである。輕騎兵隊はもう歩兵と一緒に退却する事が出来なくなつた。彼等は左方から佛蘭西軍に、退却の途を遮斷されて了つた。今はもう如何に地形が不利であらうとも、自ら血路を切り開く爲めに、是非攻撃せねばならぬ事となつた。

ロストフの勤務してゐる中隊は、やつと馬に乗つたか乗らぬかに、もう敵に直面して立たされて了つた。かのエンス河の橋上に於ける如く、又もや中隊と敵との間に何者も無くなつた。そして兩者の間を分つものとしては、生者と死者を分つ一線のやうな、恐しい未知と畏怖の線が横たはるのみであつた。一同は此の一線を直覺した。果して此の線を超えるか何うか、又超えるとすれば何んな風か？ といふ疑問が、人々の胸を波立たすのであつた。

隊の前面へ聯隊長が近附いて、將校達の間に對して腹立たしさに何やら返事をした。そして

滅茶苦茶に自説を主張する人のやうな調子で、何か命令を下した。誰もはつきりした事を言はなかつたけれど、突撃の噂は中隊ぢうに擴まつて了つた。整列の號令が響き渡ると、暫くして鞘を拂ふ刀の音が、帛を裂くやうに聞えた。併しそれでも、未だ誰一人動き出すものが無かつた。左翼の各隊は、歩兵も輕騎兵も一樣に、上官自身すら何うして、か分らないで居るのだ、といふ事を悟つた。長官の逡巡の氣持は部下の各隊にも感染したのである。

「早く、早くやつて呉れ、ばい、！」今迄友達から色々聞かされてゐた、突撃の快感を味ふ時機が、遂に到來したのだと感じながら、ロストフは心の中でかう思つた。

『進め、』といふヂェニソフの聲が響いた。『速足——進めッ！』

第一列で馬の胴が動き始めた。グラーチックは手綱を引いて、自分から動き出した。

ロストフは右手の方に輕騎兵の先頭の數列を見た。ずつと先の方には何かよく分らないが、多分敵兵と思はれる暗い一條の帯が見えた。銃聲は聞えてゐたけれど、遠い所であつた。

『歩度を伸せ！』かういふ號令が聞えた。ロストフはグラーチックが早足から驅足に步調を變へ乍ら、尻に力を入れるのを感じた。

彼は豫め馬の動作を推察する事が出来た。彼は次第に愉快になつて來た。始め彼は前方に孤立してゐる一本の木を認めた。此の木は最初前方にあつた。あの恐しく思はれる線の真中にあつた。

所がもう此の線も通り越して了つたから、何も恐しい物はない、たゞ次第に心持が愉快に生き／＼して來るばかりだ。「お、俺は彼奴を擲ッ斬つてやるんだ。」とロストフは刀の柄を握り緊め乍らかう思つた。

『ウラァァァァァ！』と叫ぶ人々の聲が一時に轟いた。「さあ、今こそ誰でもやつて來て見ろ。」グラーチックに拍車を當て乍ら、ロストフはかう考へた。そして他の者を追ひ越し／＼、全速力に飛ばすのであつた。前方にはもう敵が見えてゐた。と、不意に何者か幅の廣い箒を振つたかのやうに、中隊全體をさつと一糞した。ロストフは擲き斬る用意に刀を振り上げた。が此の時、今迄目の前を疾驅してゐた兵卒のニキーチェンコが、急に彼の傍を離れて了つた。ロストフは丁度夢でも見てゐる時のやうに、不自然な程の速力で前方へ突進を續けてゐる癖に、又それと同時に一つ所でじつとしてゐるやうな心持がした。見覚えのある輕騎兵のボンダールチュクが、後ろから彼の上に乗れ懸りさうになつて、腹立たしげに睨み付けた。が、ボンダールチュクの馬は驚いて一跳ねすると、直ぐに傍を駆け抜けて了つた。

「一體何うして俺は動かないんだらう？——俺は落馬して殺されたんだ。」一瞬間に彼は自問自答した。彼はもう原中にたつた一人取り残されてゐた。走り動く馬と輕騎兵の背中のに代りに、彼は黙々たる大地と刈り入れの濟んだ畑を、自分の周りに見出したのである。温い血が彼の下にあ

つた。「いや俺は負傷したのだ、そして馬が殺されたんだ。」グラーチックは前足で起き上らうとしたが、又ばたりと倒れて主人の足を敷いた。其の頭からは血が流れてゐる。馬はびくり／＼と跳いたけれど、立ち上る事が出来なかつた。ロストフも立ち上らうと思つたが、矢張り同じやうに倒れて了つた。劔が鞍に引つ掛つたのである。味方が何處にゐるのか、佛蘭西軍が何處にゐるのか、彼にはちつとも分らなかつた。邊りには誰一人居なかつた。

足を抜き出して彼は立ち上つた。「二つの軍隊をあんにかつきり分けてゐた、あの恐しい線は今何處に、何の方角にあるのだらう？」と彼は自ら問うたけれど、答へる事が出来なかつた。「何か悪い事が俺の身に起つたのではないか知らん？一體こんな場合がしよ、うち有るものかなあ。そしてこんな場合何うしたらいいんだらう？」と彼は立ち上りながら自分で自分に訊いて見た。此の時何か餘計なものが、麻痺した左手にぶら下つてゐるやうな氣がした、手首はまるで他人のもの見たいに思はれた。彼は血を見付けようとし乍ら、空しくその手を眺め廻した。「や、あすこに人が来る、ふと自分の方へ走つて来る幾人かの人に氣が附いて、彼は喜ばしげにかう考へた。「あの人達が俺を助けて呉れるんだ！」この人達の先頭に立つて、奇妙な尖帽を冠つて青い外套を着た、髪が黒い、顔の日に焼けた、鉤鼻の男が走つて来る。未だ二人、いや未だ大勢其の後から走つて来る。其の中の一人が何か露西亞語でない奇妙な事を言つた。後ろから進む同じ尖帽を冠

つた人々の間に、露西亞の輕騎兵が一人交つてゐるが、大勢で其の手を捕まへて、後からは其の乗馬を曳いて来る。

「屹度味方の俘虜だ……さうだ。一體俺も矢張り捕まるのかしら？あれは何者だらう？」自分で自分の目を信じ兼ねつ、ロストフは考へ續けた。「あれが佛蘭西人だらうか？」彼は次第に近寄つて来る佛蘭西兵を見据ゑた。そしてたつた一分前には、只此の佛蘭西人の所へ駈け附けて、片端から擲き斬るつもりで、夢中で突進してゐたにも拘らず、今は敵がこんな近い所にゐると云ふ事が、自分の目を本當にし兼ねる程恐しかつた。「彼奴等は何者だ？何しに走つてゐるんだ？それとも俺を目指してゐるのかしら？俺の方へ走つて来るのかしら？一體何の爲めに？俺を殺しに？俺を？あれ程みんなに愛されてゐる俺を？」ふと自分に對する母や家族や親友などの愛が、彼の頭に浮んだ。すると、自分を殺さうとする敵の意圖が、有り得可からざる事のやうに思はれた。「だが、本當に殺さうといふのかも知れんぞ！」

彼は十秒間以上其の場を動かうともしずに、自分が何んな位置にゐるかを悟らないで、ぼんやり立つてゐた。先頭に立つた鉤鼻の佛蘭西兵は、顔の表情を見分ける事の出来る程近々と駈け寄つたが、銃劔を提げて息を凝しつ、馳せ近附く、馴染の無い顔の擻猛な表情は、ロストフを冷りとさした。彼は拳銃を手を取つたが、對手に向けて火蓋を切らうとはしないで、それを佛蘭

西兵目掛けて抛け附けると、有りたけの力を出して藪の方へ駆け出した。此の時はもうエンス河の橋へ赴いた時のやうな、疑惑と闘争の感じはなく、只々犬を免れて走る兎のやうな感情が彼を領してゐた。只自分の若々しい幸福な生に對する一心不亂な恐怖の情が、彼の全存在を捕へたのである。まるで鬼ごつこの時のやうに猛烈な勢で、彼は畑と畑との境界を跳り越えた。そして時々蒼白めた、若々しい、人の好き、うな顔を後ろへ振り向けながら、原中を飛んで行つた。振り返る度に恐怖の寒氣が背中を流れた。「いや、いつそ見ない方がいゝ！」と考へたが、灌木の藪に近附いた時、今一度振り返つて見た。佛蘭西人は大分遅れて了つて、彼が振り返つた瞬間に、先頭の男は驅足を竝足に換へて、振り返りさま後から來る仲間に向つて、何やら烈しく怒鳴り附けてゐた。ロストフは立ち止つた。「何だか様子が變だ。」と彼は思つた。「あの連中が俺を殺さうとするなんて、有り得可からざるこつた。」が其の間にも彼の左の手は、ニブード(我人貫 六百)もある錘を吊したやうに重かつた。彼は最早先へ進む事が出来なかつた。佛蘭西兵も同様に立ち止つて彼を狙つてゐた。ロストフは目をつぶつて屈み込んだ。一發二發、丸が唸りを生じ乍ら傍を掠めた。彼は最後の力を絞つて、左手を右手に握るや、一散に灌木の藪まで駆け附けた。藪の中には露西亞の狙撃兵が居た。

森の中で不意を襲はれた歩兵聯隊は、あはて、森の外へ駆け出した。そして中隊と中隊とが一緒に入り錯りながら、亂雑な群をなして遁れ走つた。一人の兵卒が憎えたやうに、「遮斷された！」と言つた。戦場でこそ恐しいけれど、平時は意味もない此の言葉は、恐怖の感情と共に全群集に傳つたのである。

『迂回された！遮斷された！もう駄目だ。』と遁れ走る人々の聲が叫んだ。

聯隊長は後方に射撃の音と叫び聲を聞き附けた時、自分の聯隊に何か恐しい事が生じたのだと悟つた。そして自分のやうに永年勤務して、何一つ失策をした事のない模範的將校が、怠慢とか不注意とかいふことで、上官から譴責されることが無いとも限らぬ——かうした想念が極度に彼を脅かしたので、彼は即座に濫太い騎兵大佐の事も、自分の將軍としての威嚴も——又危険も自衛の感情も忘れて了つて、鞍の前橋にしがみ付き、馬に拍車を當て乍ら、雨霰と注いでほめるけれど、幸にして彼の傍を掠めて過ぎる彈丸の下を潜つて、聯隊の方へ疾驅した。彼が望んでゐるのは只一つしかなかつた。即ち事の真相を知つてこれに援助を與へ、若し自分に過失があつたら、何んな事があらうとも是非それを正し、二十二年間勤務して、曾て一度も注意を受けた事のない、



模範的將校たる自分が、非難を蒙ることの無いやうにしなければならぬ。

運よく佛蘭西兵の間を駆け抜けて、彼は味方の兵が走つて居る森の彼方の、野原をさして駆けつけた。兵士等は號令を聞かうともしないで、坂を馳せ下つて行く。それはかの戦闘の運命を決する、精神的動搖の瞬間が到來したのである。これ等の亂れに亂れた兵士の群が、指揮官の聲に従ふか、さなくば其の方を一寸振り返つただけで、矢張り先へくと逃げて行くか、二つに一つである。以前兵士等にとつてあれ程恐しかった聯隊長が、見違へる程物凄く紫色の顔をして、指揮刀を振り廻しつ、恐しい聲を振り絞つて、死物狂ひに叫んでゐるにも拘らず、兵士等は依然としてがやく／＼話し合つたり、空中に發砲したりし乍ら走り續けて、號令に耳を假さうともしなかつた。戦闘を決する精神的動搖は、恐怖に勝を占められたやうに見えた。

將軍は叫喚と硝煙の爲めに咳き込み乍ら、絶望して立ち止つた。もう一切が失はれたやうに感じられた。併し此の時、今まで我軍を追撃してゐた佛蘭西兵が、それらしい原因もないのに急に引つ返して、森の蔭に隠れて了つた。と、森の中に露西亞の狙撃兵が現れた。これは例のチモーヒンの中隊であつた。此の中隊だけは森の中で秩序を保つて踏み止り、森の傍なる溝の中に潜んでゐて、不意に佛蘭西軍を襲撃したのである。チモーヒンは死物狂ひの叫喚を上げて佛蘭西軍に跳り掛り、狂人が酔つ拂ひのやうな勢で、刀を振り廻し乍ら敵を襲つたので、佛蘭西軍ははつと思

ふ間もなく、武器を捨て、逃げ出した。チモーヒンと並んで走つてゐたドーロホフは、無理に力を入れて一人の佛蘭西兵を斬り殺し、第一番に降伏した將校の襟首を引つ掴んだ。逃げ走つてゐた兵士等は引つ返し、大隊は集合した。そして我左翼を二分せんとした佛蘭西軍は、寸時の間に壓迫されて了つた。豫備隊も本隊に結合して、遁走兵も踏み止つた。

聯隊長はエコノーム少佐と橋の袂に立つて、退却して行く中隊をやり過してゐたが、不意に一人の兵士が彼に近寄つて鎧を捕へ、殆ど馬に靠れ掛るやうにした。彼は青みが、つた、上等の羅紗の外套を着てゐたが、背囊も帽子もなかつた。彼は頭に繻帶を巻き、肩に佛蘭西式の藥彈盒を吊し、手に將校用の軍刀を握つてゐた。兵士は蒼い顔をしてゐたが、其の空色の目は傲慢に聯隊長の顔を見詰め、口は微笑を浮べてゐた。聯隊長はエコノーム少佐に命令を授けるのに忙しかつたけれど、此の兵士に注意を向けないでは居られなかつた。

『閣下、此の通り捕獲品が二箇あります。』佛蘭西の軍刀と藥盒を指し示しながら、ドーロホフはかう言つた。『そして將校を一人捕虜にしました。中隊の逃げ足を止めたのはわたしでありませう。』ドーロホフは疲勞の爲めに重々しく息を吐き、一句々々切り乍ら話すのであつた。『中隊全部が證人です。何うぞお憶え置きを願ひます。閣下！』

『よし、よし。』と言つて、聯隊長はエコノーム少佐の方を向いた。

けれどもドーロホフは退かなかつた。彼は繃帯を解いて引つべがし、毛の中に乾固つてゐる血を示した。

『銃剣の傷であります。わたしは正面に踏み留つて居ました。お憶え置きを願ひます、閣下。』

トゥッシンの砲兵中隊はすっかり忘れられてゐたが、やつと戦闘の終る頃になつて、何時迄も中央方面に砲聲が聞えるので、バグラチオン公爵は始め當直佐官を、それから又暫くしてアンドレイ公爵をそこへ遣し、出来るだけ迅速に退去するやうにと命じた。トゥッシンの砲の傍に配置されてゐた掩護隊は、戦闘の中頃何かの命令で去つて了つた。併し中隊が何時迄も佛蘭西軍を砲撃して、捕獲されないで済んだのは、只何者にも保護されない四門の砲が、かうした大膽な事をしようとは、敵も夢すら想像しなかつたからに過ぎない。それ所ではない、此の砲兵隊の猛烈な動作から押して、敵は此の中央に露軍の主力が集中されてゐる事と思つて、二度まで此の地點の攻撃を試みたが、二度とも此の高地に孤立してゐる四門の砲に、霰弾を以て撃退されたのである。

バグラチオン公爵の立ち去つた後間もなく、トゥッシンはシュングラベン村の焼打に成功した。

『見ろ、騒ぎ出したぜ、燃える〜！何うだあの煙は！巧いぞ！素敵ぢやないか！あの煙を見ろ、あの煙を！』と砲手等は元氣附いて口々に呼んだ。

すべての砲は命令もないのに火事の方面へ向けられた。一發放す度に兵士等は後から追ッ掛けるやうに、『巧いぞ！さうだ〜！いや貴様は：：豪いぞ！』など、叫ぶのであつた。火事は風に煽られて見る〜擴つて行つた。村境まで進出した佛蘭西縦隊は、後ろへ引つ返した。併し此の失敗に對する報復か何ぞのやうに、敵は村から右寄りの方へ十門の砲を引き出して、トゥッシンの隊を目掛けて撃ち始めた。

火事の爲めに呼び醒された子供らしい歡喜の情と、佛蘭西軍砲撃の成功が齎した昂奮の爲めに、砲手等は此の砲兵隊に少しも氣が附かなかつた。そして二箇の砲弾と、續いて又四箇の砲弾が砲の間に落下して、一箇が馬二頭を斃し、今一箇が砲車長の足を切斷した時、初めてはつと思つたのである。併し一旦燃え立つた士氣は容易に衰へなかつた。只氣分が變つただけである。馬は豫備砲車から新しいのを連れて來て附け替へたし、負傷者は片附けて了つた。そして四門の砲は、十門の砲を有する中隊の方へ向けられた。トゥッシンの同僚將校は戦闘の始めに斃れ、一時間中に四十人の砲手の中から、十七人を奪はれて了つた。併し兵士等は、それでも矢張り愉快さうに元氣がよかつた。たつた二度、程遠からぬ下の方に佛蘭西兵が現れたので、其の時霰弾を浴せ掛けたのである。

動作の弱々しく無器用な小男のトゥッシンは、絶えず從卒に向つて、今の駄賃にもう一服と命じた。

そしてパイプから火を吹き散らし乍ら、前の方へ駆け出して、小さな手を翳して敵を眺めるのであつた。

『さあ、やっつけて了へ！』かう言つて彼は自分で砲の車輪に手を掛け、螺旋を廻しなどした。絶間なく聞える耳を聳するやうな砲聲に、屹度一々身慄ひさせながら、トッシンは始終パイプを咬へたまま、砲から砲へと煙の中を飛び廻つた。そして、時には狙ひをついたり、時には装薬を數へたり、時には斃れ傷ついた馬の取り替へや、附け替への指揮をしたりなどし乍ら、持前の弱々しい、思切りの悪い細い聲で叫び続けた。彼の顔は次第に活氣を増して行つた。只兵士が殺されたり負傷したりする時は、眉を顰めて戦死者から顔を反け、何時ものやうに負傷者若しくは戦死者を、抱き起すのを躊躇してゐる兵卒に向つて、腹立たしげに怒鳴りつけるのであつた。兵士等は大部分立派な若者で、常に砲兵中隊で見受けられるやうに、自分の指揮官より一尺以上も脊が高く、幅も倍からあるやうな大男であつたが、みんな途方に暮れた子供達のやうに、自分の指揮官の顔を見詰めてゐた。そしてトッシンの顔に現れる表情は、必ず彼等の顔にも映つて行くのであつた。

此の恐しい轟きと喧噪の爲めと、そして注意や敏活の必要な結果、トッシンは不快な恐怖の感情を少しも味はなかつた。自分が殺されるとか、或は非常な重傷を負はされるとか云ふ考は、瞬時

も彼の頭に浮ばなかつた。それ所か、彼は次第に愉快になつて來た。始めて敵を見て最初の發射をしたのは、何だかもうずつと前——昨日あたりの事ではないかとさへ思はれた。そして自分の今立つてゐる原中の一片の土地は、自分に取つて懐しい、生れ故郷の土か何ぞのやうな氣がした。併し彼は一切の事を記憶し、一切の事を考慮して、同じ狀況に置かれた優良な將校のなし得る、一切の事をしてゐるにも拘らず、彼は熱病やみか酔つ拂ひのやうな心の状態にあつた。

四方から起る耳を聳するばかりの味方の砲聲、敵彈の唸りと落下、砲の周りを忙しさうに動き廻る眞赤になつた汗みどろの砲卒の姿、彼方に見ゆる敵の砲煙(此の煙の見えた後は、屹度砲丸が飛んで來て、地面か人か砲か馬かに落下するのだ)、これ等の様々な物の姿から、彼の頭には自己獨特の幻想的な世界が組み立てられて、それが今の彼の悦びを形作つて居るのであつた。彼の想像の中では、敵の砲は砲でなくパイプであつた。そして其の蔭に隠れてゐる目に見えない男が、煙草の烟を圈かに吹いてゐるのであつた。

『又吹き出しやがつたな。』丁度山から煙の圈が飛び出して、風の爲めに帶のやうになつて左へ流れて行つた瞬間、トッシンは小聲で獨り言ちた。『今に毬が飛んで來るぞ、直ぐに抛り返してやるから。』

『何と仰しやいましたか、大尉殿?』傍近く立つてゐて、彼が何やら呟いたのを聞き附けた下

士が、かう訊ねた。

『何でもない榴弾だ……』と彼は答へた。

『さあ我家のマドエーヴナさん。』と彼は心の中で言つた。マドエーヴナといふのは、一番端にある大きな、古い型の大砲の事である。砲門の傍に立つてゐる佛蘭西兵は蟻のやうに思はれた。第二號砲附の、美男子で呑んだくれの一番砲手は、彼の世界で伯父さんであつた。トゥッシンは誰れよりも一番餘計此の男に目を注いで、其の一舉一動に悦びを感じた。時に衰へ時に烈しくなる麓の銃聲は、誰かの息遣ひのやうに聞えた。

『ほうら、又息をついた、又息をついた。』と彼は獨言ちた。

彼自身は又、砲弾を両手に掴んで佛蘭西軍の方へ抛りつける、脊の高い猛者のやうな気がした。

『いゝか、マドエーヴナ、へまな事をせんやうに頼むぞ！』砲の傍から離れ乍ら、彼がかう言つてゐると、不意に聞き馴れぬ人の聲が頭の上で響いた。

『トゥッシン大尉！大尉！』

トゥッシンはどきりとして振り返つた。これはグルントで彼を酒保から追ひ出した、例の當直佐官であつた。彼は息切れのする聲で叫んだ。

『君、何うしたんです、氣でも違つたんですか？もう二度も退却の命令が下つたのに、君は……』

「何だつて彼奴等は俺を……」恐怖の念を以て上官を見上げつゝ、トゥッシンは心の中でかう考へた。

『わたしは……何にも……』二本指を帽子の庇ひさしに當て乍ら彼は言つた。『わたしは……』

併し大佐は言ひ度い事を終ひ迄言ひ得なかつた。近々と飛び過ぎた砲弾は、彼を潜ひそるやうに馬上に屈み込ましたのである。彼は一寸口を噤つぶんでゐたが、又何か言ひ出さうとする刹那、又もや砲弾が彼の言葉を押し止めた。彼は馬頭を轉じて彼方へ駈け出した。

『退却だ！みんな退却だ！』と彼は遠くから喚いた。

兵士等は笑ひ出した。一分の後に副官が同じ命令を齎して來た。

これはアンドレイ公爵であつた。トゥッシンの砲兵隊が立つてゐる地點へ乗り入らうとした時、彼の目に入つた最初の物は、足を射たれた放れ駒であつた。此の馬は車につけられた他の馬の傍で嘶いてゐるが、其の足からは泉のやうに血が流れ出てゐた。前車の間には幾人かの戦死者が横たはつてゐる。彼が中隊に近寄つた時、砲弾はしつかりなしに頭上を掠かすめた。彼は神経的な痙攣が脊中を走るのを感じた。併し俺は恐れてゐるかと考へただけで、彼は更に勇氣を振り起した。

「俺は恐れる事は出来ない。」と考へて彼は徐ろに砲の間で馬を下りた。彼は命令を傳へた後も中隊を去らなかつた。彼は自分の目前で砲を陣地から取り拂はせて、運ばせる事にしようと思つた。

トゥッシンと共に死體を踏み越え踏み越えて、恐しい佛蘭西軍の猛火の下を歩みつ、彼は砲の取り片附けに盡力した。

『たつた今上官が一人見えましたが、直ぐ逃げ出してはれました。』と下士がアンドレイ公爵に言つた。『副官殿とはまるで違ひます。』

アンドレイ公爵はトゥッシンと少しも話をしなかつた。彼等は二人共忙しくしてゐたので、互に殆ど顔も見合はせなかつた程である。四門の中完全な砲を二門前車に聯結し了ると、一同は麓へ向つて進んだ（一門の毀れた砲と一角砲とは遺棄する事にした）。アンドレイ公爵はトゥッシンの傍へ馬を寄せて、『では失敬します。』とトゥッシンに手を差し出した。

『失敬しました、副官殿。』とトゥッシンは言つた。『あなたは實にい、人ですね！左様なら。』何故かしら不意に目に浮んで来る涙と共に、トゥッシンはかう言つた。

## 二一

風は静まつた。黒い雨雲は地平線の邊りで硝煙と溶け合ひながら、戰場の上に低く垂れかゝつた。段々暗くなつて來たけれど、二箇所に映る火事の空明りは、却つてはつきりと浮み出るのであつた。砲撃は次第に勢を減じたが、ぱち／＼といふ銃の響は後ろの方でも右手でも、益々繁く

近くなつて來た。トゥッシンが自分の大砲を曳いて、負傷者を避けて通つたり、其の上に乗掛けたりし乍ら、砲火の中から出て谷へ下つた時、上官や副官等が彼を迎へた。その中當直佐官も、二度トゥッシンの隊へ派遣されて、一度も行き着く事の出来なかつたジェルコフも交つてゐた。彼等は互に遮り合ひ乍ら、何處へ何う行けといふ命令を下したり傳へたりした。そしてトゥッシンに譴責をしたり、注意を與へたりするのであつた。トゥッシンは何一つ號令を下さず、口を利く事を恐れながら（それは彼が一口物を言ふ度に、自分でも何故か分らないが、妙に泣き出し度くなるからであつた）砲兵のやくざ馬に乗つて、無言の儘後からついて行つた。

負傷者は遺棄せよとの命令であつたが、それでも多くの者は軍の後からとぼ／＼とついて來て、砲車に乗せて貰ひ度がつた。戦争の前にトゥッシンの假小屋から飛び出した、活潑な歩兵將校は腹部に弾丸を受けて、砲車『マトエーヴナ』に載せられてゐた。山麓で蒼い顔をした輕騎兵の見習士官が、片手で今一方の手を握り乍らトゥッシンに近づいて、乗せて呉れるやうに頼んだ。

『大尉殿、何うぞお願です、僕は手に壓傷を負うたのですから。』と彼はおづ／＼と言つた。『後生です、僕はもう歩けません、後生です！』

察する所、此の見習士官はもう一度ならず、方々で乗せて呉れと頼んでは、到る處ではね付けられたものらしい。彼は愚圖々々した憐れつばい聲で頼んだ。

『乗せて遣ると言つて下さい、後生です。』

『乗せて上げろ、乗せて上げろ。』とトゥシンが言つた。『おい伯父さん、外套を敷いて上げんか。』

彼は氣に入りの兵卒に向つてかう言つた。『あの負傷した將校の方は何處にゐる？』

『下おろしました、亡くなられたのであります。』と誰かが答へた。

『乗せて上げろ。乗り給へ君、乗り給へ。おい外套を敷け、アントーノフ。』

此の見習士官はロストフであつた。片手を支へてゐる彼の顔は蒼白く、下頤は熱病的な痙攣の爲めにがた／＼と慄へた。彼はマトエーヴナ——先程死んだ將校を取り下したばかりの砲車に載せられた。下に敷かれた外套には血がたれてゐて、ロストフは乗馬袴と手を汚した。

『何うしたね、君、負傷したのかい？』ロストフの乗つてゐる砲に近寄りつつ、トゥシンはかう言つた。

『い、え、壓傷です。』

『何うして側板そばに血がついてゐるのか？』とトゥシンが訊いた。

『これは大尉殿、あの將校の人が汚されたのであります。』二人の砲卒が外套の袖で血を拭き乍らかう答へた。其の様子は砲の變へれに對して謝罪するやうであつた。

歩兵の助を借りて無理矢理に砲を坂の上へ曳き上げて、グンテルスドルフの村に行き着くと、

軍は行進を止めた。もう十歩の外は、兵卒の外套も見分け兼ねる程暗くなつた。そして交射の音も静まりかけた。不意に右手に當つて、再び近々ちかと叫喚と銃聲が聞えた。發射の光がもう暗の中に閃いて居た。これは佛蘭西軍の最後の攻撃であつた。村の民家に腰を下してゐた兵士等は、これに應戦した。又もやあらゆるものが村から飛び出した。が、トゥシンの砲隊は動く事が出来なかつたので、砲手もトゥシンも見習士官も、自分の運命を待ち受けつ、黙つて目と目を見交してゐた。銃聲は段々と静かになつて行つた。そして横手の往來から兵士等が、賑かに話し合ひ乍らばらばらと飛び出した。

『無事かい、ペトロフ？』と一人が訊ねた。

『一つ熱い奴を食くはしたら、もうちよつかいを出すまいよ。』と今一人が言つた。

『まるで何にも見えやしねえ。彼奴等が同士打ちをやつた様さまは何うだい？ 何にも見やアしねえ、暗いなア、おい。何か飲むものはないか？』

佛蘭西軍は遂に撃退された。そして再び眞の暗の中を、がや／＼とどよめく歩兵隊に、梓ついでのやうに圍まれたトゥシンの大砲は、何處か前方へ動き出した。

目に見えぬ暗澹たる一筋の川は、囁きと話聲と馬蹄と車輪の響きをどよめかせつ、暗の中を何時迄も／＼同じ方向に流れて行つた。全體にわあツと云ふ雑音の中で、他の如何なる響きより

も一番はつきりと、負傷者の呻き聲が夜の暗の中に聞えてゐた。彼等の呻吟は、軍隊を取り巻いてゐるこの夜の暗を、すつかり一杯に充たしてゐるやうな気がした。彼等の呻吟と此の夜の暗——それは實際同じのものであつた。暫く経つた時、この動き行く大群集の中に動搖が生じた。誰か幕僚を引き伴つた人が白馬に跨つて通過したが、通りすがりに何やら言つたのである。『何と言つたんだ？これから何處へ行くんだい？夜營でもするんかね？お禮でも言つてつたのかい、一體？』かう云ふ貪るやうな問が四方から聞えた。そして動き進む群集は互ひにぶつ突かり始めた（多分先頭が立ち止つたものらしい）。止れの命令が出たといふ聲が、何處からとなく傳はつた。一同は今まで歩いてゐた泥深い道の真中に立ち止つた。

火が點とされて、話聲が次第に高く聞え出した。トッシン大尉は中隊の處理を濟すと、兵士の一人に命じて、見習士官の爲めに繃帶所か軍醫を探しに遣つた。そして兵士達が道路の上に燃した焚火の傍へ坐つた。ロストフも矢張り火の傍へ這ひ寄つた。疼痛と寒さと濕氣から起る、熱病やみのやうな痙攣は、彼の全身を震はすのであつた。睡魔は堪へ難い程襲ふのであつたが、じく／＼疼いて置場のないやうな手の痛みに、寢附く事が出来なかつた。彼は時に目を閉ふいだり、時に恐しく赤く見える火に見入つたり、時には又自分の傍に胡坐を組んでゐるトッシンの、脊を丸くした弱々しい姿を眺めたりしてゐた。人の好い伶俐さうなトッシンの大きな目は、同情と憐愍を以て彼

に注がれてゐた。トッシンが眞底から自分を助け度いと思ひ乍ら、何うする事も出来ないでゐるのは、彼にもちやんと分つて居た。

徒歩や乗馬で通り過ぎたり、周りに陣取つたりしてゐる、歩兵の足音や話し聲などが四方から聞えた。人聲足音、泥濘の中を進んでゆく馬蹄の響き、それから遠く近く薪のはぜる音——かういふものが一つに溶け合つて、搖れ慄へるやうなどよめきになつてゐた。

今はもう以前のやうに、目に見えぬ川が暗の中を流れないで、嵐の後の暗澹たる海が、波を收めつ、顫へてゐるやうであつた。ロストフは自分の眼前周圍に起るものを、意味もなく見たり聞いたりしてゐた。一人の歩兵が焚火の傍へ近寄つてしやがみ乍ら、手を火の中に突ツ込んで顔を反けた。

『構ひませんか、大尉殿？』彼は物問ひ度けに、トッシンに向つてかう言つた。『自分の中隊にはぐれて了つて、自分で自分が何處にゐるか分らんのであります。困つちやつた！』

頬に繃帶をした歩兵將校が、兵卒を一人連れて焚火に近寄り乍ら、トッシンに向つて、行李を通さねばならぬから、ほんの一寸砲を片寄せさして呉れと頼んだ。此の中隊長の後から、二人の兵士が焚火を目がけて飛んで來た。彼等は何か長靴のやうな物を引つ張り合ひながら、死物狂ひに罵つたり掴み合つたりしてゐる。

「何だ、貴様が拾つたんだつて！ふん巧い事を言つてらあ！」と一人がしゃべれ聲で喚いた。其の後から血みどろの巻脚絆で頸を結へた、瘦せた蒼白い兵卒がやつて来て、腹立しけな聲で砲兵達に水を請求するのであつた。

「何だつてんだ、犬ころみみたいに死んぢまへつてのかい？」と彼は言つた。トッシンは彼に水を與へるやうに命じた。其の後から陽氣な兵卒が飛んで来て、歩兵隊へ火種を分けて呉れと頼んだ。

「火種の熱いところを歩兵にやつて下さいな！やア、ご機嫌よう、兄弟。いや何うも火種を有難う、後で利子をつけてお返ししますア。」赤い薪の燃えさしを何處か暗の中へ持つて行き乍ら、彼はかう言つた。

それに續いて四人の兵卒が、何か重さうなものを外套に載せて運びながら、焚火の傍を通つて行つた。其の中の一人が何かに躓いた。

「ちよッ、こん畜生、道路に薪なんか置きやがつて。」と彼はぼやいた。

「死んぢまつたものを、何だつてこんなに擔いで行くんだい？」と今一人が言つた。

「ちよッ、實に貴様等は！」

と彼等は其の重荷を昇いで暗の中に隠れた。

「何うだね？痛みますか？」トッシンは小聲でロストフに訊いた。

「痛いです。」

「中隊長、閣下がお呼びであります。あすこの小屋の中にをられます。」と下士がトッシンに近づいてかう言つた。

「よし来た、今行くぞ。」

トッシンは立ち上り、外套の釦を掛けて、身繕ひし乍ら焚火を離れた。

砲兵の焚火から程遠からぬ、特別に準備された家の中に、バグラチオン公爵は自分の所へ集つて来た各部隊の長官幾人かと、食事を共にし乍ら談話を交へてゐた。其中にはがつくと羊の骨をしゃぶつてゐる、半分目を閉ぢたやうな小柄の老人や、一杯のウォートカと食事の爲めに眞赤になつた、二十二歳の立派な將軍や、名前入りの指輪を嵌めた當直佐官や、不安げに一同を見廻してゐるジェルコフや、蒼い顔をして唇を咬みしめ、熱病やみのやうに目を光らしてゐるアンドレイ公爵などがゐた。

百姓家の中には鹵獲した佛蘭西軍旗が、片隅に立て掛けられてあつた。例の理事は無邪氣な顔をして、軍旗の布地をいぢくり廻しながら、不審さうな顔で小首を傾けてゐたが、それは實際、此の軍旗が彼の興味を惹いたのかも知れないが、或ひは又空腹な彼に取つて、他人の食事を



見てゐるのが、苦しかつたせるかも知れぬ。彼は食器が足りないために、陪食出来なかつたのである。隣の部屋には龍騎兵の俘虜になつた佛蘭西の大佐がゐた。味方の將校達が其の周りに集つてじろく見廻してゐる。バグラチオン公爵は箇々の長官に謝辭を述べ、戦闘の詳細、我軍の損失などに就いて質問した。ブラウナウで檢閲を受けた聯隊長は、戦闘が開始されるや否や森の外へ退却し、伐木隊を集めて自分の傍を通過させ、二箇大隊を率ゐて銃劍突撃を試み、佛蘭西軍を顛覆させて了つたと報告した。

『閣下、わたくしは第一、大隊に混亂が生じたのを見たとき、道路に立つて考慮しました。そして「此の大隊を退却させて、連發攻撃を以て迎へよう」とかう決心して、早速實行したのであります。』

聯隊長はこれを實行し度くて堪らなかつたので、實戦に於てさうする隙ひまがなかつたのを、非常に残念に思つた。それ故今も何だか、それが實際行はれた事のやうに思はれたのである。いや、一步進んで、本當にさうだつたのかも知れない。一體かうしたてんやわんやの騒動の中で、實際にあつた事と無かつた事を、きつぱりと區別出来るものだらうか？

『此の際閣下に一言申し添へて置き度いのは、』と彼はクトッゾフとドーロホフの會話、それに自分とドーロホフとの今日の出會を想ひ出して、語を次いだ。『外でもありません、奪官兵のドーロ

ホフがわたくしの面前で、敵の將校を捕虜にして殊勳を樹てた事であります。』

『其の際わたくしはバヴログラード聯隊の突撃を見ました。』此の日少しも輕騎隊を見た事がなく、只歩兵將校の話で聞いたばかりのジェルコフは、不安げに邊りを見廻しながら、かう口を挿んだ。『方陣を二つ迄蹂躪しました、閣下。』

ジェルコフの言葉に對して二三の人は、何時ものやうな洒落を期待して微笑した。けれども彼の言葉が、矢張り今日の友軍の讚美に傾いてゐるのに氣附いて、又元の眞面目な表情に歸つた。尤も多數の人はジェルコフの言葉が、何等の根據もない出鱈目だといふ事を、よく承知してゐた。バグラチオン公爵は小柄な老犬佐に向つて、

『一同に感謝します、歩兵騎兵砲兵各部隊とも、悉く勇敢な働をして呉れました。所で何うして中央では、砲二門を遺棄したのですか？』と彼は目で誰やら探し乍ら訊ねた。(バグラチオン公爵は左翼の砲の事を訊かなかつた。彼は戦闘のごく始めに、左翼の砲が悉く棄てられた事を、もう知つて居たのである。)『わたしは何でも君に頼んだやうですね？』と彼は當直佐官に向つた。

『一門は破壊されましたが、』當直佐官は答へた。『今一門の砲は分り兼ねます。わたくしは始終彼處で指揮して居りまして、一寸前に歸つて來たばかりであります……全く何うも激烈でございました。』と彼は謙抑な調子で附け足した。

誰やらトゥッシン大尉が此の村に駐屯してゐるので、もう今迎へにやつた所だと言つた。

『あ、君も行つてたんですね。』バグラチオン公爵は、アンドレイの方へ向いてかう言つた。

『あ、さうですね、あなたとは一寸の間、一緒に落ち合つてましたツけね。』と當直佐官は氣持よく微笑しながら、ボルコンスキイに向つてかう言つた。

『わたくしは不幸にして、あなたとお目に懸る光榮を有しませんでした。』冷やかなぶつきら棒な聲でアンドレイ公爵は答へた。

一同は暫く口を噤んでゐた。其の時將官達の後ろからおづ／＼と進み出ながら、鬨の上にトゥッシンが姿を現した。トゥッシンは何時もの如く、上官の顔を見るとへどもどして了つて、狭い小屋の中に竝んでゐる將官達を避けて通る時、よく足下を見ないで軍旗の柄に躓いた。幾人かの笑ひ聲が起つた。

『何ういふ工合で砲を遺棄したのかね?』バグラチオンは大尉に對するよりも、寧ろ笑つた者に對して(其の中でジェルコフの聲が一番高く聞えた)眉を顰め乍ら、かう訊いた。

トゥッシンは嚴めしい上官の顔を見て、今初めて自分の罪と恥辱の恐しさが、まざ／＼と心に浮んで來た。自分はおめ／＼と生き存らへ乍ら、二門の砲を失つたではないか。彼はすつかり昂奮してゐたので、此の瞬間まで、その事を考へる餘裕がなかつたのである。將校連の嘲笑は尙一層彼

に度を失はせて了つた。彼は下顔を顛はしながら、バグラチオンの前に立つて、やつとの事でこれだけ言つた。

『存じません……閣下……兵員が足りなかつたからであります、閣下。』

『掩護隊の方から取れた筈ぢやありませんか!』

掩護隊が無かつたといふ事を、トゥッシンは言はなかつた。それは明々白々たる事實であつたけれども、彼はこれを以て他の長官に累を及ぼす事を恐れて、丁度答に塞つた小學生が試験官の目を見詰めるやうに、じつと据わつたまゝ、動かぬ目で、バグラチオンの顔を眞直に眺めてゐた。

沈黙は可成り長く續いた。バグラチオン公爵はあまり苛酷な役を勤め度くないらしく、何と言つてい、か分らない様子であつた。他の人達は敢て此の問答に口を入れようとしなかつた。アンドレイ公爵は額越しにトゥッシンを眺めてゐたが、其の指は神經的に顛へてゐた。

『閣下。』とアンドレイ公爵は持前の鋭い聲で沈黙を破つた。『閣下はわたくしをトゥッシン大尉の中隊へ派遣なさいました。わたくしは其處で三分の二の兵士と馬を失ひ、二門の大砲をめちゃめちゃに破壊されてゐるのを見ました。掩護隊などは少しもありませんでした。』

バグラチオン公爵とトゥッシンは、昂奮の情を壓し附けるやうにして話すボルコンスキイを、一樣にじつと見詰めてゐた。

『閣下、若し閣下がわたくしに、忌憚なく意見を吐露さして下さるならば、』と彼は續けた。『今日の成功に對しては我々は何よりも一番に、此の砲兵中隊の行動と、トゥッシン大尉及び其の中隊一同の、英雄的な持久力に負ふ所が最も多いのであります。』かう言つてアンドレイ公爵は、返答も待たないでつと立ち上り、卓子を離れて了つた。

バグラチオン公爵はトゥッシンを眺めた。そしてボルコンスキイの極端な意見に對する疑の色を示すのも好まないが、さりとて又全然彼の言葉を信ずる事も出来ないやうな氣がしたので、一寸小首を傾け乍らトゥッシンに向つて、もう退つてもい、と注意した。アンドレイ公爵も其の後から部屋を出た。

『いや實に有難う、お蔭で助かりましたよ、君。』とトゥッシンは彼に言つた。アンドレイ公爵は何となく氣が鬱いで心が重かつた。これ等の事はすべて實に奇怪で、彼の期待に少しも似た所がなかつた。

「あの連中は何者だ？何しに來たのだ？何があの人達に必要なんだらう？そして何時になつたらこんな事がすつかり片附いて了ふのだらう？」目の前に入れ替り立ち替る人影を眺めつ、ロ

ストフはかう考へた。睡魔は堪へ難い程襲つて、赤い圈は目の中で跳つた。そしてこれ等の顔の印象や孤獨の感じは、疼痛の感じと一緒に融け合つた。これはあの負傷したのや、乃至負傷しない兵隊らの仕業だ——あいつ等が他人の挫折した手や肩の筋を壓したり、重くしたり、振ち廻したり、肉に火をつけたりするのだ。此の人達を免れる爲めに、ロストフは眼を閉ぢた。

彼はほんの一瞬間忘我の境に落ちた。併し此の短い忘我の瞬間に、彼は無數の幻影を見た。自分の母と其の大きな白い手、ソーニヤの瘦せた肩、ナターシャの目と笑ひ聲、チェニソフと其の聲、其の鬚、チェリヤーニン、そして例のチェリヤーニンとボグダーヌイチに關する一件などを夢に見た。此の一件と、つい其處にゐる瘡高い聲の兵隊とは、全然同じ物であつた、此の一件と兵隊とが、何時迄もしつこく彼の手を捕まへて壓しつけながら、絶えず一方へぐんぐんと引つ張るのであつた。彼はそれ等のものを避けようするけれど、此方は一分一厘も、一秒間も彼の肩を放さなかつた。若し此の連中が引つ張らなかつたら、肩は少しも痛まずに達者であるのだが、併し此の連中を免れる事は何うしても出来ない。

彼は目を開けて上の方を眺めた。黒い夜の帷は炭火の明りから二三尺上の方に垂れてゐる。降り始めた雪が、此の明りの中を粉のやうに飛んでゐる。トゥッシンも歸つて來ず、軍醫も見舞はなかつた。彼はたつた一人であつた。只一人の兵士が裸で焚火の向う側に坐り乍ら、瘡せた黄色い體

を暖めてゐた。

「俺は誰にも用のない人間なんだ！」とロストフは考へた。「誰一人救けて呉れる者も、憐れんで呉れる者もないのだ。所が、俺も何時か以前は自分の家にて、強健で快活で、皆に好かれた事もあるんだ。」彼は嘆息したが、嘆息と共にひとりでに唸り聲が出た。

『何處か痛むのでありますか？』と兵隊は火の上で襯衣を振り乍ら訊ねた。そして返事も待たずに、咳き拂ひして言ひ添へた。『今日一日に何れだけ人が死んだり、怪我をしたりしたか知れやしない——恐しいこつた！』

ロストフは兵隊のいふ事を聞いてゐなかつた。彼は火の上を飛び交ふ粉雪を見乍ら、露西亞の冬——暖く明るい家、むく／＼した毛皮外套、矢のやうな橋、健康な體、家族の愛情と心遣ひ、かういふものを想ひ起してゐた。「あ、何だつてこんな處へ來たんだ！」と彼は考へた。

翌日佛蘭西軍は襲撃を繰り返さなかつたので、バグラチオン支隊の殘兵はクトゥゾフの軍に併合された。

### 第三編

グシーリイ公爵は、自分の計畫を深く考へるやうな事をしなかつた。彼は又己れの利益の爲めに、他人に禍を及ぼさうなどは、尙更思つて居なかつた。要するに、彼は只單に社會で成功して、其の成功を習慣とした人に過ぎなかつた。彼の心中には四圍の事情とか、他人の接近とかに依つて、常に様々な計畫や考案が出來上つて行くのであつた。そして彼自身もさうした計畫や考案を、明白に意識して居なかつたけれど、それが彼の生活興味の全部なのであつた。かういふ計畫や考案は一つや二つでなく、二十も三十も彼の頭の中で運用されてゐた。其の中にはやつと心に浮び始めたばかりの物もあり、又着々進捗してゐる物もあり、又立ち消えになつて了ふ物もあつた。彼は決して腹の中で「此の男は中々權勢があるから、俺は此の男の信用と友誼を得て、其の助力で一時金の下賜を受けねばならぬ。」とか、若しくは「あのビエールは財産家だから、あの男を唆かして娘を娶せ、俺に入り用な四萬留の金を借りなくちやならぬ。」など、いふ考へを起し

はしなかつた。併し權勢ある人に邂逅するとすぐその瞬間に、此の男は何かの役に立つかも知れないぞ、と本能が彼に囁くのであつた。でヴシーリー公爵は其の人に接近して、機會の有る度に、別段下用意をする譯ではないけれど、生來の本能に依つてお世辭を言つたり、馴々しく口を利いたりし乍ら、自分に必要な話をするのであつた。

莫斯科ではピエールが丁度彼の鼻先に居たので、ヴシーリー公爵は彼の爲めに、當時に在つては今の三等官に相當する、侍從武官の地位を周旋した上、自分と一緒に彼得堡へ行つて、自分の家へ落ち着くやうにと、熱心にピエールを説いた。一寸上べは何の氣もないやうだけれど、同時に又是非共さうしなくちやならんのだ、といふ確乎たる自信を以て、ヴシーリー公爵はピエールに娘を娶すのに必要な、すべての手段を盡したのである。若しヴシーリー公爵が豫め自分の計畫を熟考したなら、地位の上下に拘らずあらゆる人に對して、かく迄自然に、かく迄單純に、かく迄馴々しい態度を取る事は出来なかつたであらう。彼は始終自分よりも強く且つ富める人の方へ、何者かの力に依つて引き摺られてゐた。彼は他人を利用する必要と、可能の兼ね備つた一瞬間を捕へるのに、稀有な天賦の才能を有つてゐたのである。

つい此の間まで孤獨で香氣な身の上であつたピエールは、突然財産家のベズーホフ伯爵となつて、急に多くの人々に取り卷かれる忙しい體になつたので、夜床に入つた時、やつと一人切りに

なれるやうな心持がした。彼は書類に署名したり、彼自身はつきりした理解を持たない諸官省と交渉したり、何かの事を總支配人に訊ねたり、莫斯科附近の領地へ出掛けたり、多數の人を引見したりしなければならなかつた。以前彼等はピエールの存在など知らうともしなかつたが、今では若し彼が會ひ度くないなどと言はうものなら、それこそ腹を立てたり、悲觀したりするやうになつた。これ等の種々雑多な人々——事務家、親戚、知人などは、悉く此の年若い相續者に對して愛想がよかつた。彼等は疑もなくピエールが優れた資質を持つてゐる事を、飽く迄信じ切つてゐるらしかつた。二言目には、「世にも珍しく親切なあなたの事ですから、」とか、「あなたのやうな美しい心を持つてゐらつしやるお方は、」とか、「伯爵、あなた御自身實に純潔なお方です、」とか或ひは「若しあの方があなた位賢い人間でしたらねえ、」と言つたやうなことを口にす。でピエールは段々と眞底から、自分は並々ならぬ親切な男で、非凡な才能を有つてゐると信じるやうになつた。まして彼は以前から心の奥の方で、實際自分は非常に親切な賢い男だ、といふやうな氣持がしてゐたのである。

そればかりでなく以前彼に對して意地悪く、明らかに敵意を抱いてゐるらしかつた人達すら、急に彼に對して優しく愛想よくなつて來た。あれ程怒りッぽかつた一番上の公爵令嬢（例の長い胴をした、人形のやうにびつたり髪を撫で附けた令嬢）迄が、葬式が濟んだ後わざわざ彼の部屋へ

やつて来た。伏し眼になつていつきりなしに顔を眞赤にし乍ら、彼女は自分とピエールとの間に生じた誤解を、非常に残念に思つてゐる事を述べ、あゝ云ふ打撃を受けた今となつては、自分ももう何を言ふ権利もない、只これ迄非常に愛してゐた此の家——自分が多くの犠牲を捧げた此の家に、たつた二三週間逗留の許しを乞ふより外はないと言つた。かう言つた時、彼女は恠え切れなくなつて泣き出した。あの石像のやうな令嬢が、かうも變るものかと、ピエールはすっかり感動して彼女の手を取り乍ら、自分でも何の爲めか分らずに赦しを乞ふのであつた。此の日から令嬢はピエールの爲めに絹の襟巻を編み始めた。そして全く彼に對する態度を變じて了つた。

『ね君、何うかあれの爲めにさうしてやつて呉れ給へ、何と言つても、あれは故人の事で随分苦勞したんだからね。』何か令嬢の利益を圖つた書類に署名を求め乍ら、グシリーイ公爵はかう言つた。

グシリーイ公爵の考では、何と言つても此の骨片を——三萬留の手形を、可哀さうな公爵令嬢に抛つてやらねばならぬ。それは例のモザイクの折靴事件に、グシリーイ公爵が關係した事を喋り散らされては大變だから、そんな考へを起させまい爲めの魂膽であつた。ピエールは手形に署名した。それからといふもの、令嬢は彼に對して益々親切になつて来た。二人の妹令嬢も同様愛想よくなつたが、殊に黒子のある可愛い末の令嬢は、ピエールの姿を見る度に恥しさうに微笑ん

では、彼をまごつかすのであつた。

ピエールはすべての人が悉く自分を愛して呉れるのが、極めて自然に思はれた。だから、若し誰かが彼を愛しなかつたら、恐しく不自然に感じたに相違ない。彼は自分を取り巻く人々の眞情を疑ふ譯に行かなかつた。それに、彼はこれ等の人々の眞情不眞情を顧る暇がなかつたのである。彼はいつも忙しくて、何時もつゝ、ましく楽しい酣醉の状態にあつた。彼は自分が何かしら重大な世間全體の運動の、中心になつてゐるやうな氣がした。又自分が何かしら或る物を、絶えず人々から期待されてゐるやうな感じもした。で、若しそれを果さなかつたら、彼は多くの人々を悲しませ、其の希望を奪ふ事になる。若しそれを果せば一切の事がよくなるのだ——かう考へて彼は要求される通りをして行つた。けれども此の何かしら善い事は、何時も前の方に取り残されるのであつた。

此の最初の時期に、誰よりも一番餘計にピエールの事務ばかりでなく、ピエール自身迄も自由にしてゐたのは、グシリーイ公爵であつた。ベズーホフ伯爵の死後彼は少しもピエールを手放さなかつた。そして「わたしはいろんな仕事に悩まされて、疲れ切つてゐるのだけれど、此の哀れな若物——而も莫大な財産を持つた親友の忘れがたみ（これが一番大事な事だ）を、運命の神や悪者共の掌中に翻弄させるのは、情に於て忍びないのだよ。」と言つたやうな顔付をして居た。ベズ

ーホフ伯爵の死後、彼が莫斯科に過した幾日かの間に、彼は度々ピエールを自分の居間へ呼び寄せたり、又自分からピエールの部屋へ出掛けたりして、ピエールのなす可き事を一々指圖するのであつた。その疲れたやうな而も確信に充ちた調子は、「まるで君も知つての通り、わたしは兩手に餘る程の仕事を抱へてゐる。だからわたしが君の世話を焼くのは、全くの慈悲心から出る事なんだよ。そればかりでなく、わたしが君に言つてゐる事は、實行し得べき唯一の方法なんだから、それを承知して貰ひたい。」とでも言ふやうであつた。

『ねえ、君、明日は愈々一緒に立つんだよ。』ある時彼は目を閉ぢて、指で相手の肘をさぐりながら、ピエールに向つてかう言つた。それはまるで今自分の言つてゐる事は、もう疾く二人の間で決められた事で、其の他にはもう何とも決めやうがない、と信じ切つてゐるやうな調子であつた。『明日はもう出發するんだよ。君の席はわたしの幌馬車の方で用意するからね。實に嬉しい。此處の重な用件はすっかり片附いて了つた。わたしもう疾くに歸つて居る可き筈だつたんだよ。所で、これはわたしが總理大臣から受け取つた手紙だ。わたしは君の事を依頼して置いたが、君も今度愈々外交團に編入されて、侍從武官になつたんだよ。これで君の爲めに外交官としての道が拓かれた譯になる。』

この言葉を發する際に用ゐられた疲勞と確信の調子は、強い力を持つてゐるたにも拘らず、長

い間一生の方針について思ひ煩つたピエールは、あわて、言葉を返さうとした。けれどもヴシーリイ公爵は例の鳩の鳴くやうなバスで彼を遮つた。此の聲は是が非でも對手を説き伏せねばならぬといふ、非常な場合に應用されるもので、これを遮る事は不可能であつた。

『Mais, mon cher (君)』これはわたしが自分の爲めに、自分の良心を満足さす爲めにしたのだから、禮など言ふ事は決して要らない。人から愛され過ぎて不平を言ふ者は、一人も有りやしないよ。それに君は自由の身だから、明日にもすぐ此の職を抛うつ事が出来るぢやないか。まあ兎に角彼得堡へ出て見たら、すつかり自分で分るさ。それに君はもう疾くに、此の恐ろしい記憶から遠ざかる可き筈だつたんだよ。(ヴシーリイ公爵は吐息をついた。)さうなんだよ、君、さうなんだよ……所で君の馬車にはわたしの従僕でも乗せてやつたらいい。あ、さうだ、わたしは危く忘れる所だつた。』とヴシーリイ公爵は尙言ひ足した。『實はねえ、君、わたしと故人との間に一寸した勘定が残つてゐるのだ。わたしはリャザンの領地から受け取つたものがあるんだが、暫く此の儘にして置かう、君は別に必要が無いんだからね。其の中によく勘定しよう。』

ヴシーリイ公爵が「リャザンの領地から受け取つたもの」と言つたのは、幾千留かの人頭税で、ヴシーリイ公爵が自分の手許に残して置いたのである。

彼得堡でも莫斯科と同じやうに、優しい愛に充ちた人々の雰圍氣がピエールを取り巻いた。彼

はグシーリイ公爵の肝入つて呉れた職、といふよりも寧ろ官位を（なぜと言つて、ビエールは何かもしなかつたからである）辭退する事が出来なかつた。そして知己や招待や社會上の仕事は山のやうにあつたので、ビエールは莫斯科にゐた時よりも、一層ぼうつとしたやうなせか／＼した感情と、絶えず近附いてはゐるけれど、未だに成就されない或る幸福を感じた。

以前の獨身者仲間の多くは彼得堡にゐなかつた。近衛師團は遠征の途に上り、ドーロホフは奪官され、アナトリーは地方の師團に勤務してゐるし、アンドレイ公爵は外國へ行つてゐたので、ビエールは以前好んだやうな風に夜々を過す事も、又時々畏敬する年長の友と隔てのない物語をして、氣晴らしをする事も出来なかつた。始終彼は晚餐會や、舞踏會で時を送つたが、主としてグシーリイ公爵の許で肥えた公爵夫人や、美人のエレンなど、一座して、遊び暮らす事が多かつた。

アンナ・シェーレルも矢張り一般社交界の人達と同じやうに、彼に關する意見の變化を示した。以前ビエールはアンナ・シェーレルの前へ出ると、何時も自分の言ふ事はみんな不躑躅でぶつきらばうで、不必要な事ばかりで、頭の中で用意してゐる間は實に氣が利いてゐると思つた話も、一旦口に出すや否や馬鹿けたものになつて了つて、却つてイッポリートの愚にも付かぬ話の方が、氣が利いて愛嬌がある、と云ふやうに思はれてゐた。所が、今は何んな事でも彼の言つた事は、悉く

charmant (愛想) に聞えるやうなにつて來た。尤もアンナ・シェーレルはそれを口に出して言はなかつた。實際は口に出し度くて堪らないのだけれど、ビエールの謙遜の徳を尊重する爲めに、やつとの事で忪えてゐるのだ。それは彼にも分つて居た。

千八百五年から千八百六年へ亘る冬の始めに、ビエールはアンナ・バヴロヴナから、例の薔薇色の招待状を受け取つた。其の中には *Vous trouverez chez moi la belle Hélène qu' on ne se lasse jamais de voir* (晝夜はかの眺め飽きせぬ美しき) といふ文句が附け足してあつた。

こゝの所を讀んでゐる中に、ビエールは他人に依つて承認された一種の關係が、自分とエレンとの間に形成されてゐる事を、始めて感じたのである。此の想念は、まるで堪へ得られぬ義務が落ち掛つたかのやうに、彼を憎えさせもしたが、又同時に愉快な想像として氣に入りました。

アンナ・シェーレルの夜會は以前と同じやうであつたけれど、只一つ女主人が客を歡待すのに利用した新顔の人は、あのモルテマールでなくて、今度伯林から歸つて來た外交官であつた。此の人はアレクサンドル皇帝のボーツダム行在や、二人の高貴なる親友が人道の敵に對して、飽く迄正道を防守せんが爲めに、固き同盟の誓を立てられた事など、實に珍らしい詳細な報道を齎した。アンナは愁ひの陰を帯びてビエールを迎へた。此の愁ひの陰は、察する所ビエールを襲つた最近の不幸——ベズーホフ伯爵薨去に關係してゐるらしかつた（此の頃すべての人がビエールに



向つて、あなたは父親の死の爲めに、大變悲しんでゐらつしやいますと、絶間なしに言つて聞かせるのを、自分の義務か何ぞのやうに思つてゐた。其の癖彼は父親の顔を碌々知らなかつたのである。——而も此の愁の陰は、皇太后陛下マリヤ・フォードロヴナの名を口にする時、アンナの顔に現れる神聖なる愁ひの表情と、全然同じものであつた。ビエールは萬更悪い氣もしなかつた。アンナは何時もの技巧を以て、自分の客間に於けるグループを整理した。ヴシーリイ公爵や將軍達のゐる大きいサークルは、外交官の話を聞く事が出来た。今一つのサークルは茶の卓に近く陣取つた。ビエールは大きい方のサークルへ交らうとした。丁度戰場に於る軍司令官のやうに、無數の新しく華々しい想念が一時に浮んで來る爲めに、それを實行する暇がなくて苛々して居たアンナは、ビエールの様子を見附けて指で一寸其の袖に觸つた。

『Attendez, j'ai des vues sur vous pour ce soir (待つて下さい、わたくし此の夜會であつたを當にしてる事がござりますの)』と言つて彼女はエレンの方を振り向き、微笑して見せた。『ねえエレンさん、どうぞお慈悲に可哀さうな私の叔母の所へ行つてやつて下さいませんか。叔母は常々あなたを崇拜してゐるのでござりますよ。一寸十分ばかり居てやつて下さいませ。でね、あなたが餘り酷く退屈なさらない爲めには、此處に伯爵がゐらつしやいます。伯爵もあなたのお伴をするのを厭だと仰しやらないでせう。』美しいエレンは叔母さんの方へ向つて行つた。併しアンナは、未だこれから最後の肝要な手配

りをしなければならぬ、と言つた風なふりをして、ビエールを自分の傍へ引き留めた。

『さうぢやありませんか。全くほれぐするやうでござりますね?』靜かに離れて行く氣高いエレンの姿を指さし乍ら、彼女はビエールに向つてかう言つた。『Et quelle tenu (それはあの立居振舞は、舞は何うでせう) あ、いふ若い娘さんの身で、もうあんな手腕——あんな立派な立居振舞のこつを心得てゐらつしやるんですものね!これはあの方の優しいお心から出るのでござりますよ!あの方を自分のものにする殿御は、本當にあやかり者でござりますわ!あの方と夫婦になつたら、何んな交際下手の方でも、自然と社交界で花形の位置を占める事が出来ますわ。さうぢやござりませんか?わたくし只一寸あなたの御意見を伺つて見ただけでござりますの。』と言つてアンナはビエールを放した。ビエールはエレンの鮮かな立居振舞の巧みな事を、眞底から賛成した。實際若し彼が何時かエレンの事を考へたとすれば、それは全く彼女の美貌と、社交界にあつて無言の中に品位を保つ、落ち着き拂つた非凡な手腕なのである。

叔母さんは自分の陣取つてゐる片隅に二人の若者を迎へ入れた。併し見た所、エレンに對する尊敬を押し隠して、寧ろアンナに對する恐怖を表はさうと望んでゐるらしかつた。彼女は此の人達を何うすればいゝのかと訊くやうに、ちよいと、姪の方を振り返つた。此の連中の傍を離れる時、アンナは又指の先でビエールの袖に觸つてかう言つた。

「J'espère que vous ne direz plus qu' on s'ennuie chez moi (多分あなたは此の次に、アンナの所は) 退屈だなどと仰しやらないでせうねえ)」かう  
言つて彼女はエレンをちらと見返つた。

エレンはにつこりしたが、其の顔附はまるで、「誰にもせよわたしを見て、感激しずるられる人が有るなんて、そんな筈はありません。」と言ひ度さうであつた。叔母さんは一つ咳拂ひをして唾を呑み込み乍ら、エレンに逢つて大變に嬉しいと佛蘭西語で言つた。それから今度はビエールに向つて、同じ挨拶を同じ顔付で繰り返すのであつた。何の興もない躰き勝ちな會話の中頃に、エレンはビエールを振り返つて、彼女があらゆる人に對して用ゐる、例の明るい艶やかな微笑を浮べた。ビエールは此の微笑に馴れて了つてゐるので、格別それに注意も拂はなかつた。それ程此の微笑は彼に取つて表情の少いものであつた。叔母さんは此の時、ビエールの父ベズーホフ伯爵の持つて居た、煙草入の蒐集の<sup>コレクション</sup>ことを何やら話し乍ら、自分の煙草入を出して見せた。公爵令嬢エレンは此の煙草入の上に細工してある、叔母さんの良人の肖像を見せて呉れと頼んだ。

『これは屹度并ネスの作でせう。』當時有名な小物細工師の名を言ひ乍ら、ビエールは煙草入を手を取らうとして卓の方へ屈み込み、今一方の卓の會話に耳を傾けた。

彼はぐるつと廻つて行く積りで腰を浮かした。が、叔母さんはエレンの後ろから、眞直に其の肩越しに煙草入を渡した。エレンは邪魔せぬやうに前へ屈んで、ほ、笑みながら振り返つた。彼女

は何時も夜會に出る時のやうに、前後とも恐しく開いた當時流行の服を着けてゐた。いつも大理石のやうだとビエールの思つてゐる彼女の上半身は、ビエールの近眼にも自然にはつきりと、肩から頸筋の生きくした美しさを見分けられる程近い所にあつた。そして彼女に觸れようと思へば、只ちよつと屈めさへすればよいほど、彼の肩はエレンの肩に近かつた。彼はエレンの體の温み、香水の匂ひ、一寸身動きする度に響くコルセットの軋みなどを聞いた。彼は着物と融合して或る一つの物を形造つてゐる、エレンの大理石のやうな美しさを見なかつた。彼は只着物一枚で隠されてゐるに過ぎない、女の肉體美を見且つ感じたのである。一旦正體を明されたら、同じ迷ひを繰り返す事が出来ないやうに、彼は一度それに氣が附くと、もう何うしても他の見方が出来なくなつて了つた。

「まあ、あなたはわたしが何んなに綺麗だかつて事に、今迄お氣が附かなかつたんですの？」かうエレンが言つてるやうに思はれた。「わたしは女だつて事に、あなたはお氣が附かなかつたんですの？え、わたしは誰にでも、又あなたにも自由にされ得る女ですの。」と彼女の目付が語つた。此の瞬間ビエールは單に可能といふ位の程度でなく、必ずエレンは自分の妻とならねばならぬ、それより他には有りやうがないと感じた。

此の瞬間彼はエレンと結婚の式に列なつたと同じ位正確に、此の事の眞實さを悟つたのである。

何うして何時それが實現されるかといふ事は、彼にも分らなかつた。又これが果して、事か何うか、それも矢張り分らなかつた。(彼は何か寧ろよくない事だ、と云ふやうな感じさへした)。併し、それが必ず實現されるといふ事は、彼も信じてゐた。

ピエールは一旦目を落して又上げた。そして更に彼女を、今迄毎日見てゐたと同じやうな、自分を取つて縁のない、遠方の美女として眺めようと試みた。が、もうそれは出来ない事であつた。丁度以前霧の中でブリヤーン(荒原に生ずる丈高き草)の葉を見て木だと思つてゐたが、後で草の葉だと氣附いてから、もう二度と再び木と見る事が出来ないのと同じであつた。エレンは恐しく彼に近いものとなつた。そして彼に對して威力を持つて來た。もう二人の間には彼自身の意志の障壁より外、何等の障壁も無くなつたのである。

『Bon (結構ですわ) わたくしあなた方を其の隅っこへ打つちやつて置きますわ。其處にゐらつしやる方が、お工合がよろしさうでございますから。』といふアンナの聲が聞えた。

ピエールはどきりとして我に返りつ、何か法に外れた事をしはせぬかと、赤くなつて周りを見廻した。何だか一同の者が、今自分の心に生じた事を、自分と同じ位よく知つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

や、あつて彼が大きなサークルへ戻つた時、アンナは彼に向つて、

『あなた彼得堡のお館を修繕してゐらつしやるさうでございますね。』

それは本當である。技師がさうしなくてはならないと言つたので、ピエールは自分でも何の爲めやら分らずに、彼得堡の大きな家を修理させる事にしたのである。

『C'est bien (結構ですわ)。けれどヴシーリー公爵のお家から、お引越しなされない方がよございますよ。公爵見たいな友達をお持ちになるのは、全くいゝ事でございますもの。』ヴシーリー公爵には、笑み掛け乍ら彼女はかう言つた。『わたくしそれに就いて幾分存じ寄りの事もございませぬ。さうぢやありませんか？ あなたは未だお若いのですから、親切な忠言が必要でございます。でも、わたくしがかうしてお婆さんの権利を行使するのを、お腹立にはなりませんでせうね。』

何時も女が自分の年の事を言つた後で口を噤むやうに、彼女は何やら待ち設けながら口を噤んだ。若しあなたが結婚でもなさるなら、それなら別問題でございますわ。』かう言つて、彼女は二人を一つの視線の中に結び合した。ピエールはエレンを見なかつたし、エレンも亦彼を見なかつたが、彼女は依然として恐しい程自分に近く思はれた。彼は何やら口の中でもぐぐ言つて顔を赤くした。

家へ歸つてからも、ピエールは今日の出來事を考へて、寢就く事が出来なかつた。出來事と言つて、一體何だらう？ 何でもない。彼は只子供の時から知つてゐる女——「エレンは美人だね」と

言はれると、「あ、綺麗だ」と氣にも止めず言つた女が、自分のものになり得るといふ事を了解したばかりである。

「併しあの女は馬鹿だ、俺が自分で馬鹿だと云つたんぢやないか。」と彼は考へた。「あの女が俺の心に呼び醒した感情の中には、何かしら穢らしいものがある、何か禁じられたやうなものが有る。何でも、兄のアナトリーがあれに惚れ込めば、あれもアナトリーに惚れ込んで、何だかごたぐがあるのでは、其の爲めにアナトリーは他へ遣られたつて噂を聞いた。あれの兄のイッポリト……あれの父のヴシーリイ公爵……どうもいけない。」彼は考へた。併し彼がこんな風に反省してゐる時、未だこれ等の反省が完了しない中から、彼は何時しか微笑してゐる自分に氣が附いた。そしてこれ等の反省の陰から、又別な反省が泛び出るのを意識した。彼は彼女のやくざ加減を考へてゐるが、それと同時にエレンが自分の妻となつた時の事や、彼女が自分を愛する様子などを心に描いた。事に依つたら、まるつきり生れ變つたやうな女になるかも知れない、そして彼女について自分で考へたり、又人から聞いたりした事は、みな間違つてゐるかも知れない、などと空想を逞しうするのであつた。

又しても彼はエレンをヴシーリイ某の娘として見ずに、只灰色の着物で蔽はれた彼女の肉體のみを眺めて居た。「併し駄目だ、それなら何うして以前さういふ考へが、俺の頭に浮んで來なかつ

たのだ？」かう考へて、彼はそんな事は到底不可能だと、自分で自分に宣告した。此の結婚の中には何かしら穢らしい、不自然な、卑劣なものが含まれてゐるやうに感じられた。彼は彼女の以前の言葉や眼附、それから自分等二人を並べて一緒に眺めた人達の言葉や、眼附などを想ひ起した。彼は又家の事を自分に話し掛けた時の、アンナの言葉と眼附を想ひ起し、ヴシーリイ公爵其の他の同じやうな、無数の謎めいた言行を想ひ起した。と、彼は急にぞつとした。明らかに善くない、決してしてはならぬと信じてゐる事について、何か自分で自分を縛るやうな行爲をしたのであるまいか？かう思ひ乍ら、又同時に心の一方の隅から、かの女らしい美に充ちたエレンの姿が浮び出るのであつた。

## 二

千八百五年十一月、ヴシーリイ公爵は檢閲の爲めに、四縣に亘つて旅行しなければならなかつた。彼が色々運動して此の命令を受けた目的は、自分の素亂した領地に暫く逗留し、それと同時に息子アナトリーを聯隊所在地から引き連れて、一緒にニコライ・アンドレイヰッチ・ボルコンスキイ公爵の許へ立ち寄り、此の富裕な老人の令嬢に息子を娶せようといふのであつた。併し此の新しい用件の爲めに出立する前、ヴシーリイ公爵は先づピエールの事を決めて置く必要があつた。實

際の所、ピエールは近頃家にばかり——つまり、目下寄寓してゐたヴシーリー公爵家にのみ、幾日も續けて引き籠り、エレンの前に出ると滑稽なほどわく／＼して、馬鹿みたいになる癖に（戀する人といふ者はさうある可きなのだ）、未だ矢張り結婚を申し込まないでゐるのであつた。

『Tout ça est bel et bon, mais il faut que ça finisse（何もかも結構だ、併し早く）。』と或る朝ヴシーリー公爵は、あれ程自分に對して義理のあるピエールが（まあ、それはあの男の勝手だが）、此の場合取つてゐる行動は餘り立派でないと考へたので、愁はしけな嘆息と共にかう獨言ちた。『未だ若い……輕はずみだ……いやまあ、あの男の勝手さ。』ヴシーリー公爵は自分の善良さを、しみじみ満足に感じつゝ、考へ續けた。『併し早く片附けなくちやならんて。明後日はリョーリヤ（エレン）の命名日だから、誰彼の人を呼ぶ事にしよう。で、若しあの男が自分の成すべき事を悟らないなら、その時こそわしの働く時だ。さうだ、わしの働く時だ、わしは父親だからな！』

ピエールは、アンナ・シエーレルの夜會の後、一晚中昂奮して寝られなかつた。そして其の折エレンとの結婚は自分に取つて不幸だ、彼女を避ける爲めに旅行の必要があると決心したし、其の後一月半ばかりの間もその決心を繰り返してゐたが、やはり、ヴシーリー公爵の許を引き拂ひもしなかつた。世間の目から見ると、自分は次第に彼女との關係を深くして行つて、到底以前のやうな見方に歸る事も、彼女から自分をもぎ放す事も出来ない、實に恐い事だ、が何うしても自

分の運命を、彼女に結び附けなくちやならないのだ、とかう彼は恐怖の念を抱きながら感じてゐた。若しかしたら、彼も自己を抑制する事が出来たかも知れないのだが、併しヴシーリー公爵の家で夜會のない晩と云つては、一日もなかつた（公爵家では以前殆ど招待會がなかつたのであるが。）若しピエールが人々の満足を傷つけ、一同の期待を裏切り度くなかつたら、彼は是非此の夜會に出席しなければならなかつたのである。ヴシーリー公爵は時たま家にゐる時なぞ、ピエールの傍を通り過ぎる度に、彼の手を下の方へ引つ張つて、美しく剃り上げた鬚だらけの頬を、接吻の爲めに何氣なく對手の方へ差し出し乍ら、「明日また。」とか、「食事のときにね、でない、わたしはもう君に會へないから。」とか、「わたしは君の爲めに家にゐるよ。」などと言ふのであつた。併しヴシーリー公爵は（彼の言葉に依ると）、ピエールの爲めに家にゐる時でも、彼に向つて二言と口を利かないにも拘らず、ピエールはもう彼の期待を裏切る氣力がないのを感じた。彼は毎日のやうに、いつも／＼同じ事ばかり考へ續けた。

「もうい、加減にあの女を見抜いて了つて、あれが何んな女か、自分で判断をつけなくちやならん。俺は以前思ひ違ひしてゐたのか、それとも今思ひ違ひしてゐるのか？ いや、あの女は馬鹿ぢやない。いや、あの女は立派な令嬢だ！」と時々彼は自問自答するのであつた。「あの女は一度だつて何一つ間違つた事がない、あの女は決して何一つ馬鹿な事を言ひはしなかつた。あの女は

口數こそ少いけれど、言ふ事も單純で明瞭だ。つまりあれは馬鹿でないのだ。又あれは決してまごついた事もなければ、現にまごついたも居ない。つまりあれは難のない婦人なのだ！」

彼は又屢々エレンと議論したり、思索を語り合つたりする折があつた。すると彼女は、其の度に短い乍ら、辻褃の合つた意見を以て答へるか、(其の調子は「わたしそんな事に興味を持つて居ません」と言ふやうであつた)、又は無言のほ、笑みと流眇<sup>なほ</sup>を以て答へるのであつた。そのほ、笑みと流眇とは、彼女の優れた婦人であるといふ事を、何よりも雄辯にビエールに證明した。此の微笑に較べると、あらゆる議論もノンセンスに過ぎない。それは彼女の認めてゐる通りだ。

彼女は何時も悦ばしげな、信じ切つたやうな、ビエール一人にだけ捧げるやうな微笑を以て彼に對した。其の中には、いつも彼女の顔を飾つてゐる一般の人に對する微笑より、もつと意味の深いものがあつた。一同の者は唯々ビエールが最後の一言を發するのを——あの一定の線を超えるのを只管待ちかねてゐる、ビエールもそれを知つてゐた。又彼は自分が晚かれ早かれ、何時か此の線を超えるだらう、といふ事も知つてゐた。けれど此の恐しい一步を考へただけで、えたいの知れぬ恐怖が彼を攔むのであつた。此の一月半の間に、彼は段々と此の恐しい奈落に吸ひ込まれて行くやうな氣がした。此の一月半の間に幾千度となく、ビエールはかう獨言ちた。「一體これは何事だ？ 決斷力が無くちや駄目だ！ 俺にはその決斷力がないんだらうか？」

彼は屢々決心しようとした。けれども、いざといふ場合には、彼が常に自己の中に認め、且つ實際彼の中に在つた決斷力が、何時しか無くなつてゐるのを見て、彼はぞつとしたのである。世間にはよく、自分が全然潔白だと感じた時にのみ、始めて強者たり得る人がある。ビエールも其の仲間<sup>仲間</sup>に屬してゐた。アンナの夜會で、煙草入の上で經驗した欲望が彼の全幅を領してより以來、此の欲望を罪惡とする感情が彼の決斷力を痺れさせたのである。

エレンの命名日には公爵夫人の所謂親戚親友、つまり最も近い人達の小やかな一組が、ヴシー<sup>ヴシー</sup><sup>リイ</sup>公爵の家へ晩饗に招待された。これ等の親戚や親友達は悉く、此の日こそ命名祝の當人エレンの運命が決せられるのだ、といふ事を感じるやうに仕向けられた。客人達は晩饗の席に着いた。クラীগナ公爵夫人は主人側の座に着いてゐた。彼女は嘗ては美しかつたらしい、肥満した堂々たる婦人であつた。其の兩側には老將軍、其の夫人、アンナ・シエール<sup>シエール</sup>など一番の上客が居並んだ。卓の端の方には比較的年の若い、身分の軽い客人達が坐つてゐる。家の者——エレンにビエールも、矢張り其處に並んで坐つてゐた。ヴシー<sup>ヴシー</sup>公爵は晩饗を取らないで、浮きくした上機嫌で卓の周りを歩き乍ら、時々客の誰彼の傍へ坐り込むのであつた。彼は一人々々に無造作な氣持のい、言葉を掛けた。但しビエールとエレンは例外で、彼は此の二人の存在を認めないかのやうに見えた。ヴシー<sup>ヴシー</sup>公爵は一同の者を浮き立たした。蜂蠟製の蠟燭は明るく燃え、銀器、玻

璃器、陶器、婦人の晴着、肩章の金銀モールが輝いて居た。卓の傍を赤い上衣の侍僕等があちこちしてゐる。小刀、コップ、皿の響き、幾組かの會話の活きくした話し聲が、此の卓の周りに聞えるのであつた。

一方の端では一人の老侍従がよぼくの男爵夫人に向つて、燃ゆるが如き愛を打ち明ける聲と老夫人の笑ひ聲が聞えた。又一方にはマリヤ・ギクトロヴナとかいふ女の失敗談がはすんでゐる。卓の真中邊ではヴシーリイ公爵が、自分の周りに聞き手を集めてゐた。彼は婦人達を對手にふざけた微笑を唇に浮べながら、最近——水曜日の閣議の物語をした。此の會議の席で當時有名な、アレクサンドル皇帝の陣中より下し給はれた勅諭が、新任彼得堡總督セルゲイ・クジミッチ・ギヤジミチノフに依つて拜受され、且つ讀み上げられたのである。此の勅諭の中で皇帝はセルゲイ・クジミッチを名指し、朕は諸方より人民の忠節に關する上奏文を受け取るが、彼得堡の上奏文は特に朕に取つて愉快である。朕はかゝる國民の元首たる事を誇とし、此の國民に價ひせん事を努力すると仰せられた。此の勅諭は次の言葉で始つてゐる。「セルゲイ・クジミッチ！諸方より朕が耳に達する風聞に依れば云々……」

「それでは、「セルゲイ・クジミッチ」より先へ、ちつとも進まなかつたんですの？」と一人の婦人が訊いた。

「さうです、さうです、これッから先も。」とヴシーリイ公爵は笑ひ乍ら答へた。「セルゲイ・クジミッチ……諸方より。諸方よりセルゲイ・クジミッチ……氣の毒にギヤジミチノフ氏は、何うしても先へ進む事が出来なかつたのです。何遍も始めから勅諭を讀み直しに掛りましたが、セルゲイといふや否や……もう啜り泣き……ク……ジミ……チー……といふや否や涙……そして「諸方より」はしやくり泣きに消されて聞えないのです。何うしても先へ進む事が出来ない、で又手巾ハンカチを取り出して、又「セルゲイ・クジミッチ！諸方より」と始めると、又涙……で到頭仕方なしに、他の人に讀んで貰ふ事になりました。」

「クジミッチ……諸方より……又涙……」と誰やらが笑ひ乍ら眞似をした。

「そんな意地悪を仰しやるものではありません。」指で脅す眞似をし乍ら、卓の一方の端からアンナ・シェーレルが言つた。「C'est un si brave et excellent homme (あの方は尊敬すべき立派な紳士でございますよ)」あのギヤジミチノフさんは……」

一同は無上に笑つた。卓の上席に坐つてゐる人々は、いろ／＼な燥やいだ氣分の影響を受けて、皆樂しさうに見受けられたが、只ピエールとエレンは卓の殆ど末席に、無言の儘竝んで坐つてゐた。二人の顔にはセルゲイ・クジミッチとは没交渉な、控へ目勝なほ、笑みが輝いてゐた——それは自分の感情に對する羞恥のほ、笑みであつた。他の者が何を言はうと、又何んなに笑つたりふ

ざけたりしようと、何んなに甘味さうにライオン酒や、軟肉や、アイスクリームを食べようと、何んなに此の一對の男女から視線を避けようと、又何んなに此の一對に對して没交渉な顔をしようかと、時々其方へ投げられる人々の一瞥に依つて、セルゲイ・クジミッチの話も、食事も笑も、何もかも表面ばかりで、一座の注意力はすべて此の一對、ビエールとエレンに向けられて居るのではないか、と何故かそんな風に感じられるのであつた。

ヴンリーイ公爵はセルゲイ・クジミッチの啜り泣きを眞似つゝ、同時に娘の方へ一瞥を投げた。又彼が笑つた瞬間には、其の顔がかう言ふやうに思はれた。「さうだ、さうだ。何もかも上首尾だ。今夜一切の事が決るのだ。」アンナは善良なるギヤジミーチノフを掩つて、指で脅す眞似をしたが、ヴンリーイ公爵は、彼女が其の瞬間ちらとビエールの方へ向けて光らした目の中に、未來の花婿と娘の幸福に對する祝辭を讀んだのである。老公爵夫人は沈んだ溜息と共に、隣席の婦人に酒を侷め乍ら、腹立たしげに娘の方を眺めた。彼女は此の溜息で以て、「え、わたしやあなたなどは、もう甘い酒でも飲むより外、何にもする事が無くなりましたよ。今は此の若い二人が大膽に、當附けがましい程幸福になる時なんです。」といふ意を見せたやうであつた。「あ、俺は今自分に取つて、非常な興味でもある事のやうに色んな話をしてゐるが、何て馬鹿々々しいこつたらう。」戀人同志の幸福らしい顔を眺め乍ら、ある外交官は考へた。「これこそ本當の幸福だ！」

一座を結び合してゐるこれ等の無意味で、淺薄な、人工的興味のたゞ中に、美しく健康な若い男女の互に相牽引する、單純な感情が落ち込んだ。そして此の人間らしい感情は一切を壓倒し、すべての人工的な饒舌の上を高翔するのであつた。洒落はあまり愉快でなく、珍しい噂も興が無く、活氣は明らかに拵らへものであつた。單に客ばかりでなく、卓に侍してゐる給仕共までが同じやうな事を感じた。そして輝くばかりの顔をした美人エレンと、赤く肥つた丈夫らしい、而もそははしたビエールの顔を窺ひつゝ、給仕の順序を忘れ勝であつた。蠟燭の光まで此の二人の幸福な顔にのみ、集中されたやうに思はれた。

ビエールは自分がすべての中心だといふ事を感じた。此の位置が彼を悦ばせもすれば、又氣詰りにも感じさせた。彼は丁度何かの仕事に没頭してゐる人のやうな心的状態にあつた。何一つはつきりと見、聞き、了解する事が出来なかつた。たゞ時々斷片的な思想や現實の印象などか、不意と彼の心に閃くのみであつた。

「これでもう一切が終つたのだ！」と彼は考へた。「それに何うしてこんな風になつて了つたんだらう？　こんなに速く？　今俺は分つた。彼女一人自分一人の爲めでなく、すべての人の爲めにこれは必ず實現されなくてはならないのだ。あの人達はみんなそれを期待して、是非實現されるものと信じてゐるから、俺は何うしても、何うしてもあの人達を失望させる譯に行かない。が、何



ういふ工合に實現されるのだらう？俺には分らん、併し實現される、必ず實現されるに相違ない！」自分の目の直ぐ傍に輝く女の肩を眺めつゝ、ピエールはかう考へた。

かう思ふと、彼は不意に何か羞しくなつて来る。自分がかうして一同の注意を一身に集中し、他人の目に又とない仕合者のやうに映つてゐるのが、妙にきまり悪くなるのであつた。彼は美しからぬ顔を持つた自分をば、エレーナ(スバルタ王メネウスの妻はれてトロイに赴く)を自由にしたバリス(トロイ王アリアムの子、トロイ戦争の時フィロクテートの矢に)のやうに感じた。「併しかういふ事は何時も有ること、又かう有る可き筈なんだ。」と彼は自ら慰めた。「けれど俺はかうなる爲めに何をしたのだらう？そして一體何時頃から始つたんだらう？最初俺はヴシーリイ公爵と一緒に莫斯科を立つた。その時には未だ何も無かつたつけ。それからまた、公爵の家に同居しないではゐられないではないか？それから、俺はあれと一緒に歌留多遊びをしたり、あれの婦人袋リヂキユールを拾つてやつたり、一緒に馬車に乗つたりした。一體此の事は何時始つて、何んな風に進歩したんだらう？」今彼は女の傍に花婿として坐つてゐる。そして彼女の近接と、彼女の呼吸と、彼女の身動きじぶと、彼女の美を、見、聞き、且つ感じてゐる。又何うかするとこんな氣持にもなつた——竝々ならぬ美しい容貌を持つてゐるのは、彼女でなくて彼自身である。其の爲めに皆が彼を眺めてゐるのだ。かう考へて彼は一座の驚嘆に幸福を感じつゝ、胸を張り頭を擡たげて、己れの幸福を喜ぶのであつた。突然誰かの聞き覚えのある聲がして、何やら彼

に向つて二度ばかり話し掛けた。併しピエールは他の事に氣を取られてゐるので、何を言つてゐるのやら分らなかつた。

『君は何時ボルコンスキイさんから、手紙を買つたかつて訊いてゐるんだよ。』ヴシーリイ公爵は三度目にかう繰り返した。『君は恐しく、ぼんやりしてゐるぢやないか、え？』

ヴシーリイ公爵は微笑した。と、ピエールは皆が自分とエレンの方を見て、微笑してゐるのに氣が附いた。「え、あなた方皆さん御存じなら仕方がありませんさ。」とピエールは考へた。「え、仕方がありませんさ、本當なんですもの。」彼自身も持前のつゝ、ましやかな、子供らしい微笑を浮べた。するとエレンもほ、笑んだ。

『何時貰つたんだね、君？オルミユツから？』ヴシーリイ公爵はまるで議論を決する爲めに、是非それを知らねばならぬかのやうに繰り返した。

「一體こんな下らん事を言つたり、考へたりして宜いものか知らん？」ピエールはかう思つた。「え、オルミユツからです。」と彼は嘆息と共に答へた。

晚餐の後ピエールは一同に随つて、エレンを客間へ連れて行つた。客は散り始めた。中には重大な仕事から手を放さず事を望まないもの、やうに、エレンに暇を告げずに歸つて行くものもあつた。中には一寸エレンの傍へ立ち寄つて、見送りを斷り乍らあたふた逃げて行く人もあつた。

外交官は物思はしげに黙り込み乍ら客間を出た。彼は自分の外交界に於ける立身出世も、ピエールの幸福に比べては、空の空なるものに思はれたのである。老將軍は足の加減は何うかと夫人に訊かれた時、腹立たしげにぶつ／＼言つた。

「何て間抜け婆々だらう！」と彼は考へた。「あのエレーナ・ヴシーリエヴナなどは、五十になつて矢張り美しいこつたらうなあ。」

『何うやらお祝申し上げても宜しいやうでございますね。』アンナ・シェーレルは公爵夫人にかう言つて、強く接吻した。『わたくし頭痛さへしなかつたら、もう少しお邪魔致すのですけれど。』

公爵夫人は何とも返事しなかつた。娘の幸福に對する嫉妬が彼女を苦めたのである。

ピエールは人々が客を見送つてゐる間中、長い事エレンと只二人小さな客間に對坐してゐた。彼は此の一月半の間しよつち、エレンと差し向ひでゐる事があつたが、決して戀の話などした事はなかつた。けれど今はそれをしなければならぬと感じた。とは言へ、彼は最後の一步を踏み出す決心が附かなかつた。何だか恥しい。かうしてエレンの傍に坐つてゐるのが、まるで他人の席でも占めてゐるやうな心持がする。「此の幸福はお前の受くべきものぢやない。」心内の或る聲がかう言つた。「此の幸福はお前の持つてゐる或る物の缺けた人が、當然受く可き性質のものだ。」けれど何か言はなければならぬ、で彼は話し出した。彼はエレンに向つて、今日の夜會は満足

であつたか何うかと訊ねた。彼女は何時ものやうに持前の單純な調子で、今日の命名祝は自分に取つて最も愉快なもの一つだつたと答へた。

一番近しい親戚の誰彼は未だ居残つてゐた。彼等は大きい方の客間に腰掛けてゐた。ヴシーリー公爵は怠儀さうな足取でピエールに近寄つた。ピエールは立ち上つて、もう遅いですねと言つた。ヴシーリー公爵は嚴つい質問するやうな眼附で彼を眺めた。それは丁度彼の言葉が餘り奇怪で、聞き分ける事さへ出来ないほどだ、といふやうな風附であつた。併し直ぐ嚴つい表情が消えて、ヴシーリー公爵はピエールの手を下へ引つ張りながら席に着かせ、優しく微笑して見せた。

『うむ、何うだね、リョーリヤ？』と彼は馴れ切つた優しい鷹揚な調子で娘に向つた。此の調子は幼い頃から子供を可愛がつてゐる親達か、何時となしに呑み込むものであるが、ヴシーリー公爵は單に他の親達を模倣して、これを習得したのである。

彼は又ピエールに向つて、

『セルゲイ・クジミッチ、諸方より。』胴衣チコツキの上の釦を一つ外しながら、彼はかう言つた。

ピエールは微笑したが、此の時ヴシーリー公爵の興味を占めて居るのは、セルゲイ・クジミッチの逸話などでない事を、彼もちやんと了解してゐた。それは彼の微笑に依つて察しられた。またヴシーリー公爵も、ピエールがこれを了解してゐるのを曉しつたのである。ヴシーリー公爵は突然

何やら口の中でぶつ／＼言ひ乍ら出て行つた。ビエールはヴシーリイ公爵すらまごついてゐるのだと感じた。此の年取つた社交に馴れた紳士の當惑の様は、ビエールを感動させた。でエレンの方を振り返ると——彼女も矢張り當惑した様子で、其の眼附は「仕方がありませんわ、あなた御自身がお悪いんですもの。」と言つてゐるやうに思はれた。

「何うあつても一步踏み越さねばならぬ。併し俺には出来ない、出来ない。」とビエールは考へて、又他所事を話し出した。彼はセルグイ・クジミッチの逸話は何んな筋かと訊ねた。彼は此の話を碌々聞いてゐなかつたので。エレンはほ、笑み乍ら、自分も矢張り知らないと言へた。

ヴシーリイ公爵が客間へ入つた時、夫人は中年の婦人とビエールの噂をしてゐた。

『無論 C'est un parti très brillant (あれ遣二人は立派な、好一對ひでございます)、けれどもねえ、あなた、幸福と申すものは……』

『La mariage se font dans les cieux (結婚は天国で行はれる)のものでござりますよ。』と中年の婦人は答へた。

ヴシーリイ公爵は婦人連の話を聞かうともしないで、遠く離れた片隅へ引つ込んで、長椅子に腰を下した。彼は目を閉ぢてまどろむかのやうであつた。ふと頭ががく／＼と落ちて彼は我に返つた。

『Aline, allez voir ce qu'ils font (アリーナ、二人が何をし、どうか一寸見て御覽)。』と彼は夫人にかう言つた。

公爵夫人は戸口に近寄り、意味ありけな無關心な眼附をして其の傍を通り抜けさま、客間の中を窺つた。ビエールとエレンは前の通り坐つて話をしてゐた。

『矢張り同じ事ですよ。』彼女は良人に向いてかう答へた。

ヴシーリイ公爵は眉を擡め、口の片々へ皺を寄せた。其の頬は彼特有の不愉快で粗野な表情を帯びながら、びく／＼と引ッ吊つた。彼は身慄ひして立ち上り、頭を後ろへ反らして、決然たる足取りで婦人達の傍を通り抜け、小さい方の客間へ赴いた。彼は急ぎ足で嬉しげにビエールに近附いた。公爵の顔が異様なくらゐる物々しげであつたので、ビエールはそれを見ると憎えたやうに立ち上つた。

『有難い事だ！』と彼は言つた。『家内がわたしにすつかり話して呉れました！（彼は一方の手でビエールを、今一方の手で娘を掻き抱くのであつた）。これ、リョーリャ！ わたしは大變、大變嬉しい。（彼の聲は顫へた。）わたしは君のお父さんを愛してゐた……リョーリャは君の爲めに立派な妻となるだらう……神様も君達を祝福して下さるだらう……』

彼は娘を抱きしめ、それから再びビエールを抱き寄せて、臭い息のする口で彼を接吻した。涙が本當に彼の頬を濡らしたのである。

『アリーナ、此方へ來な！』と彼は叫んだ。

公爵夫人も出て来て矢張り泣き出した。中年の婦人も同様にハンカチで涙を拭いてゐた。ピエールは人人に接吻され、又自分でも幾度か美しいエレンの手を接吻した。暫くの後、又二人は差し向ひで取り残された。

「これはみんな當然かうある可きで、他に仕方が無かつたのだ。」とピエールは考へた。「だから善い事が悪い事か、そんな事を穿鑿する必要は少しもない。又實際いゝのだ。何故といつて、今はもうすべてが決定して、以前のやうな疑惑がなくなつたんだもの。」ピエールは無言の儘許嫁の手を取つて、高くなり低くなる美しい胸を眺めてゐた。

『エレン！』と彼は聲を立て、言つて、一寸口を切つた。

「かういふ場合何か特別な事を言ふのだつたツけがなあ。」と彼は考へた。併しかういふ場合、果して何んな事を言ふのやら、何うしても想ひ出す事が出来なかつた。彼は女の顔を眺めた。と彼女は尙近くピエールの方へ摺り寄つた。彼女の顔はぱつと赤くなつた。

『あ、脱して下さい。これを……何て言ひましたツけ……これを……』と彼女は眼鏡を指さした。

ピエールは眼鏡を脱した。すると彼の眼は、一般に眼鏡を脱した人に特有の奇妙な表情の他、憎えたやうな怪訝さうな色を帯びて來た。彼は屈み込んでエレンの手に接吻しようとした。が、彼

女は素早く粗野な身振で首を動かし乍ら、男の唇を捕へて自分の唇に合すのであつた。彼女の顔は急に變つた。不愉快な氣の遠くなつたやうな表情がピエールを驚かした。

「今はもう遅い、萬事了つたのだ。それに俺は此の女を愛してゐる。」とピエールは思つた。

『Je vous aime ! (わたしはあなたを愛します！)』かういふ場合に言ふべき事を想ひ出して、彼はかう言つた。けれどもこれ等の言葉は、自分乍ら恥しくなる程貧弱な響を發した。

一月半を経て彼は結婚した。そして世間の口を借りて言へば、美しい妻と數百萬の財産の所有者として、彼得堡で新たに修繕された、ベズーホフ伯爵家の宏大な邸宅へ移り住んだのである。

### 三

老公爵ニコライ・ボルコンスキイは千八百五十年十一月、ヴシーリイ公爵から子息同道の來訪を報じた手紙を受け取つた。「尊き恩人よ、小生は目下檢閲の爲め巡回中に御座候。申す迄もなく尊公を訪ふ可く一百露里の道は、小生に取りて決して迂路には無之候。」と彼は書いた。而して豚兒アナトリーも小生を見送り旁々、歸隊の途に有之候。希くば彼が平素父を傲ひて、尊公に對して懐抱せる深き敬意を、親しく披瀝するを許されん事を。」

『ほら、此の通り、わざ／＼マリイさんを引つ張り出す事はございませんわ。お婿さんが向う

から此方へやつて来るんですもの。』此の話を聞き附けた小柄な公爵夫人が、不用意にかう口をこらした。ニコライ公爵は眉を擧めて何も言はなかつた。

此の手紙を受け取つてから二週間たつた或る夕方、ヴシーリイ公爵の供人が先に到着し、次の日に公爵自身息子と共にやつて来た。

ボルコンスキイ老公爵は、常にヴシーリイ公爵の人格を、高く評價してゐなかつた。殊に最近パーゼル、アレクサンドル兩帝の新らしい治世になつて、ヴシーリイ公爵の官位も名聲も著しく高まつてから、殊更それが酷くなつて来た。所で、今度此の手紙と小柄な公爵夫人の暗示に依つて、事の真相を理解したとき、ヴシーリイ公爵に關する高くない評價が、老公爵の心の中で意地悪い輕蔑の念に變つたのである。彼はいつもこの人の話が出ると、鼻を鳴してゐた。ヴシーリイ公爵の到着す可き當日、老公爵は殊に不満足で不機嫌であつた。ヴシーリイ公爵が来る爲めに不機嫌であつたのか、それとも不機嫌であつたから、殊にヴシーリイ公爵の到着を不満に感じたのか、兎に角彼は不機嫌であつた。で、チーホンは未だ朝の中から技師に向つて、公爵の許へ報告に行くのを止めるやうに忠告した。

『あの歩き方を聞いて御覽なさい。』チーホンは公爵の足音に技師の注意を促し乍ら、かう言つた。

『踵をすつかり附けて歩いてゐらつしやいます……わたしなんかもう分つてゐますよ。』

けれど何時もの如く八時を過ぎた頃、公爵は黒貂の襟のついた天鷲絨の外套に、同じ黒貂の帽子を着けて散歩に出た。前夜雪が降つたので、ニコライ公爵が温室の方へと歩いて行く徑は、すつかり掃き清められて箒目が雪に残つてゐた。徑の兩側に續く柔い雪の盛り上げには、シヨベルが一本刺し込んであつた。公爵は温室、下男部屋、普請中の建物などを、眉を擧めながら無言に見て廻つた。

『橋が利くかな?』彼は家まで見送つて来た、品のいい支配人にかう訊いた。此の男は顔から身振までよく主人に似てゐた。

『雪は深うございます、御前。わたくしは本道の方も掃いて置くやうに、申し附けましてございます。』

公爵は頭を傾けて入口の石段に近附いた。「あ、有難い。」と支配人は考へた。「黒雲が通り過ぎた。」

『橋で行くには骨が折れましてございます。』と支配人は言ひ足した。『承りますると、御前、大臣様がお邸へお見えになるさうでござりますな?』

公爵は支配人の方を振り返つた。そして目を擧め乍らじつと彼を見据ゑた。

「何だ？大臣様だ？何んな大臣だ？誰がそんな事を吩咐けた？」彼は持前の突き刺すやうな固い聲でかう言つた。「公爵令嬢の——わしの娘の爲めではなく、大臣の爲めに掃除したんだな！わしには大臣なんか無いんだぞ！」

「御前、わたしの考へましたのは……」

「貴様の考へだつて、」次第に急ぎ込んで亂れ勝ちな發音をし乍ら、公爵は叫んだ。「貴様の考へだつて！……泥棒！悪黨！……わしが貴様に物の考へ方を教へてやる。」かう言つて杖を振り上げると、彼はアルバーテッチ、(支配人)目掛けて打ち下した。若し支配人が思はず身をかはさなかつたら、彼はした、か打ち据ゑられる所であつた。「考へだつて……悪黨！」と彼は口疾くちやくに叫んだ。けれどもアルバーテッチが、主人の答から身を翻すなど、いふ自分の大膽に驚いて、素直に禿頭を垂れ乍ら公爵に近附いたにも拘らず、(或ひは却つてこれが爲めかも知れぬ)公爵は「悪黨！……道なんか打ツちやつて了へ！……」と叫び續け乍ら、再び杖を振り上げようともせず、家中へ馳せ込んだ。

食事の前に、公爵の不機嫌を知つてゐた令嬢とブリエンヌとは、公爵が出るのを待ち設け乍ら立つてゐた。ブリエンヌは、「わたしは何にも存じません。わたしは何時もの通りです。」といつたやうな晴れくしい顔をしてゐた。が、マリヤは憎えたやうに蒼い顔をして目を伏せて居た。マ

リヤに取つて何より苦しいのは、かうした場合當然ブリエンヌのやうに振舞ふ可きであるにも拘らず、自分にはそれが出来ないといふ意識であつた。彼女はこんな氣がした。「若しわたしが何の氣も附かぬやうなふりをしてゐたら、お父さんはわたしに同情がないと思ひになるだらう。又わたしが自分で悲しさうな不機嫌らしい様子したら、よくあるやうに、お前は又べそを搔いてると仰しやるに相違ない。」

公爵は娘の憎えたやうな顔を見て鼻を鳴した。

「おま……いや、お馬鹿さん」と彼は言つた。

「それにあいつが居ない！もう下らん事を吹き込まれたんだな。」食堂に姿の見えない小柄な公爵夫人の事を、彼はかう考へた。

「奥さんは何處にゐる！」と彼は訊ねた。「隠れてゐるのか？」

「奥様は何うも加減がお勝れになりませんので、」樂しげにほ、笑みつ、ブリエンヌがかう言つた。「食事にお出になりません。それもお體がお體ですから、御無理もございませぬ。」

「フム！フム！クフ！クフ！」と言つて公爵は食卓に着いた。

皿は清潔でないやうに思はれた。彼は汚點しみを指さして、皿を抛り出した。チーホンはそれを受け止めて食堂番に渡した。公爵夫人は加減が悪いのではなかつた。彼女は極度に公爵を恐れてゐ

たので、彼が不機嫌だと聞くと、今日は食事に出まいと決心したのである。

『わたし赤ちやんの爲めに心配するんですの。』と彼女はブリエンヌに言った。『あまり吃驚したら、何んな事になるか分かりませんもの。』

全體として小柄な公爵夫人は常に老公爵に對する恐怖と、自ら意識せざる嫌悪(何故といつて、恐怖の方が勝を占めてゐる爲めに、彼女は此の嫌悪を感じなかつたのである)の感情に支配されながら、禿山ルシエゴールに暮してゐた。公爵の側そばから言つても矢張り嫌悪の念があつたのだが、それは侮蔑の爲めに隠されてゐた。公爵夫人は此の禿山ルシエゴールに住つてゐる中に、格別ブリエンヌを愛するやうになつて、大抵彼女と共に日を過し、夜も一緒に寝て貰ひ、屢々二人で舅の噂をして、かれこれと批評するのであつた。

『Il nous arrive du monde, mon prince (お宅へお客様がいらすね、公爵)』とブリエンヌは薇蓄色した手で、白いナヅキンを擴げ乍ら言つた。『クラীগン公爵閣下に御子息だとか承つてゐましたが?』と伺ふやうに彼女は言つた。

『ふん……あの小僧ツ子閣下か……わしは彼奴を大學に入れてやつたよ。』と侮辱を感じたやうに公爵は言つた。『所で、息子の方は何の爲めに來るんだ、譯が分らん。リザエータ・カールロヅナ公爵夫人(ザリ)や、マリヤ公爵令嬢なんかはご存じかも知れんがな、わしは何故あの男が息子を

此處に連れて來るのか、一向譯が分らんて。わしには用がない(かう言つて彼は、眞赤になつた娘の顔をじろりと見た)。體の工合でも悪いのか、うむ?それとも今朝アルバーティチの馬鹿が言つた「大臣様」のお出でが恐いのか?』

『い、え、お父様。』

ブリエンヌが機轉を利かして持ち出した話題は、随分拙いものであつたけれど、それでも彼女は閉口しないで温室の事だの、新たに咲き初めた花の美しさなどを喋り續けたので、公爵の機嫌は肉汁ナイフが終つた頃少し柔らいで來た。

食事の後彼は嫁の部屋へ行つた。小柄な公爵夫人は小さな卓に向つて、小間使のマーシャとお喋りしてゐたが、舅を見ると眞蒼になつた。

小柄な公爵夫人はすつかり變つて了つた。今彼女は美しいといふより、寧ろ醜い位であつた。兩頬はこけて唇は上の方へ反り返り、目は下の方へたるんでゐた。

『え、何うも苦しくつて。』加減は何うかといふ老公爵の間に、彼女はかう答へた。

『何か要るものはないか?』

『い、え、難有う、お父さま。』

『いや、よし、よし。』

彼は其處を出て侍僕室へ行つた。アルバーティチは首を垂れて侍僕室に立つてゐた。

『道はうツちやつて有るか?』

『うツちやつてござります。御前。お免し下さいませ、願ひでございます……只愚か者の癖として……』

公爵は彼を遮つて、例の不自然な聲で笑ひ出した。

『いや、よし、よし。』

と彼は手を差し伸べてアルバーティチに接吻させると、自分の書齋へ入つて了つた。

夕方ヴシーリイ公爵が到着した。馭者や侍僕等がプレシユベクト(オーストリア)(大通の事をかう言ふので)へ出迎へに出た。そしてわざと雪を撒き散らした道の上を、がやぐらと喚き乍ら荷車や橋を離れの方へ運んで行つた。

ヴシーリイ公爵とアナトリーには特別な部屋が設けられてあつた。

アナトリーは胴衣(チヨツキ)を脱いで、両手を脇へ支へ乍ら卓の前に座を占め、微笑を含みつつ、美しい大きな目を、卓の一角にじつと意味も無く注いでゐた。彼は人生全體を絶間なき娯樂と見てゐた。何の爲めか分らないが、誰か一定の人が彼の爲めに、是非その娯樂を提供せねばならぬ義務を有つてゐるのであつた。意地悪い老人と、富裕な醜い相續者に對する今度の訪問も、彼はそれと同

じやうに見てゐた。彼の想像に依ると、これも中々結構で愉快な事かも知れないのであつた。

『其の娘が非常な金持ちだとすれば、結婚してならんといふ法はない。そんな事は決して何の邪魔にもなりやしない。』とアナトリーは考へた。

彼は習慣になつたためか、しやの細心な注意を以て、顔を剃つて香水をつけ、生れ付きの人の好い勝ち誇つたやうな表情を浮べ乍ら、美しい首を高く反らして父の室へ入つた。ヴシーリイ公爵の傍には二人の侍僕が、主人の着換へに忙しく立ち働いてゐた。公爵は元氣よく自分の周りを見廻して居たが、入つて来る我子の姿を見て、『さうだ、さういふ風にして居て貰ひ度いのだ、』と言つたやうに、楽しげに點頭(うなづ)いて見せた。

『ねえ、お父さん、冗談はぬきにして、本當に見つともない女ですか?え?』旅行中一度や二度でなく試みた會話の續きと言つたやうな工合に、彼はかう訊ねかけた。

『澤山だよ。馬鹿な事を!何よりも第一に、老公爵に對して成るべく恭しく、分別ありけにしないでなくちやならんぞ。』

『若し亂暴な事を言つたら歸りますよ。』とアナトリーは言つた。『僕あ、いふ老人は大嫌ひなんですからね。え?』

『い、かね、お前の一生の運はこれ一つで決るんだぞ。』



此の時女中部屋では、單に大臣父子の到着が知れてゐるばかりでなく、兩人の外貌迄すつかり細かに語られてゐた。マリヤは只一人自分の部屋に坐つて、心内の動搖を押し鎮めようと空しく努力してゐた。

「何だつてあの人はあんな手紙を寄越したんだらう、何だつてリーザがわたしにあんな事を言つたんだらう？だつてそんな事が有らう筈はない！」鏡を覗き乍ら彼女は獨言ちた。「何うしてわたしは客間へ出て行かう？もし其の人がわたしの氣に入つたとしたら、わたしは其の前で、いつもの自分のやうにしてゐられないかも知れない。」彼女は父の眼附を考へただけで、思はずつとしたのである。小柄な公爵夫人とブリエンヌは小間使のマーシャから、大臣の子息が眉の黒い紅顔の美男子だといふ事や、父がやつと足を摺り乍ら階級を登つて行くのに、息子の方はまるで鷲のやうに三段づ、も飛び越えて、父の後から馳け上つたといふ事など、あらゆる必要な情報を手に入れた。で、小柄な公爵夫人はブリエンヌと共に、マリヤの所まで聞えるほど賑かな聲で廊下を話し合ひ乍ら、公爵令嬢の室へ入つた。

『Ils sont arrivés, Marie (お着きになりまし)。あなた知つてらつしやる？』大きな腹を揺るやうにし乍ら、重々しく肘椅子に腰を下して小柄な公爵夫人はかう言つた。

彼女はもう毎朝着る寛衣ブルガでなく、晴衣の一つを身につけてゐた。頭は念入りに取り上げられ、

顔には活氣が溢れてゐた。がそれでも、やつれて生氣を失つた顔の輪廓を、隠す事は出来なかつた。何時も彼得堡の社交界で着てゐた着物をつけて見ると、彼女の恐しく醜くなつた事が、一層目立つて來るのであつた。ブリエンヌも目立たぬやうに念入りの身仕舞をしてゐたが、それが彼女の可愛い活々した顔に、一倍男を引き寄せる力を添へたのである。

『Eh bien, et vous restez comme vous êtes, chère princesse (まあお嬢さま、あなたはまだ着の)。』と彼女は言ひ出した。『もうお客様がお出ましになつたと言つて參る頃ですに。階下へお下りにならなくちやなりませんから、ほんの一寸でも身仕舞をなすつたら宜しうございませう。』

小柄な公爵夫人は肘椅子から立ち上り、呼鈴を鳴らして小間使を呼んだ。そして忙しげな而も樂しさうな面持で、マリヤの爲めに衣裳を工夫し、それを實行にとり掛つた。マリヤは約束された花婿の候補者の到着が、自分をこれほど動搖させたかと考へると、自分の品位を侮辱されたやうな感じがした。併しそれより一層彼女を侮辱したのは、此の二人の友が頭からそれを當り前と決めてゐる事であつた。自分自身に對しても、亦彼等二人に對しても、極りが悪いなど、言ふのは、取りも直さず自分で自分の昂奮を白狀するやうなものである。それに二人の薦める化粧を拒絶すれば、擲擻からがはれたりしつこく、勧められたりする時間を、徒らに長く引き延ばすばかりである。彼女はかつと赤くなつた。平常の美しい目の光は消えて、其の額は一面に赤い斑紋しみに蔽はれて了

つた。そして彼女の顔に最も屢々現れる、醜い犠牲の表情を浮べつ、ブリエンヌとリーザの自由に任せたのである。二人の女は彼女を美しくしようと、全く真心から心配してゐた。令嬢は實際醜い顔をして居たので、二人共彼女と競争しようなど、いふ心は夢にも起らなかつた。で、化粧は常に顔を美しくするといふ、婦人固有の無邪氣な固い信念を以て、真心こめて彼女の着換に取り掛つた。

『い、え駄目よ、ma bonne amie(わが友よ)、此の着物はいけません。』とリーザは遠くからマリヤを斜に眺め乍らかう言つた。『さう言つて出させて頂戴、あなた海老茶の服を持つてゐるでせう。本當にねえ、若しかしたら、これで一生の運が決るかも知れないですからね。これは餘り薄過ぎますわ、駄目、全く駄目よ!』

駄目なのは着物でなくて、マリヤの顔と姿全體であつた。けれど公爵夫人もブリエンヌもそれと氣附かなかつた。二人は髪を上の方へ梳き上げて空色のリボンを附け、海老茶色の着物に空色のシヨールを垂らしなどしたら、すつかり良くなるやうに思はれたのである。彼等は憎えたやうな顔や姿を變へる譯に行かない、といふ事を忘れてゐたのである。それ故、二人が何んなに此の顔の粹や裝飾を變へても、顔その物は矢張りどこ迄も哀れつぽく醜い儘であつた。マリヤが従順しく言ふ通りになつてゐたので、二人は二度も三度も作りを變へて見た。漸く公爵令嬢は髪を上

へ掻き上げ(此の結び方は全く彼の女の顔を見違へさせ、且つ醜くしたのである)、空色のシヨールに海老茶色の華美な服を着け終つた。その時小柄な公爵夫人は二度ばかりマリヤの周りを廻つて、小さな手でちよいと着物の襷を正して見たり、シヨールを引つ張つて見たりし乍ら、小首を傾けて右左から交るく眺めてゐたが、

『いえ、これぢやいけません。』と両手を叩き乍らきつぱりと言つた。『Non, Marie, décidément ga ne vous va pas(駄目よ、あなたに似合はなかつてよ)。わたしあの鼠色の平常着を着てらつしやる時の方が好きですわ。ね、何うぞわたしの爲めだと思つてさうして頂戴。カーチャ。』彼女は小間使に向つてかう言つた。『お嬢様の鼠色の着物を持つておいで。ね、見てらつしやい、ブリエンヌさん、わたしが巧くやつてお目に掛けますからね。』と彼女は藝術家らしい悦びを、もう今から味ふやうな微笑を浮べながらかう言つた。

カーチャが吩咐けられた着物を持つて來た時、マリヤは自分の顔を見詰め乍ら、鏡の前に身動きもせず坐つてゐた。と、自分の目の中に涙が溜つて、口は今にもわつと泣き出しさうに慄へてゐるのを、鏡の中に見附けたのである。

『Voyons, chère princesse, encore un petit effort(ねえお嬢さま今一寸の御辛抱ひなさりますよ)』とブリエンヌが言つた。

小柄な公爵夫人は小間使の手から着物を取つて、マリヤの傍へ近附いた。

『さあ、今度はわたしさつぱりと可愛くして見せますわ。』と彼女が言った。何やら笑ひ乍ら話してゐる夫人と、ブリエンヌとカーチャの聲が、まるで小鳥の唄か何ぞのやうな、一つの楽しいな囁きに溶け合つて聞えた。

『Non, laissez-moi (ええ、もう打つて)』とマリヤが言った。

其の聲は、かの小鳥の唄が一時にぱたりと止んで了つた程、眞面目な苦惱の響を帯びてゐた。二人は涙と思慮に充ちた、祈るやうな明るい表情を以て自分達を眺めてゐる、大きな美しい双眼を見詰めた。そしてこの上すゝめるのは無益でもあり、慘酷でもあると曉つた。

『それにしてもせめて、頭だけでもお變へなさいな。』と小柄な公爵夫人は言った。『だからわたしさう言つたんですわ。』彼女は答めるやうな調子でブリエンヌにかう言つた。『マリーさんの顔はかういふ風の結び方が、まるで似合はないやうな性質なんですよ。駄目です、駄目です。後生ですから直して頂戴。』

『うツちやつて下さい、うツちやつて下さい、わたし何うだつて構ひませんから。』やつとの思ひで涙を泳えてゐるやうな聲が答へた。

ブリエンヌも小柄な公爵夫人も、こんな恰好してゐるマリヤの姿が非常に醜く、却つて平常より悪い位だといふ事を、腹の中で認めない譯に行かなかつた。がもう遅かつた。二人の女がよく知

つてゐる表情——思慮と憂愁に充ちた表情で、マリヤは相手の顔を見詰めてゐた。此の表情はマリヤに對する不安の念を二人の女に抱かせなかつた。(彼女は決してかういふ感情を他人に抱かせなかつた)。併しこの表情が彼女の顔に浮んだ時、彼女は常に黙り勝ちで、その決心を動かす事が出来ないのを、二人の女はよく心得てゐた。

『Vous changerez, n'est-ce pas (あなたお直しなさい)』とリーザが言った。けれどマリヤが何とも答へないのを見て、リーザは部屋を出て行つた。

マリヤは一人になつた。彼女はリーザの希望を果さなかつた。そして頭を直さなかつたばかりか、鏡を覗いて見ようともしなかつた。彼女は力無げに目を伏せ手を垂れて、言葉も無く坐つた儘考へ込んでゐた。彼女の想像に良人の姿が浮んで來た。それは突然自分を特殊な全然違つた幸福な世界に移して呉れる、すべてを征服するやうな、何故とも知れぬ魅力を持つた強い存在である。又丁度昨日乳母の娘の所で見たと同じやうな、自分の赤ん坊が彼女自身の胸の上に想像された。良人は傍に立つて、優しく彼女と赤ん坊を眺めてゐる。『だけど駄目だ、それは不可能の事だ。わたしは餘り醜く過ぎる。』と彼女は考へた。

『お茶を召し上りにいらつしやいませ。御前さまも直ぐお出ましでございます。』戸の蔭から小間使の聲が聞えた。

彼女は我に返つた。そして自分で自分の考へにぞつとした。で階下へ降りる前に、彼女は立ち上つて聖像の間へ入つた。燈明の光に照されてゐる救世主の大きなみ像の、黝い顔にちつと目を注ぎつゝ、幾分かの間兩手を組んだ儘、じつと其の前に立ち盡した。マリヤの胸には苦しい疑惑があつた。果して自分には愛の悦び、男性に對する地上の愛の悦びが可能であらうか？結婚のことを様々に思ひ巡らしたマリヤは、家庭の幸福と子供といふ事も空想した。が彼女の一番重なる、一番力強い祕密の空想は地上の愛であつた。この感情は彼女が他人に、否、自分に隠さうと努めれば努める程、益々強くなつて行つた。

「神様！」と彼女は言つた。「わたしは此の心の中にある悪魔のやうな考へを、何うして征服したらよろしいのでせう？穩かにあなたの御意に従ふ爲めには、何んなにして此のよくない望みを、永久に斷念したらよいのでございませう？」

彼女が此の間を發するか發しないかに、早くも神は彼女自身の胸の中で答を與へた。「己れの爲めに何物をも望むな。求めるな、心を動かすな、羨むな。人間の未來もお前の運命も、お前に取つて未知であらねばならぬ。とは言へ、一切の事に對する覺悟と用意とを以て生きよ。若し結婚生活の義務を以て、神がお前を試みようと思つたなら、お前は神の御意を果すだけの用意をして居ればよいのだ。」かういふ幾分慰藉を含んだ想念を以て、(彼女はそれでも矢張り自分に禁ぜられ

た地上の愛が與へられるかも知れぬと、一縷の希望を繋いでゐるのであつた。)マリヤは吐息をつき乍ら十字を切つて、もう自分の頭の事も、着物の事も、又何んな風に客間へ入つて、何を言つたら宜からう、など、いふ事も一切考へずに、階下の方へおりて行つた。これ等すべてのことは神の定めに較べて、何程の意味を持ち得ようぞ。神の意に依らずしては、人の頭の髪の毛一筋すら落ちる事がないではないか！

#### 四

マリヤが客間へ入つたとき、ヴシーリイ公爵親子はもう其處に在つて、小柄な公爵夫人とブリエンヌと話してゐた。彼女が例の重苦しい足取りで、踵をすつかり附け乍ら入つた時、客とブリエンヌは立ち上つた。小柄な公爵夫人は客に彼女を指さして見せ乍ら「Voilà Marie! (Voilà Marie!)」と言つた。マリヤは一同の者を見た、而も細かく見た。彼女の姿を見るや否や、眞面目な凍つた表情を浮べたが、直ぐ其の瞬間微笑みかけたヴシーリイ公爵の顔を見、また義妹が客に與へる印象を讀まうと、好奇心に輝く小柄な公爵夫人の顔をも見た。ブリエンヌのリボンと美しい顔と、今迄になく活き／＼として「彼の人」を注視してゐる目色とを見た。併しマリヤは「彼の人」を見る事が出来なかつた。只部屋へ入つた時、何かしら大きな目映ゆいやうな物が、自分の方へ近寄つたの

を見たばかりである。最初彼女の方へヴシーリー公爵が近寄つた。で、彼女は自分の手の上に屈み込む禿頭に接吻して、「いいえ、それ所ではございません、あなたの事はよく記憶して居ます。」と相手の言葉に答へた。其の後でアナトリーが近寄つた。彼女はそれでも未だはつきり彼を見る事が出来なかつた。たゞ自分の手を固く握つた華奢な手の接觸を感じつゝ、美しく撫で附けられた美事な亞麻色の毛の下に輝く白い額に、おづ／＼と唇を觸れた。彼女が初めて男に一瞥を投げた時、その美しさは彼女を眩惑した。アナトリーはきちん／＼と掛けた軍服の釦に右手の親指を當て胸を前に脊を後に反らせ、一步退らせた片足を軽く動かし、心持首を傾け乍ら、彼女の事などは全然念頭に置いてないやうな風附で、無言の儘愉快けにマリヤを眺めてゐた。

アナトリーは頓才もなければ敏活でもなく、又話をさせても雄辯ではなかつたが、その代りにいつも落ち着き拂つて、何物にも自己の確信を曲げられないといふ、社交上尊重す可き能力が有つた。若し初対面の時自信の無い人が黙り込んで了つて、而もこの沈黙のばつの悪さを感じ、何か話題を發見しようとあせるやうな風を見せたなら、それは尙工合の悪いものであるが、アナトリーはそれと正反對に片々の足をぶら／＼として、愉快けにマリヤの髪を見廻し乍ら、口を噤んでゐるのであつた。見た所、彼はかうして何時迄でも黙り續けてゐる事が出来るらしい。「若し誰でもかうして黙つてゐるのが、きまりが悪いと思つたら、何うぞ遠慮なくお話し下さい。但しわた

しは厭ですよ。」とでも云ふやうな風附であつた。その他彼が女に對する態度の中には、何よりも有効に女の好奇心と恐怖と、愛情さへ咬るやうな所があつた——それは對手を侮蔑したやうな自己優越の自覺を示す舉動であつた。彼の様子は、「わたしはあなた方を承知してゐます、よく承知してゐます。併しあなた方を對手に騒いだ所で何になりますか？尤もあなた方はさぞご満足でせうがね！」とでも言ふやうであつた。實際彼は女に會つた時、こんな事を考へなかつたかも知れぬ。(いや考へなかつたのが本當らしい。何故と言つて彼は全體に、あまり物事を考へない男であつたから。)けれども彼の態度や舉動がこんな風なのであつた。マリヤはそれを感じたので、わたしなぞにあなたのお對手が出来ようとは思ひも寄りません、といふ意を示さうとするかのやうに、直ぐ父公爵に向つて話し掛けた。

小柄な公爵夫人の薄い鬚のある、白い齒の上に擡る唇と、優しい聲のお蔭で、會話は一座に行き渡つて活氣を呈して來た。彼女は饒舌で快活な人々の常用手段たる冗談の調子で、ヴシーリー公爵を迎へた。それは自分と話相手の間に、何かしら疾くに内定されてゐる洒落と、外の人にはよく知れて居ない面白い追憶を假りに設けるので、さういふものが實際になくたつて構はないのである。だからヴシーリー公爵と小柄な公爵夫人の間にも、そんなものは少しもなかつたけれど、ヴシーリー公爵は快く此の調子に相槌を打つた。小柄な公爵夫人は實際ありもしない滑稽な事件

の追憶の中に、今迄碌々顔も知らなかつたアナトリーまで巻き込むのであつた。ブリエンヌも矢張り此の一座に共通な追憶の仲間入をした。マリヤすら此の愉快な追憶の中へ引き込まれるのに氣附いて、満足を感じたのである。

『けれども今度こそは、わたし達うんとあなたを利用して頂きますよ、公爵。』と小柄な公爵夫人はヴシーリー公爵に（無論佛蘭西語で）かう言つた。『此處はアンネットの夜會と違ひますから、決してあなたをお逃がせしませんよ。あの親愛なるアンネットを覚えてゐらつしやいますか？』

『いや、ですがあなたはアンネットのやうに、私に政治談をし掛けしないで下さい！』

『そしてわたし達の茶卓ティエブルは如何でございました？』

『あ、左様々々！』

『何うしてあなたは一度もアンネットの所へお出でになりませんでしたの？』小柄な公爵夫人はアナトリーに訊ねた。『いえ、存じてゐます、存じてゐます。』彼女は一寸瞬きして見せながらかう言つた。『兄さんのIPPOLITOさんが、あなたのなすつた事をすつかり話して下さいましたッけ。まあ本當に！』彼女は指を立て、脅す眞似をした。『わたしあなたの巴里時代の悪戯迄みんな知つてゐますわ。』

『所であれが、IPPOLITOがお前に話さなかつたかね？』まるで小柄な公爵夫人が逃げ出さうとする所を、やつとの事で引き止めたかのやうに、矢庭に夫人の手を掴み乍ら、ヴシーリー公爵は息子に向つてかう言つた。『あれがお前に話さなかつたかな？あれは、IPPOLITOは可愛い公爵夫人の事を、身も瘠せる程思ひ續けたんだよ。所が公爵夫人は *le mettait à la porte*（あれを家の中つたさうだ）』

『ねえ！全くこの方は御婦人中の眞珠ですね、マリヤさん！』と彼は公爵令嬢の方へ向いて言つた。

又ブリエンヌはブリエンヌで、巴里といふ言葉の出た時に、同じく此の追憶談に口を容れる機會を逸のがさなかつた。

彼女は大膽にも、アナトリーが巴里から歸つて来たのは大分前の事か、此の都は彼の氣に入つたか何うかと訊ねた。アナトリーは悦んでこの佛蘭西女の問に答へ、微笑を含んで彼女を見詰めた。乍ら、その母國の事を話し合つた。アナトリーは可愛いブリエンヌを見ると、此の秃山ルイシエゴールも大して退屈ではないと腹の中で決めた。『いや中々綺麗だ！』彼女を見廻しながら彼はかう思つた。『この *demoiselle de compagnie*（女侍）は中々別嬪だ。マリヤが俺の所へ嫁に来る時、この女も一緒に連れて来て貰いたいものだ。』と彼は考へた。『綺麗で愛嬌があるよ。』

老公爵は眉を擧めて自分の爲す可き事を考へ乍ら、書齋でゆつくり着換をしてゐた。今度の來客は彼を立腹させたのである。「ヴシーリー公爵親子など俺に取つて何する者だ！ヴシーリー公爵は空ッぽな威張屋だから、まあ息子も結構な奴に相違あるまいよ。」と彼は心の中でぶつ／＼言つてゐた。彼の癪に觸つたのは他でもない、今迄いつも自分でいろいろ思案しても、容易に決心が附かなくつて、何時も揉み潰すやうにしてゐた問題が、今度の來客で急に呼び醒されたからである。その問題といふのは、自分は何時かマリヤと別れて、良人たる人の手に渡したものが何うかと言ふ事である。公爵は自分が此の問題に關して公平な解答をするものと、始めから承知してゐたので、決して眞正面からこの問題を呼び起さうとしなかつた。何故ならば「公平」は彼の感情といふより寧ろ生活の可能に撞着するからであつた。彼は一見マリヤを餘り大切に居ないやうであつたが、マリヤを引き抜いた生活は、ニコライ公爵に取つて想像すら出来なかつた。

「あれが嫁入なんかして何うするか？」と彼は考へた。「不幸な目を見に行くやうなものだ。現にアンドレイの嫁のリーザだつてさうだ（良人としてあれ位の男は、今時容易に見附かりさうもないけれど）、果してあれは自分の運命に満足してゐるか知らんて？それに誰がマリヤのやうな女を愛や戀で望むものか？縹緞がわるい、無骨だ！もし望み手があれば、それは實家の爲めだ、財産の爲めだ、一生老嬢で終るものが無い譯ぢやないからなあ。その方が未だ仕合せなからうだ！」ニ

ニコライ公爵は着換し乍らかう考へた。がそれと同時に、何時も延し／＼してゐた問題は、猶豫なく解決を要求するのであつた。ヴシーリー公爵が息子を連れて來たのは、明らかに結婚を申し込む爲めだ。そして多分今日明日にも決答を要求するだらう。家名も、社會上の地位も相當である。「何うなるものか、わしも強ひて反對しやせん。」と公爵は獨言ちた。「たゞ當人にあれの良人たる價值があればいいのだ。此奴を一つ見て見よう。」

『こいつを一つ見て見よう！』と彼は聲に出して言つた。『こいつを一つ見て見よう。』かう思つて彼は何時もの如く、元氣のいい、足取りで客間へ入り、一同にちらと一瞥を與へた。そして小柄な公爵夫人の着物の變化も、ブリエンヌのリボンも、マリヤの醜い髪も、ブリエンヌとアナトーリの微笑も、一座の談話からのけものにされた、マリヤの一人ぼつちの状態も、みんな直ぐに見て取つて了つた。「まるで馬鹿みたいに飾し込んでるわい！」と毒々しく娘を見遣りつゝ彼は考へた。「恥知らずめ！所がああ男は、マリヤなんかには洩も引ッ掛け度くないやうな恰好をしてる！」

彼はヴシーリー公爵に近寄つた。

『や、御機嫌よう、御機嫌よう、お目に掛つて非常に嬉しい。』

『親しい友の爲めならば七里の迂りも苦にならぬと——申しましてな』いつもの如く早口に、

自信ありけな馴々しい調子で、ヴシーリー公爵はかう言つた。『これはわたしの次男です、何うか可愛がつて目を掛けてやつて下さい。』

ニコライ公爵はアナトリーを振り向いて見た。

『立派な男だ。立派な男だ！』と彼は言つた。『さあ、一つ接吻して呉れ。』と彼はアナトリーに頬を差し出した。

アナトリーは老人を接吻した。そして兼々父から聞かされてゐる彼の奇癖が、もう今に出て來るかと思ひつけ乍ら、物珍しげに而も糞落ち着きに落ち着いて眺めてゐた。

ニコライ公爵はいつも決りの長椅子の隅に腰を下し、ヴシーリー公爵の爲めに肘椅子を自分の傍近くへ引き寄せ、それを指差して薦め乍ら、政治界の新しい出來事などを質問し始めた。彼はヴシーリー公爵の言葉を、注意深く傾聴してゐるやうな振をし乍ら、絶えずマリヤの方に目を配つてゐた。

『それぢや、もうボーツダムからそんな手紙が來るのかね？』ヴシーリー公爵の最後の一句を鸚鵡返しに繰り返したが、ふいと立つて娘に近附いた。

『それはお前お客様の爲めに、そんなに飾かり込んだのかな？』と彼は言つた。『美しい、大層美しい。お前はお客様のまへで、新しい髪かみの結び方を見せて呉れたが、わしは又お客様の前で言ひ

聞かしてやる、今後わたしの許可を受けずに着換する事はならんぞ。』

『それはお父様おとうさま、わたしが悪いのでございます。顔を赤くし乍ら、小柄な公爵夫人が割つて入つた。』

『あんたはまあ何とでも勝手にするがよい。』ニコライ公爵は嫁の前で足を摺り乍らかう言つた。『たゞこの子を片輪のやうにする事は要りませんぞ——さうでなくてもいい、加減見つともない女だからな。』

もう涙さへ差しぐんでゐる娘の方には目もくれないで、彼は再び席に着いた。

『いやそれ所ではありません、その頭は大變御令嬢に似合ひますよ。』ヴシーリー公爵はかう言つた。

『さ君、若公爵、名前を何と言つたッけな。』ニコライ公爵はアナトリーに向いてかう言つた。

『此方へ來なさい、何か話さうぢやないか、一つ近附きになりませう。』

『さあ、そろくお慰みが始まつて來たぞ。』アナトリーはかう考へて、微笑を含み乍ら老公爵の傍近く坐つた。

『時に君、君は外國で教育を受けたとかいふ話だね。わしや君のお父さんの時代のやうに、坊さんから読み書きを教はつたのとは全で別だ。何うだね、君は今近衛騎兵に勤めてゐるなさるのか



な？」老公爵は近々と顔を寄せて、じつとアナトリーを見詰めながらかう言つた。

『いえ、僕は普通師團に移りました。』やつと笑を泳なえてアナトリーは答へた。

『は、あ！結構な事だ。所で君、君は何うして皇帝と國家に仕へようと思つてをられるかね？今國務多端の時だ。君のやうな立派な若者は、是非軍務に服さなけりやならんて。何うだ、正面の勤務をしてゐるのかね？』

『い、え公爵。聯隊はもう出征したのですが、僕は……お父さん、僕は何に任命されたんです？』とアナトリーは笑ひ乍ら父に問ひ掛けた。

『いや、見事な勤め振りだ、實に見事だ。僕は何に任命されたんですか！は、は！』とニコライ公爵は笑ひ出した。

するとアナトリーも一倍高い聲で笑ひ出した。不意にニコライ公爵は顔をしかめて、

『もう行つて宜しい。』と言つた。アナトリーは微笑を浮べつ、又婦人達の方へ歸つて行つた。

『君は子供達をあつちで——外國で教育したんだね、ヴシーリイ公爵？』と老公爵はヴシーリイ公爵の方へ向いた。

『わたしは出来るだけの事をしたのです。遠慮なく申しますと、彼方の教育は露西亞よりずつと勝れてゐますからね。』

『左様、今はすつかり變つて新風になつて了つた。いや可愛い立派な男だ！立派な男だ！さあわしの室やへ行かうぢやないか。』

彼はヴシーリイ公爵の手を取つて書齋へ導いた。

ヴシーリイ公爵は老公爵と二人切り差し向ひになると、直ぐに自分の希望を打ち明けた。

『一體君は、』と老公爵は腹立しけに言つた。『わしがあれを抑へて了つて、手放す事が出来ないと思ふのかな？なんのく〜！』と彼は腹立たしけに言ひ放つた。『わしは明日にも直ぐ呉れて遣るよ！只君に斷つて置くが、わしは自分の婿となる人をもつとよく知り度いのだ。わしの規則は君も御承知だらうが、何でもすつかり開けッぴろけだ！明日わしは君のゐる前であれの心を訊いて見る、あれが承知ならそれでよい。實際それでよいのだ、わしも異存はない（かう言つて老公爵はクフンと鼻を鳴した）あれが結婚し度けりや勝手にするさ、わしに取つては何うだつて同じ事なんだ！』息子のアンドレイに別れた時と同じ、突き刺すやうな聲で彼は叫んだ。

『わたしは皆眞直に白状します。』ヴシーリイ公爵は腹の底まで見通す對手に對して、狡猾な手段を弄する事の無益さを悟つた、狡兒の調子を以てかう言つた。『あなたは人の心をすつかり見通してお了ひになる。アナトリーは決して天才ではありません。併し其の代り正直で親切な可愛い奴です。わたしの大切な立派な息子ですよ。』

『いや、いや、宜しい、今に分るから。』

長い事男性との交遊に遠ざかつて、寂しく暮して居た女によくある事だか、ニコライ公爵家の三人の婦人はアナトーリの出現と共に、これ迄の生活は本當の生活でなかつたのだと、一樣にさう感じたのである。一同は思索、感覺、觀察の力が、急に十倍されたやうな氣がした。丁度今まで暗の中に過してゐた生活が、急に意義に充ちた、新しい光に照されたやうな工合であつた。

マリヤはもう自分の顔や頭の事など、一切考へてゐるなれば、また覺えても居なかつた。事に依つたら、自分の良人となるかも知れないその男の、美しい開け擴げな顔が彼女の注意を呑み盡したのである。彼女はアナトーリが親切で、勇敢で、決斷力があつて、そして男らしく寛大な人のやうに思はれた。彼女はそれを信じて疑はなかつた。未來の家庭生活に關する幾千となき空想が、絶間なく彼女の心中に湧き起つた。彼女はそれを追ひ退けて隠さうと努めた。

「けれどわたしはあの人に對して、餘り冷淡過ぎはしないか知ら。」とマリヤは考へた。「いや、わたしはもう心の奥で、あの人と餘り親しくなり過ぎたやうな氣がするので、自分を抑制しようしてゐるのだ。けれどあの人にはわたしの心をすつかり、ご存じないから、若しかしたら、わたしがあの人を不快に思つてるのぢやないか、など、考へてゐらつしやるかもしれない。」

で、マリヤは此の客人に愛想よくしようと努めたが、出来なかつた。「La pauvre fille! Elle est

diablement laide (可哀さうな娘だ、まるでお化の様に醜い顔だ。)」とアナトーリは彼女の事を考へた。

アナトーリの來訪に依つて、同じく極度に迄昂奮したブリエンヌは、又全然別な考へに耽つてゐた。社會に於ける一定の地位もなく、親戚も朋友も故郷すら持たない美しい若い娘は、勿論ニコライ公爵に仕へて本を讀んで聞かしたり、マリヤの友誼を楽しんだりする事に、一生を捧げようといふ氣はさら／＼無かつた。ブリエンヌは、長い間露西亞の公爵の出現を待ち設けてゐた。此の露西亞の公爵は縹緞の悪い、着こなしの下手な、舉動の無器用な露西亞令嬢に比較して、自分の方が遙かに優れてゐる事を直ぐ認めて、自分に戀してどこかへ連れて行つて呉れるに相違ない。：：所が、遂に此の露西亞の公爵がやつて來た。ブリエンヌは嘗て伯母から聞かされた話に、更に自分で色上げた一つの物語を、想像の中で繰り返すのが好きであつた。それは誘惑に打ち負かされた一人の娘が、哀れなる母の幻 *sa pauvre mère* を見た。すると、母は結婚もしない男に身を委せたのを責める——といふのであつた。ブリエンヌは想像の中で此の物語を誘惑者——「彼」に話しては、しよつちう涙を流す程感動するものであつた。今この「彼」が、露西亞の公爵が到頭やつて來た。彼は自分を連れて行つて呉れる、それから哀れな母がやつて來て、遂に男は自分と結婚する：：ブリエンヌがアナトーリと巴里の話をして居た時、彼女の未來はこんな工合に頭の中

で組み立てられたのである。彼女を指導したのは決して利害の打算ではない（彼女は一分間たり

とも、何うしようなど、考へはしなかつた。これ等すべての事はもうずつと前から、彼女の心中に出来上つてゐて、それが今出現したアナトリーに集中されただけなのである。彼女は何うかして少しでも餘計に、アナトリーの氣に入り度いと望み、且つ努力した。

小柄な公爵夫人は喇叭の音を耳にした古い軍馬が、急に足掻きを速めるやうに、自分の體の事も忘れて無意識に、習癖になつた媚を弄し始めた。併しそれには何等の下心も苦悶もなく、只無邪氣な、輕はずみな、浮々した氣分に唆かされたのである。

アナトリーは何時も婦人達と一座した場合、女にちやほやされるのが厭になつた、といった風な態度をとるのであつたが、それにも拘はらず、自分が三人の女に與へた印象を見て、彼は虚榮的な満足を感じた。またその他彼は美しい挑撥的なブリエンヌに、野獸のやうな卑しい欲情を感じ始めた。此の感情は何時も彼の心中に異常な速さを以て募つて來て、思ひ切り粗暴な、向う見ずの行爲を敢てさせるのであつた。

茶の後で一座は長椅子室へ移つた。人々はマリヤにピアノを弾いて聞かして呉れと頼んだ。アナトリーは彼女に向つて、ブリエンヌの傍に頬杖ついてゐるが、その目は嬉しげに笑ひ乍らマリヤを眺めてゐた。マリヤは自分の方へ男の視線が注がれてゐるのを感じて、苦しいやうな悦ばしい昂奮を覺えた。好きなソナタの調子は殊に立妙な、詩的な世界へ彼女を運び去つた。而も男の

視線が自分に注がれてゐると思ふと、この世界に尙一層の詩趣が加はるのであつた。けれどもアナトリーの視線は、事實彼女の方へ注がれてゐるに相違ないけれど、本當は彼がピアノの下で觸つてゐる、ブリエンヌの足の動きに關するもので、マリヤには何の關係もなかつたのである。ブリエンヌも矢張りマリヤを眺めてゐるが、その目の中にはマリヤに取つて珍しい、憎えたやうな悦びと希望の表情が浮んでゐた。

「あのブリエンヌは本當にわたしを愛して呉れてるんだわ！」とマリヤは思つた。「今わたしは何て幸福なんだらう、そして又先になつても、かういふ友達とかういふ良人を持つわたしは、何んなにか仕合せなことだらう！ だけど本當に良人なんだらうか？」依然として例の目が自分に注がれてゐるのを感じつ、彼女は男の顔を見上げる事も出来ないでかう考へた。

晚餐の後、人々が自分の室へ別れて歸り始めた時、アナトリーはマリヤの手を接吻した。彼女は自分ながら、何うしてこんな勇氣が湧いたかと思ふ程、自分の近視の眼に近附く美しい顔を眞直に見上げた。その後で彼はブリエンヌの手に口を近附けた（こんな事は勿論非禮であつたが、彼はそれを如何にも自信ありげにざつくばらんにやつて退けた。）ブリエンヌはかつと赤くなつて、憎えたやうにマリヤの顔を見遣つた。

「Quelle délicatesse (何て麗しう)。」とマリヤは考へた。「一體アメリイ(これがブリエンヌの名で

あつた)は、わたしがあの女に嫉妬して、わたしに對するあの女の清らかな優しい信服の心を、尊重しないとでも思つてるのかしら。で、彼女はブリエンヌに近寄つて、固く彼女を接吻した。アナトリーは小柄な公爵夫人の手に口を寄せた。

『否、否、否！あなたの身持がよくなつたと言つて、お父様が御手紙を下すつたら、その時はあなたに手を接吻さして上げますわ。それまではいけません。』  
かう言つて指を立て、微笑み乍ら、彼女は部屋を出て行つた。

## 五

一同は別れ／＼になつた。床に就くと直ぐ寝入つて了つたアナトリーを除くと、皆この夜は長く寝付かれなかつた。

「一體あの人がわたしの良人だらうか——あの何の由縁もない、美しい親切な人が？確かに何より先づ親切な人だ。」とマリヤは考へた。すると、今まで殆ど経験したことのない恐怖が彼女を襲つた。彼女は後ろを振り返るのが恐しかつた。何だか其處の衝立の陰に——薄暗い片隅に、誰やら立つてゐるやうな氣がした。この「誰やら」は彼——悪魔であつた。と又——それが額の白い眉の黒い、口の紅い男のやうにも思はれた。

彼女は呼鈴を鳴して小間使を呼び、自分の部屋に寝て呉れと頼んだ。  
ブリエンヌは此の夜長い事『冬の苑』をさ迷つた。空しく何者かを待ち焦れ、何者にかほ、笑み掛けては、自分の墮落を責める哀れな母の言葉を想像して、涙の出る程感激し乍ら。

小柄な公爵夫人は寢床の工合が悪いと云つて、小間使に小言を云つてゐた。彼女は横に向いても俯伏しになつても、寝る事が出来なかつたのである。腹が邪魔になるので、何んなにしても重苦しくて工合が悪かつた、今夜は何時よりも殊に腹が邪魔になつた。それはアナトリーの來訪の爲めに、かうした懷妊などと云ふ事がなくて、何もかも輕々と愉快であつた過去の方へ、まざ／＼と連れて行かれたからである。彼女は婦人上衣を着寢帽子を被つて、寢椅子に腰かけてゐた。髪を亂して、眠たさうな顔をしたカーチャは、何やら口の中で言ひ乍ら、重い羽根蒲團をもう三度も叩いたり、引つくり返したりした。

『わたしさう言つたぢやないかえ、蒲團は凸凹だらけですよ。』と小柄な公爵夫人は念を押すやうに言つた。『わたしだつて悦んで寢入り度いのは山々なんだからね、わたしの所爲ぢやないよ。』彼女の聲は今にも泣き出さうとしてゐる、子供の聲のやうに顫へた。

老公爵も矢張り睡らなかつた。チーホンは老公爵が腹立たしげに歩き廻つたり、鼻をくふんくふん鳴らす音を夢うつ、に聞いた。老公爵は娘の事で、自分が侮辱されたやうに思はれた。その

侮辱感は最も深刻なものであつた。何故なれば、それが自身に對するものでなく、自分以外の者——彼が自分より以上に愛してゐる娘に對するものだつたからである。彼は此の事件を繰り返しく考へて、公平な見地からみて當然探るべき道を發見しようと誓つたけれど、併しさうはしないで、只徒らに自分を苛立たすのみであつた。

「始めてよその男がひよつこりやつて來ると、もう父の事も何も忘れて了つて、夢中になつて二階へ飛んで行つて、髪を結び直したりして機嫌を取つて居る。而も二目と見られたまぢやない。親父なんか平氣で打つ棄る氣なんだ？その癖わたしが氣の附く事をちやんと知つてるんだ。フルッ……フルッ……フルッ……それにあの馬鹿者奴、唯ブリエンカ(ブリエンカの語尾をロシア式に變へて侮蔑の感じを帯びさせたもの)ばかり見てるのが、わしの目に入らんと思つてるのか？(あの女は追ん出して了はなくちやならん)。それにこの事を悟るだけの誇プライドが、何うしてあれに無いのだらう？若し自分の爲めの誇が無いとしても、せめてわしの爲めにでも、少し位あつて宜さうなものだ。あの馬鹿者が唯ブリエンカばかり見て、あれの事なんか考へても居ない事を、曉さらせてやらなきやならん。あれには誇プライドが無い併しわしはあれに思ひ當らせて遣るから……」

娘に向つてお前は迷はされてゐる、アナトリーはブリエンカの尻を追ひ廻さうとしてゐるのだと言つたら、老公爵はマリヤの自尊心を苛立たして、娘と別れ度くないといふ希望を成就する事に

なる。老公爵はこの事を承知してゐるので、やつとそれで安心した。彼はチーホンを呼んで着物を脱ぎに掛つた。

「碌でもない奴等が來をつて！」チーホンが乾からびた、老人らしい、灰色の胸毛を生やした主人の體に夜着の襯衣を蔽せた時、彼はかう思つた。「わしはあんな奴なんか知りもしなかつた。それなのに彼奴等はわしの生活を掻き亂しに來をつた。わしの生活はもう残り少いんぢやないか。」

『畜生！』彼は未だ襯衣を頭に被り乍らかう言つた。

チーホンは、公爵が時々自分の考へを口に出して言ふ癖を承知してゐるので、訊ね掛けるやうな腹立たしげな視線が襯衣の陰から出て來た時、彼は顔色も變へずにそれを迎へた。

『もう寝たかな？』と公爵は訊ねた。

チーホンはすべての優れた侍僕の常として、主人の思想の方向を悟るだけの敏感を持つてゐた。彼は老公爵がヴシーリーイ公爵親子の事を訊いたのだと察した。

『もう床にお就きになりました、灯あかりも消されました、御前。』

『何でも無い、何でも無い……』と老公爵は早口に言つた。そして足を上靴に手を寛衣ガウンに突つ込むと、何時も寢臺と決めてゐる長椅子に近附いた。

アナトリーとブリエンヌとの間には、何の約束も交されなかつたに拘らず、彼等は小説の第一編『哀れなる母』の出現迄の筋道を、互にすっかり了解し合つたのである。彼等は内緒で澤山語り合はねばならぬ事が有る、といふ事をよく了解したので、二人は朝から差し向ひで話す機会を探して居た。丁度マリヤが例の時刻に父の部屋へ赴いた時、ブリエンヌは『冬の苑』でアナトリーと落ち合つたのである。

マリヤは此の日特に胸を躍らせつゝ、書齋の戸に近附いて行つた。彼女は今日自分の運命が決せられるのを、皆が知つてゐるばかりでなく、これに就いて自分の考へてゐる事まで、承知してゐるやうな気がした。彼女はかうした風の表情をチーホンの顔にも、ヴシーリー公爵の侍僕の顔にも（彼は熱い湯を手にもつて廊下でマリヤに出會つた時、低く腰を屈めて會釋したので、）讀む事が出来た。

老公爵は此の朝娘に對して非常に優しく、且つ自分の態度に竝々ならぬ苦心を拂つてゐた。マリヤは此の苦心の表情をよく心得てゐた。此の表情はマリヤが算術の問題を會得しないと云つて乾からびた拳を握り固め、椅子からふいと立つて彼女の傍を離れ、低い聲で幾度も同じ言葉を繰り返す時に、よく彼の顔に現れるものであつた。

彼は直ぐ用談に移つた。そしてマリヤを『あなた』と呼び乍ら會話を始めた。

『わしは今度あなたのことと申込を受けた。』彼は不自然な微笑を浮べながらかう言ひ出した。

『あなたも大抵察したらうと思ふが』と彼は語を續けた。『今度ヴシーリー公爵が此處へ見えた。そして自分の教へ子を連れて來た（ニコライ公爵は何故かアナトリーを教へ子と言つた。）が、それはわしの御機嫌を伺ふ爲めではない。わしは昨日あなたの事に就いて申込を受けた。あなたはわしの規則を知つてゐるから、それでわしはあなたに相談するのだ。』

『わたしお父さまのお言葉を何う解つたら宜しいのでせう？』

『何う解つたら！』と父は腹立たしげに叫んだ。『ヴシーリー公爵は、お前を自分の眼鏡に適つた嫁と見立てたので、教へ子の爲めに申込をしてゐるのだ、とかう解つたらいいんだ。何う解るんだつて?!…わしの方でこそお前に訊ねてゐるんだよ。』

『父さま、わたし合點が参りません、何うしてあなたが…』とマリヤは囁くやうに言つた。

『わしが？わしが？わしが何うしたと言ふんだ？わしの事は打つ棄つといて貰はう。わしが嫁に行くんぢやないからな。あなたは一體何うなさるんです？それが訊き度いんです。』

マリヤは父が此の件を、好意の目で眺めて居ないのを見て取つた。が、又その瞬間に自分の運命は今この時を逸したら、又と再び決せられる時がない、とかういふ考が浮んだのである。彼女は父の視線を見ない爲めに伏目になつた。この視線の威壓を受けたら、物を考へる事など出来な

いで、只々習慣的に服従する他はないと感じたのである。彼女はかう言つた。

『わたしはお父様のお考へ通りにし度いと、たいそればかり望んでゐます。』と彼女は答へた。

『けれども、是非わたしの希望を言つて見ると仰しやるのでしたら……』

彼女が終ひ迄言ひ了らぬ中に公爵は遮つた。

『いや結構だ！』と彼は叫んだ。『あいつはお前を持參金附で貰つて、序でにブリエンヌも連れて行くだらうよ。而も女房になるのはブリエンヌで、お前は……』

公爵は語を休めた。彼は此の言葉が娘に與へた印象に氣附いたのである。マリヤは頭を垂れて今にも泣き出しさうな様子であつた。

『いや、いや冗談だ、冗談だ。』と彼は言つた。『只一つ覚えてゐるがい、。わしは女が自分の良人を選ぶについて、絶對の自由を持つてゐる、とかういふ主義を抱いてゐるのだから、お前にも此の自由を與へる。只一つ記憶して貰ひ度いのは、お前の決心一つで、生涯の幸不幸がきまるといふ事だ。わしの事なぞ言ふことは無いよ。』

『だけど、わたしには分らないのですから……お父さま。』

『何も言ふ事は無いといつたら！あの男は親の吩咐け通りで、何もお前一人と決つた事は無い、何んな女とでも結婚するんだ。所で、お前は其の選擇に就いて自由なんだからな……さあ部屋へ

歸つてよく考へる。そして一時間経つたらわしの所へ来て、あの男の居る前で否か應か返事しろ。わしにはちやんと分つてる、お前はこれからお祈りする積りなんだらう。それもまあ宜からう、お祈りするがい、。只よく考へるんだぞ。さあ行け。否か應か、否か應か！ 否か應か！』もうマリヤが霧の中でも歩むやうな氣持で、ふら／＼し乍ら室を出て了つたのに、彼は未だかう叫んで居るのであつた。

彼女の運命は決しられた、而も幸福な方へ決しられたのである。併し父がブリエンヌについて言つた事は——あの當てこすりは彼女に取つて恐しかつた。假りに眞實でないとしても、それにして恐しい事だ、彼女はそれを考へない譯に行かなかつた。彼女は何も見ず何も聞かずに、冬の苑を通り抜けて、眞直に前の方を見詰め乍ら歩いた。と、突然聞き馴れたブリエンヌの囁きが彼女を呼び醒した。彼女は目を上げた。すると二歩ばかりしか離れてゐない所で、佛蘭西娘を抱き乍ら何やら囁いてゐる、アナトーリの姿が目に入つた。アナトーリは美しい顔に恐しい表情を浮べつ、マリヤの方を振り返つた。が最初の一瞬間は、ブリエンヌの細腰から手を放さなかつた。ブリエンヌは未だマリヤの來た事を知らなかつたのである。

「誰だい。其處にゐるのは？何用だ？一寸待つて呉れ！」アナトーリの顔はかう言つてゐるやうであつた。マリヤは黙つて二人を眺めてゐた。彼女は事の意味を解することが出来なかつた。

遂にブリエンヌがきやつと叫んで駆け出した。アナトリーは愉快な微笑を含みつゝ、マリヤに會釋したが、その様子はまるで、「何うぞ此の奇怪な事件を笑つてやつて下さい」とでも言ふやうであつた。やがて彼は肩を竦めて、自分達に與へられた部屋へ通ずる戸口に入つて了つた。

一時間の後チーホンがマリヤを呼びに來た。彼はマリヤに公爵の室へ行くやうに言つてから、ヴシーリー公爵もあちらにゐらつしやいますと附け足した。チーホンがやつて來た時、マリヤは居間の長椅子に腰掛けて、泣き入るブリエンヌを抱きかゝへてゐた。彼女は佛蘭西女の頭を靜かに撫で、やつた。美しい目は以前の落ち着きと輝きを帯び乍ら、優しい愛と憐みとをもつて、ブリエンヌの可愛い顔を眺めてゐた。

『Non, princesse, je suis perdue pour toujours dans votre coeur. (本當にお嬢さま。わたしは永久にあなただけの御同情を失くしてしまふ)』とブリエンヌが言つた。

『何うして？わたしは以前にも増してあなたを愛してゐます。』とマリヤは言つた。『わたしあなたの幸福の爲めに、出来るだけの事をし度いと思つてゐますわ。』

『けれども、あなたはわたしを蔑んでゐらつしやるでせう、あなたは全く清淨潔白な方でございますもの。あゝした égarement de la passion (情の迷)といふ事は、とてもお分りになりますまいわえ。あゝ、可哀さうなおつ母さんは……』

『わたしすつかり分りますわ。』悲しげには、笑みつゝ、マリヤは答へた。『安心なさいね、あなた。わたしお父さまの所へ行つて來ますから。』と言つて彼女は部屋を出た。

ヴシーリー公爵は片々の足を高く折り曲けて、手に煙草入の箱を持ち乍ら、恰も極端に感動したやうな、又同時に自分の感激性を自分で悲しみ且つ嘲るやうな風附で、歡喜の微笑を顔に浮べつゝ、腰掛けて居た。其の時マリヤが入つて來たのである。彼は急いで煙草を一掴み鼻の傍へ持つて行つた。

『Ah, ma bonne, ma bonne (あゝ御)』立ち上つて彼女の両手を取り乍ら公爵はかう言つた。そして溜息と共に言ひ足すのであつた。『わたしの息子の運命はあなたの掌中にあります。わたしがいつも眞實の娘のやうに愛してゐた優しい、大切な、しとやかなマリヤさん、何うぞ決めて下さい。』

かう言つて彼は傍を離れた。偽りならぬ涙が一點彼の目に現れた。

『フルッ……フルッ……』とニコライ公爵は鼻を鳴した。『公爵は自分の教へ子……息子さんに代つてお前に申込みをされたのぢや。お前はアナトリー・クライン公爵の妻となるか何うだ？言つて見る、否か應か。』と彼は怒鳴つた。『其の後でわたしも自分の意見を陳べる権利を保有して置く。併しわたしの意見は、要するにわたしの意見に過ぎない。』ヴシーリー公爵の方へ向いて、其の



哀願するやうな表情に答へ乍ら、ニコライ公爵はかう言つた。「否か應か？」

「わたしの望みを申しますと、お父様、わたしは永久にあなたを見棄て度くございません。わたしの生活とあなたの生活を、永久に引き分け度くないのでございます。わたしは結婚し度くありませんの。」かの美しい目でヴシーリー公爵と父親とを見据ゑながら、彼女はきつぱりとかう言つた。

「下らん事を、馬鹿な事を！馬鹿、馬鹿、馬鹿！」と眉を擧めつゝ、ニコライ公爵はかう怒鳴つて娘の手を取り、自分の方へぐつと引き寄せた。併し接吻はしないで、只自分の額を娘の額に一寸當てると、持つてゐた娘の手を力任せに握りしめた。彼女は思はず顔を擧めて叫び聲を揚げた。ヴシーリー公爵は立ち上つた。

「ねえマリヤさん、わたし申し上げて置きますが、此の一瞬間をわたしは決して忘れません。併し御令嬢、其の善良で寛大なお胸の琴線に、何時か觸れる事が出来るといふ希望を、ほんの僅かばかりでも與へて下さいませんか。何うぞ、「事に依つたら」と言つて下さい……未來は中々大きなものです。ね、「事に依つたら」と言つて下さい。」

「公爵、わたしがあなたに申し上げた事は、わたしの胸にあるすべてでございます。お志は有難うございますが、わたしは決して御息と結婚致しません。」

「ちや、これで事は終つたのだ。兎に角君に會へたのが非常に嬉しい、君に會へたので實に嬉しい。ぢやマリヤ、歸つて宜しい、お歸り。」と老公爵は言つた。「君に會つたので實に、實に嬉しい。」と彼はヴシーリー公爵を抱き乍ら繰り返した。

「わたしの使命は別な所にあるのだ。」とマリヤは心の中で考へた。「わたしの天職は全く別な種類の幸福——愛と自己犠牲の幸福を楽しむ事なのだ。たとへ何んな價を拂つても、わたしはあの可哀さうなアメリカの幸福を計つてやらねばならぬ。アメリカは本當に夢中になる程あの人を戀してゐるのだ。そしてああ迄強く後悔してゐるのだもの。あの人とアメリカの結婚を成立させる爲めなら、わたし何んな事も辭しはしない、若しあの人が餘りお金持でないなら、わたしはアメリカに持參金をやる。わたしお父さまにお願する、アンドレイにお願する。アメリカがあの人のお奥さんになつたら、わたし何んなに仕合せだらう。アメリカは異郷にたつた一人、何の頼りもなく暮してゐる、本當に不仕合せな人なのだから！それにまあ、アメリカがあゝ、迄も自分を忘れて了ふ所を見ると、本當に何れ程あの人に烈しく戀してゐるか分らない。若しかしたら、わたしだつてあの通りの事をしたかも知れない！」とマリヤは考へた。

長い間ロストフ家の人々は、ニコールシカの情報に接しなかつた。漸く冬の中頃一通の手紙が伯爵に手渡された。其の宛名に彼は我子の筆蹟を見分け得たのである。手紙を受け取ると、伯爵はびつくりしたやうな風附で、誰にも見附けられないやうに努め乍ら、急いで爪先立ちで書齋へ駆け込み、戸を閉ぢて讀みにかゝつた。ドルベツカーヤ夫人は、家の中で起つた事なら何でもすぐ知るのであつたが、今度も手紙の届いた事を嗅ぎつけて、靜かに伯爵の居間へ入つた。伯爵は手紙を手に持つて、泣いたり笑つたりしてゐた。アンナ・ミハイロヴナは財政の整理がついたにも拘らず、矢張り續けてロストフ家で暮してゐた。

『Mon bon ami? (我が善き友よ?)』アンナは何んな同情でも直ぐ捧げられるやうに用意し乍ら、物訊き度けに沈んだ調子でかう言つた。伯爵は益々咽び泣くのであつた。

『ニコールシカが……手紙を……負傷し……した……さうですよ…… na chore ……負傷したさうですよ……可哀さうに……家内は……少尉に任官されました……まあお蔭で……家内に何と言つたらいいか!』

アンナ・ミハイロヴナは彼の傍に坐つて、自分の手巾で彼の目と手紙から涙を拭きとり、扱自分の涙もふいてから、手紙を一讀して伯爵を慰めた。そして晝食迄に伯爵夫人の心に下地を作つて置いて、巧く行つたら茶の後に一切を打ち明けようと手筈を決めた。

晝食の間ちうアンナは絶えず戦争の噂や、ニコールシカの話をした。そして以前からよく承知してゐる癖に、最後の手紙を受け取つたのは何時かと、二度まで訊ね返した。そして今日邊り手紙が来るかも知れないと言つた。かうした暗示に伯爵夫人が心配を始めて、不安げに伯爵とアンナとを交る見較べる度毎に、アンナは目立たぬやうに話を瑣末な事柄に移して行つた。語調視線、顔の表情などの微細な陰影を直覺して、事の意味を曉るといふ能力に於て、家族中の誰よりも一番豊富な資質を持つてゐるナターシャは、食事の始まりから耳を欹て、父とアンナの間にかある、その何かといふのは兄に關した事に相違ない、そしてアンナが母の心を馴らさうとしてゐるのだと悟つて了つた。ナターシャはニコールシカの消息に就て、母が何れ程感じ易いかといふ事を承知してゐるので、いつもの大膽にも似ず、食事中に質問する勇氣がなかつた。そして心配の爲め何一つ口に入れないで、家庭教師の注意も聞かず、椅子の上でもぞく／＼してゐた。食後彼女は一散にアンナを追つて駆け出した。そして長椅子室でいきなり彼女の首玉に飛びついた。

『叔母さん、よう聞かして頂戴、何うしたの?』

『何うもしませんよ、ナターシャ。』

『厭よ、ねえ叔母さん、わたしの大好きな叔母さん、わたし放さなくつてよ、叔母さんの知つてらしつやる事、わたし知つてゐるわ。』

アンナは首を掉つた。

『Vous êtes une fille mouche, mon enfant. (あなたは蜂りの早)  
子だね、嬢や)』

『ニコレンカから手紙が来たの？ 屹度さうよ！』アンナの顔に肯定的の表情を讀むと、ナターシャはかう叫んだ。

『だけどね、後生だから氣をつけて頂戴。あんたも知つてるでせう、おつ母さんが何んなに吃驚しなされるか分らないんだから。』

『い、わ、い、わ、い、から話して頂戴、話して下さいの？ ぢや、わたし今直ぐ行つて、お母さんに教へて上げてよ。』

アンナは誰にも話さないといふ條件附で、手紙の内容を手短かに話した。

『大丈夫よ、誓ふわ。』とナターシャは十字を切り乍ら言つた。『誰にも言はない事よ。』かう言つて置いて、彼女は直ぐにソーニヤの許へ駆け附けた。

『ニコレンカが……負傷したの……手紙が着いたのよ……』彼女は勝ち誇つた悦びの調子でかう言つた。

『ニコラス！』見る／＼蒼褪め乍ら、ソーニヤは只かう言ふのみであつた。

ナターシャは兄の負傷の報告が、ソーニヤに與へた印象を見て、初めて此の報告の悲しい一面を

悟つた。彼女はソーニヤに飛び掛り、彼女を抱いて泣き出した。

『兄さんはほんのぼつちり、負傷しただけなのよ、だけどその代り任官したんだつて。もうすっかり快くなつたのよ。だつて自分で手紙が書けるんですもの。』と彼女は涙の隙にかう言つた。

『やアい見ろ、女ツてみんな泣蟲だな。』ペーチャが元氣のい、足取りで、大股に部屋を歩き廻り乍らかう言つた。『僕ア本當に嬉しいよ。全くだよ、嬉しくつて堪ないんだ、兄さんがあんな手柄をしたんだもの。姉さん達はみんな意氣地なしだなあ！ ちつとも譯が分ないんだ。』

ナターシャは涙の隙からほ、笑んだ。

『あんた手紙を讀まなかつたの？』とソーニヤが訊ねた。

『讀まなかつたわ、けどもうすっかり快くなつて了つたの、そして兄さんはもう將校だつて叔母さんがさう仰しやつてよ。』

『結構だわね。』とソーニヤは十字を切り乍ら言つた。『でも若しかしたら、叔母さんがあんたを騙したのかも知れなくてよ。お母様の所へ行つて見ませう。』

ペーチャは黙つて部屋を歩き廻つてゐたが、

『若し僕がニコルシカだつたら、未だ／＼うんと佛蘭西兵を殺してやつたのになあ。』と彼は言つた。『佛蘭西の奴本當に卑怯者だ！ 僕は死骸の山が出来る程、彼奴等を殺してやるんだがな

あ。』とペーチャは語り續けた。

『お止しよ、ペーチャ、お前は何て馬鹿なんでせう!……』

『僕ア馬鹿ぢやないよ、下らない事で泣く奴が餘つ程馬鹿だ。』ペーチャはかう言つた。

『あんたあの人を覺えて、?』暫く無言の後不意にナターシャは訊ねた。

ソーニヤはほ、笑んだ。

『ニコラスを覺えてるかつて訊くの?』

『い、えソーニヤ、覺え方が違ふのよ。あんた兄さんをよく覺えて、?何もかもすっかり覺えて、?』自分の言葉に極真面目な意味を付けようとするもの、やうに、一生懸命な身振りをしてナターシャはかう言つた。『わたしニコレンカを覺えてるわ、よく覺えてるわ。』と彼女は言つた。

『だけどポリスは覺えてないの。まるつきり覺えてないのよ。』

『え?ポリスを覺えてないの?』ソーニヤは吃驚してかう訊いた。

『覺えてないつて譯ぢやないの——あの人があんな人かつて事はわたし知つてよ。だけど其の覺え方がニコレンカとは違ふのよ。兄さんの方はかうして目を瞑つて見ると、直ぐに思ひ出せるけれど、ポリスの方はさうでない事よ(と彼女は目を瞑つた)。え、何ともないわ。』

『まあナターシャ。』此の人は自分の言はうと思つてる事を、聞くだけの資格がないのだといつた

風に、ソーニヤは真面目な感激した眼附で友を眺めた。そしてナターシャではなく、誰かしら冗談など言ふ事の出来ない、他の人に向つて言ふやうな調子で、『わたしは一旦あんたの兄さんを愛した以上、たとへわたしや兄さんの身の上に何んな事が起らうとも、あの人を愛するわたしの心は生涯決して變りません。』

ナターシャは吃驚したやうな好奇に輝く目を瞠つて、ソーニヤを見詰め乍ら黙つてゐた。ソーニヤの言つた事は本當だ、ソーニヤの言つたやうな戀も有るに相違ない、といふことはナターシャも感じた。けれども彼女はさうした風の感じを、嘗て経験したことが無いのであつた。さういふ戀もあるだらうとは信じてゐるが、それを了解する事が出来なかつたのである。

『あんた兄さんに手紙を書いて?』と彼女は訊いて見た。

ソーニヤは考へ込んだ。ニコラスに何と書かう、又書く必要があるだらうか、あれば何を書いたら宜からう、これは不斷から彼女を悩ましてゐる問題であつた。もうニコラスが將校となり、負傷せる勇士の榮譽を擔つてゐる今日、ソーニヤの方から自分の事や、又自分に關係して彼が引き受けた義務だの、そんな事を想ひ出させるのは、果して、事だらうか何うだらう?

『分らないわ、でもわたしの考へでは、若しニコラスが手紙を下すつたら——そしたらわたしも上げてよ。』彼女は顔を赤らめつ、かう言つた。

『あんた兄さんに手紙を書くのが恥しくなくつて?』

ソーニャはほ、笑んだ。

『い、え。』

『でも、わたしはポリースに手紙を書くのが恥しくつてよ。わたし書かないわ。』

『まあ、何うして恥しいの?』

『何てことはないんだけど、よく分らないの。極りが悪くつて恥しいのよ』

『何うして恥しいのか僕知つてらあ。』先程のナターシャの言葉に、向ッ腹を立て、ゐるペーチャが口を入れた。『それはね、姉さんがあの肥つた眼鏡に惚れてたからだよ。(ペーチャは自分と同名の、新しいベズーホフ伯爵の事を言つたのである。)所が今度はあの歌唱ひに惚れたんだ(ペーチャはナターシャの唱歌の先生の、伊太利人の事を言つたのである。)それで姉さんは恥しいんだよ。』

『ペーチャ、お前は馬鹿だね。』とナターシャは言つた。

『あんたよりか馬鹿ではありませんよ、お嬢さん。』まるで年とつた旅團長か何ぞのやうな口吻で、十になるペーチャがかう言つた。

伯爵夫人は食事の時のアンナの暗示に依つて、手紙を見る下地を作られた。自分の部屋へ歸ると、彼女は肘椅子に腰を下して、煙草入に簞めた小形の息子の寫真から目を放さないでゐた。涙

がぼろ／＼とこぼれた。アンナは手紙を持つて、爪先立ちで伯爵夫人の室に近寄ると、そつと立ち止つた。

『入らないでらつしやい。』彼女は後ろから隨いて来る老伯爵にかう言つた。『後でね。』と言つて彼女はうしろ手に戸を閉めた。

伯爵は鍵穴に耳をあて、立ち聞きし始めた。

最初彼は平調な會話の響を聞いたが、それから長い事く／＼と話すアンナの聲、續いて高い叫び聲が聞えた。それから沈黙が襲うたが、再び二人が嬉しさうな調子で、一時に話し出した。そして最後に足音がして、アンナが入口の戸を開けた。彼女の顔には困難な切斷手術を終へて、自分の技術を驚嘆させるため參觀者を導き入れる、外科醫のやうな誇らしい表情が浮んでゐた。

『C'est fait(巧く行き)ましたよ』彼女は夫人を指さしつ、伯爵にかう言つた。夫人は片手に肖像入りの煙草入れ、今一方の手に手紙を持つて、交る／＼唇に押し當てるのであつた。

伯爵を見ると彼女は両手を差し伸べて、其の禿けた頭を抱きしめた。そして禿けた頭越しに再び手紙と肖像を眺めたが、又それに唇を附ける爲め、一寸良人の禿け頭を押し退けた。やがてエーラ、ナターシャ、ソーニャ、ペーチャなどが部屋へ入つて来て、手紙の朗讀が始つた。手紙には遠征の事が手短かに書いてあつた。ニコールシカは自分の參加した二箇所の戦闘や、任官などを報じて、

終りに母と父の手を接吻してその祝福を乞ひ、エーラ、ナターシャ、ペーチャを接吻する由を書き添へた。その他シェリング氏及シヨース夫人(師の名)を初め、乳母にも挨拶する事を忘れなかつた。最後に彼は大切なソーニャに接吻して呉れるやうにと願つて、自分は今でも同じく彼女を愛し、彼女を想ひ出してゐる由を記した。これを聞くや否や、ソーニャは目から涙の滲み出す程赤くなつた。そして自分の方へ注がれる人々の視線に堪へ切れないうで、廣間の方へ駆け出した。彼女は部屋中をくるく／＼駆け廻つてゐるが、やがて着物の裾を風船のやうに脹らませ、眞赤な顔をして嬉しげには、笑み乍ら、床の上にべたりと坐つた。伯爵夫人は泣いてゐた。

『何だつてお泣きになるんです、お母さま？』とエーラが言つた。『兄さんの書いて寄越しなすつた事は、みんな悦ばなくちやならない事ばかりぢやありませんか、泣く事などは少しもありませんわ。』

それは全く道理のある事であつた。併し伯爵も伯爵夫人もナターシャも、みんな非難の色を帯びた目で彼女を眺めた。『本當に誰に似てこんな風になつたのだらう？』と伯爵夫人は考へた。

ニコールシカの手紙は幾百度となく読み返された。此の手紙を聞く資格があると思はれる程の人は、すべて伯爵夫人の許へ伺候しなければならなかつた。夫人は此の手紙を自分の手から放さないで居た。家庭教師も、乳母も、ミーチェンカも、幾人かの知人もやつて來た。伯爵夫人はそれを

讀む度に新しい喜悅を感じ、又其の度に此の手紙の中から、ニコールシカの新しい美德を發見するのであつた。自分の息子——二十年前彼女の體內で、あるか無いかの小さな手足を動かしてゐた息子——甘やかしの伯爵と幾度か争論の種になつたあの息子——最初『梨子』それから『パーバ』といふ言葉を習ひ覺えたあの息子が、今はまるで知らない土地で、まるで知らない人の中に交つて、補助も指導もなく只一人男々しい戰士として、何かしら一人前の男としての仕事をしてゐると思ふと、夫人は如何にも不思議なやうな、嬉しいやうな、何とも言へぬ氣持がした。子供といふものは目に見えぬ道を辿つて、搖籠を出て一人前の男になるといふ事を證明する、開闢以來全世界に依つて經驗された事實も、伯爵夫人に取つては存在が認められなかつた。成長の各期間に於ける息子の變化は、彼女に取つて常に驚嘆す可き事實であつた。それと同じやうな道を辿つて成長した、幾千萬億の人々がある事などは、まるで知らないやうな工合であつた。二十年前も、嘗て彼女の胸の下の何處かに生きてゐた小さな存在物が、乳房を吸つたり口を利いたりするものが、どうも本當と思はれなかつたものだが、今度も亦それと同様にこの存在物が、手紙に依つて察すると、強く勇しい男になつた——世の人、世の息子の模範となつたと云ふのが、到底信じられない事に思はれるのであつた。

『何といふ文章スタイルでせう、何て上手に書いてあるんでせう！』息子の手紙の描寫が、つた部分を

読み乍ら、彼女はかう言つた、『それに何といふ優しい心でせう！自分の事ツたら何にも……これこそ何にも言はないで、ヂェニーソフとかいふ人の噂なんかしてゐる。けれど本當は自分の方が、そんな人達よりかすつと勇敢なんですよ、屹度！自分の苦しみは些とも書いてないんですもの。何といふ立派な心でせう！わたしあれの心持がすっかり分ります！それによくまあ皆の事を想ひ出したものですな！誰一人忘れてゐないんですもの。わたし何時も、何時もさう言つてゐました、あの子がまだこれツばかりの時分から、さう言ひ言ひしてゐましたの……』

家内中からニコルシカに送る手紙は、腹案や下書に一週間以上かゝつた。そして清書も幾度かし直された。伯爵夫人の監督と老伯爵の心盡しの下に、多くの必需品と、新任將校としての服装や準備に要する金が集められた。事務的なアンナ夫人は自分や息子の爲めに、陣中に於ける種々な保護——通信上の便宜をさへ乞ひ得てゐた。彼女は近衛の指揮をしてゐるコンスタンチン大公に、手紙を送る機會を握つてゐたのである。ロストフ家の人々は、在外近衛師團と言へば、もう一定した完全な宛名のやうに思つてゐたので、若し近衛の指揮をしてゐる大公に手紙が届いたら、必ず其の附近に居る可き筈のバヴログラード聯隊へ着かぬ譯はない、とかう考へた。かういふ譯で大公の急使に托して、手紙と金をボリス迄送る事に評議が一決した。かうすればボリスは當然それ等の物を、ニコルシカに渡して呉れる筈である。老伯爵と夫人、それからペーチャ、

エーラ、ナターシヤ、ソーニヤなどの書いた手紙と、其の上軍装に必要な六千留<sup>ルイブル</sup>の金と、最後に、伯爵から息子に送る様々の品物が取り揃へられたのである。

## 七

十一月十二日、オルミユツの邊に陣してゐるクトゥゾフの軍は、明日行はる可き露西亞境太利兩陛下の閱兵式の準備に忙しかつた。新たに露西亞から着いたばかりの近衛師團は、オルミユツから十五露里<sup>エルスタフ</sup>の地點に宿泊して、直ぐ翌日閱兵を受ける爲め、朝の十時迄にオルミユツの原へ出る用意をしてゐた。

ニコライ・ロストフは此の日ボリスから書面を受け取つた。それにはイズマイロフ聯隊がオルミユツの手前、十五露里の地點に宿營してゐる事、そして彼ボリスは、手紙と金を渡したいのでニコライを待つてゐる事、などが報知されてあつた。丁度隊が戦闘から歸つて来て、オルミユツ附近に宿營してゐる上、十分に仕込をして来た酒保や境太利の猶太人共が、あらゆる種類の誘惑を薦め乍ら、陣中に充滿してゐる時の事であつたから、今はロストフに取つて殊更金が必要なのであつた。バヴログラード聯隊では後から後からと宴會だの、戦闘に對する行賞の祝賀會だのが催された。今度新しくオルミユツへ来て女給仕附の酒場を開いた、匈牙利女カロリーナの許へも盛

に遠征を試みた。ロストフはつい此の間任官の祝宴を挙げたり、ヂェニーソフの乗馬ベドゥインを買つたりしたので、同僚や酒保に山のやうな負債を作つて了つた。ボリースの書面を受け取ると、彼は同僚と一緒にオルミユツへ行つて、其處で一斗晝食を認め、一壘の酒を干して、それから一人で近衛の陣へ幼友達を探しに行つた。

ロストフは未だ軍装を整へる事が出来ないでゐた。彼は兵隊式の十字架章をつけた着古しの見習士官の上衣に、摺れた革を當てた同じやうな乗馬袴、それに劍縷のついた指揮刀を着けてゐた。彼の乗つてゐる馬は、行軍の時哥薩克から買ひ求めたドン種であつた。皺だらけの輕騎兵帽は、氣取つて少し阿彌陀に載つかつてゐた。イズマイロフ聯隊へ近附くに随つて、彼は彈丸雨注の中を潜つた勇ましい、輕騎兵らしい自分の姿が、何んなにボリースを始め、其の仲間の近衛將校連を驚かす事だらう、など、考へるのであつた。

近衛師團は行軍の全道程を、まるで散歩か何ぞのやうに、清潔と規律を誇り乍ら通過して來たのである。宿營地と宿營地の間は短く、背囊は馬車に載せて運ばれ、將校連は宿營毎に埃太利の官憲から、立派な食事の饗しを受けた。各聯隊が町を出たり入つたりする毎に、樂隊の吹奏があつた。そして行軍の間ちう大公の命令に依つて、兵卒は步調を取り、將校は徒歩で各自の部署に就いて進んだ。これが近衛の自慢なのであつた。ボリースは行軍の始めから終り迄、今もう中隊

長になつてゐるベルグと一緒にゐた。ベルグは行軍中に中隊を委ねられてから、命令遂行に忠實なものと、軍規の遵守が嚴正なので長官の信任を得て、自分の經濟的方面を巧みに整理した。ボリースは行軍の間、自分に取つて利益になりさうな多くの人々と知合になつた。ピエールから貰つた紹介狀を通じて、アンドレイ・ボルコンスキイ公爵とも近附きになつた。彼は此の人を介して、總指揮官の幕僚中に位置を得る事が出来るかも知れぬと、内々あてにしてゐたのである。ベルグとボリースは、自分達二人に當てられた小ざつぱりした宿舎で、最後の晝間行軍の疲れを休めると、清潔なきちんとした服裝で、圓い卓の前に腰掛けて將棋をさしてゐた。ベルグは煙の燻るパイプを膝の間に支へてゐた。ボリースは持前の几帳面な質として、ベルグの次の手を待つつれづれに、白い華奢な手で駒を金字塔形に積み乍ら、只勝負の事ばかり考へてゐるやうな風附で、對手の顔を眺めてゐた。彼は何時も現在してゐる事しか考へないのが癖であつた。

『さあ、あなたは何うしてこの難關を切り抜けますか？』と彼は言つた。

『何とか工夫して見るさ。』とベルグは一斗駒に手を觸れ乍らかう答へたが、又その手を元へ引つ込めて了つた。此の時戸が開いた。

『やあ、やつとの事で見附けたぞ！』とロストフは叫んだ。『ベルグも此處にゐるのか！おい君坊ちゃん、もう行つてお休みなさい。』彼は大きな聲で、乳母の眞似をして片言の佛蘭西語を繰



り返した。これは嘗て彼がポーリスと共に笑ひ興じた言葉がある。

『あ、君！随分變つたねえ！』

ポーリスはロストフを迎へて立ち上つた。併し其の際にも倒れた駒を支へて、元の場へ直して置く事を忘れなかつた。かうして彼は友に抱き附かうとした。けれどもニコライはそれを避けるやうに身を躲した。他人の模倣をせずに新しい自己一流の方法で、自分の感情を表現し度い、只何にしても多くの年長者がするやうな、わざとらしい表現の仕方は厭だと言ふやうな、古い習慣の踏襲を恐れる、一種特別な青年らしい感情に誘はれて、ニコライは今友達との邂逅に際しても、何か奇抜な事をして見度くなつた。何かかう抓つて遣るか、でなければとんと衝かしてやり度い、只皆のするやうな接吻だけは厭だと思つたのである。けれどポーリスはそれと正反對に落ち着き拂つた態度で、親しげにロストフを抱擁して三度接吻した。

二人は半年の間殆ど逢はなかつた。丁度若い人達が、人生の旅の第一歩を踏み出す年頃に當つてゐる二人の友は、互に對手の中に偉大な變化を發見した。それは彼等が第一歩を踏み出す舞台となつた、全然異なる新しい社會の反映であつた。で、二人とも少しも早く自分に生じた變化を對手に見せようとあせつた。

『こん畜生、君達はまるで舞踏家のやうだぜ！小ざつぱりと清々した恰好で、まるで散歩から

でも歸つて來たやうだ、我々普通師團のびい／＼とは雲泥の差だなあ。』ポーリスに取つて耳新しい上低音を聲に響かせ乍ら、普通師團式の手振では、ねだらけの乗馬袴を指さしつゝ、ロストフはかう言つた。

主婦の獨逸女はロストフの大きな聲に驚いて、戸の陰から覗くのであつた。

『何うだい、一寸踏めるぢやないか？』と彼は瞬きし乍ら言つた。

『何だつて君そんなに喚くんない、彼方の人達がびつくりするぢやないか。』とポーリスが言つた。『所で僕も今日君が來ようとは思ひ掛けなかつたよ。』彼はかう言ひ足した。『僕はつひ昨日ある知合のクトゾフの副官——ボルコンスキイに手紙を託けたばかりだからね、僕はあの人があるんなに早く渡して呉れようとは思つてゐなかつたよ……で君、何うだね？もう鐵砲玉の味をきいたのかい？』とポーリスは訊ねた。

ロストフは返事をしないで、軍服の紐に掛けてある、兵隊風のゲオルギイ十字章を一振りした。そして繃帶した片手を見せて、微笑し乍らベルグの方をちらと眺めた。

『御覽の通りさ。』と彼は言つた。

『成程ね、ふん、ふん。』ほ、笑みながらポーリスはかう言つた。『所で、我々も立派な行軍をして來たよ。君知つてるだらうが、大公殿下が何時も我々の聯隊に附いて居られたので、我々はあ

らゆる便宜と、すべての利益を恣にする事が出来たんだ。波蘭の歓迎會や晩饗會や舞踏會は、實に素晴らしいものだつたぜ、すっかり話すことが出来ない位だよ。それに太公殿下も聯隊の將校一同に大變優しくして下さつてね。』

かうして一人が自分の輕騎兵式の放恣な遊興や、野戰生活の話をすると、又一人は貴顯の指揮下に勤務する利益と愉悅を説いて、二人の友は互に様々の事を語り合ふのであつた。

『全く近衛だなあ！』とロストフは言つた。『時に君、酒をとり遣つて呉れないか。』  
ポリスは眉を擧めた。

『是非とも欲しいといふなら仕方がないさ。』と彼は言つた。

彼は寢臺に近寄つて、清潔な枕の下から金入を取り出し、酒を持つて来るやうに命じた。

『さうだ、君に手紙と金を渡さなくちやならなかつた。』と彼は附け足した。

ロストフは手紙を取つて、金を長椅子の上へはふり出し、卓に兩肘突いて讀み始めた。彼は幾行か讀んだ時、憎々しげにベルグを見遣つた。彼の視線を迎へると、ロストフは手紙で顔を隠した。

『けれど、君は随分金を送つて貰ひましたね。』長椅子にめり込んでゐる重い金入を見詰め乍ら、ベルグはかう言つた。『所が伯爵、我々は俸給でもつて、やつと其の日くを凌いでるんですから

ね。僕一つ君に自分の内輪話をお聴かせしますが……』

『ねえ、ベルグさん。』とロストフは言つた。『假りにあなたが家から手紙を受け取つて、いろんな事を訊き度いと思ふ内輪の人に逢つたとしますね、そして其の場に僕が居合せたとすれば、僕はあなたの邪魔をしない爲めに直ぐ出て行きますね。だからあなたも後生です、出て行つて下さい、何處かへ、ね、何處か……自分の勝手な所へ！』と彼は叫んだ。そして直ぐに彼の肩を掴んで、愛想よく顔を覗き込み乍ら、自分のぞんざいな言葉を柔らげようとするやうに、又かう言ひ足した。『あなた僕の氣性を知つてるでせう、何うか怒らないで下さい。僕は眞底からあなたの事を古い昔馴染だと思つて言つてるんですからね。』

『いやなに、伯爵、何う致しまして、僕にはよく分りますよ。』ベルグは立ち上つて、咽喉の奥で獨り言のやうにかう言つた。

『あなたは家の人の所へ行つたらいいでせう、彼方であなたを呼んでゐましたから。』ポリスがかう口を添へた。

ベルグは少しの汚點もないフロツクを着け、鏡の前へ行つて、アレクサンドル陛下のやうな恰好に髪を掻き上げた。そしてロストフの眼附に依つて、自分のフロツクが認められた事を確めた後、氣持ちのよい微笑を浮べながら部屋を出た。

『併し僕は何といふ畜生だらう！』手紙を読み乍らロストフは言った。

『一體何うしたんだい？』

『あ、僕は何といふ下劣な人間だらう。一度も家へ手紙を遣らないで、出し抜けにあんなに皆を吃驚させたんだものな、あ、何て僕は下劣な人間だらう！』と不意に赤くなつて彼は繰り返した。『何うしたんだ、早くガヴリーラに酒を取つて來させないか！ 何、構ふもんか、やツツけるさ！』と彼は言った。

身内の者の手紙の外に、尙バグラチオン公爵へ宛てた紹介状が封入してあつた。これはドルベツカーヤ夫人の勧めによつて、伯爵夫人が知人を通して手に入れたので、これを宛名の人へ持つて行つて利用するやうに、とかう思つて送つて寄越したのである。

『何だ、こんな馬鹿なものを！こんなものに何の必要が有る！』手紙を卓の下へ叩き附け乍らロストフはかう言った。

『何だつて君そんなに抛り出すんだい？』ボリースは訊いた。

『何だか紹介状なのさ、こんな手紙に用があるかい、こん畜生！』

『何うしてこん畜生なんだい？』拾つて宛名を読みながらボリースは言った。『此の手紙は君に取つて非常に大切なものだけ。』

『僕は何も必要はないさ。僕は誰の副官にだつてなりやしないから。』

『何故？』とボリースは訊いた。

『ボーイのする仕事ぢやないか！』

『君は矢張り以前通りの空想家だね、何うもさうらしい。』ボリースは頭を振り乍らかう言った。

『所で、君は矢つ張り以前通りの外交家だよ。いや、しかしそんな事は問題ぢやない……おい、君は何んな風によつてゐる？』ロストフは訊ねた。

『まあ御覽の通りさ。今迄は何もかも工合よく行つてゐるさ。併し白状すると、僕は何うかして副官の仲間に入り度くて堪らないんだ。前方勤務は厭だね。』

『何うして？』

『何うしてつて、一旦軍務に依つて立身の方法を講じようと思つた以上、出来るだけ華々しい榮達に努力するのが當り前ぢやないか。』

『は、あ、さうかね。』ロストフは外の事を考へてゐるらしい調子でかう言った。

彼はじつと不審けに友の顔を眺めた、何かある疑問の解釋を求めようと、空しく努力してゐるかのやうに。

老僕ガヴリーラが酒を持つて來た。

『もうアルフォンス・カールロギッチ(ベル)を呼んでもいい、かしら?』とボリースは言った。『あの人には君のお對手が出来るが、僕は駄目だ。』

『呼び給へ、呼び給へ、ふん、何だい、あの獨逸つぼめ?』ロストフは輕蔑したやうな微笑を浮べてかう言った。

『あれは大變人のい、正直な、氣持のいい、人なんだよ。』とボリースは言った。

ロストフは今一度じつとボリースの目を見詰めて嘆息した。ベルグが歸つて來た。そして酒の壘を前に控へた三人の將校の談話は、次第に活氣づいて來た。近衛組は自分達の行軍の事や、ロシアから波蘭外國へかけて非常な歓迎を受けた事や、師團長たる大公の言行、其の善良な而も激し易い性狀に關する逸話などを、ロストフに話した。ベルグは何時もの如く、話題が自分一箇に觸れない間は黙つてゐたが、大公の逸話や激し易い性質が話題に上つたとき、大公がガリシヤで各聯隊を巡視して、運動の不整頓に腹を立てられたが、その際大公と言葉を交へる光榮を得たといふ事を、如何にも愉快さうに物語つた。彼は氣持のよい微笑を顔に浮べ乍ら、非常に立腹した大公が彼の傍へ近寄つて、「惡黨!」(惡黨といふのは、大公が立腹した時に好んで發する罵倒の言葉であつた)と叫んで、中隊長を呼んだ次第を話すのであつた。

『まあ聞いて下さい、伯爵、僕は少しも恐れなかつたです。何故つて、僕は自分の正しい事を知

つてゐるからです。ねえ伯爵、僕何の誇張もなしにかう言ふ事が出來ます。僕は聯隊に關する命令を空で知つてます。又操典でも要務令でも「天にまします我等の父よ」と同じ位、ちやんと知つてゐるんです。だからね伯爵、僕の中隊では遺漏なんて事は決してありません。で、僕の良心は平穩なものですよ。僕は大公の前へ出て行きました(ベルグは一吋腰を浮かして、自分が片手を帽子の庇に當て乍ら出て行つた様子を、仕方して見せた。實際それより以上尊敬と自足の表情を、顔に描く事は困難な位であつた)。大公は僕を酷くやツつけました。俗に謂ふやツつけたんですな。全く死ぬ程やツつけられたです。そして「惡黨」と「畜生」と「西伯利行きた」の連發です。』ベルグは澄み切つたほ、笑みを浮べつ、かう言った。『僕は自分の正しい事を知つてゐるから黙つてゐましたよ、ねえさうぢやありませんか、伯爵? 「一體貴様は啞なのか、うん?」と大公は怒鳴られるのです。僕はそれでも黙つてました。それで何うなつたと思ひます、伯爵? 次の日その事は命令書の中に一言もありませんでしたよ。狼狽しないと言ふのはかういふ事なんですよ。さうでせう、伯爵。』バイブを咬へて環を吹き乍ら、ベルグはかう言った。

『いや、それは結構でしたね。』とロストフは薄笑ひし乍らかう言った。

併しボリースは、ロストフがベルグを擲擄はうとしてゐるのに氣づいて、巧みに話頭を轉じた。彼はロストフに向つて、何處で何うして負傷したかと訊いた。ロストフは此の間が嬉しかつた。

そして段々と興に乗つて元氣附き乍ら、物語を始めるのであつた。彼はシェングラベン村の突撃を物語つたが、其の話し方は普通戦闘に参加した人々が、當時の有様を話すやうな工合になつて了つた。つまり他の人から聞いた事だの、そんな風になればよからうと思つた事などを、其の儘話して了つたのである。で、話としては非常に面白いけれど、實際とは全然違つてゐた。ロストフは正直な青年であるから、何んな事があらうとも、故意に嘘を言ふやうなことは決してしない。彼は實際あつた通りを、其の儘話さうといふ考へで物語を始めたのであるが、知らぬ間に何時しか不可抗の力に曳かれて、僞に落ちて了つた。又此の場に居合す聽手も彼自身と同様、もう幾度となく攻撃の物語を聞かされてゐるので、攻撃とは何んなものかといふ一定の概念を作り上げて、ロストフからもそれと同じやうな物語を期待してゐた。それ故、若しロストフがこれ等の人達に本當の事を話したら、彼等はそれを本當にしないか、或ひはそれどころでなく、通常騎兵の突撃を物語る人々と同じ事を経験しなかつたのは、何か彼自身に落度があるからではないか、とさへ考へるかも知れない。兎に角彼は一同揃つて驅足で進んでゐる中に、自分が馬から落ちて手を挫き、擧句の端は一生懸命佛蘭西兵から遁れて森へ駆け込んだ、など、平凡に話して了ふ事が出来なかつた。そののみか、實際あつた事ばかりを話す爲めには、努力して自己を抑制せねばならぬ。眞實を話すのはむづかしい。それ故、若い人で此の能力を持つてゐる者は極めて稀である。ボリ

リス等の期待する物語りは、ロストフの全身が熱い血潮に燃え、我を忘れて嵐の如く方陣目掛けで突進し、敵の中へ崩れ込み、右左に斬つて斬り捨る。かうして軍刀の切れ味を試みたが、遂に力盡きて倒れて了ふ、といつた風の物であつた。で、彼もボリス等に其の通りを話して了つた。物語の中頃、丁度彼が『突撃の時に何んな氣狂ひ染みた、不思議な感情を味ふものか、君には到底も想像出来まいよ。』と言つてゐる時、ボリスの待ち兼ねてゐたアンドレイ・ボルコンスキイ公爵が部屋へ入つて來た。若い人に對して、保護者の態度を取る事の好きなアンドレイ公爵は、他人が自分の所へ保護を求めて來るのが嬉しくして、ボリスに對しても好意を抱くやうになつて居たので（ボリスは昨日もう巧みに公爵に取り入つたのである）、此の青年の望みを遂げさせてやらうと思ひ立つた。タトゾフから書類を持つて、大公の許へ派遣されたアンドレイ公爵は、多分一人で居る事と思つて、此の青年の宿舍へ寄つて見たのである。部屋へ入ると、戦争談で夢中になつてゐる。普通師團の輕騎兵が目に入つたので、（これはアンドレイ公爵の大嫌ひな種類の人に屬してゐた）、彼はボリスに向つて優しく微笑し、顔をしかめて目を細め乍らロストフの方を眺め、やゝ屈み加減で疲れたやうに、さも怠儀らしく長椅子に腰を下した。悪い仲間へ入つたのが不愉快であつた。

ロストフはそれを悟つてか、つとなつた。併しそれは何うせ赤の他人だから、何だつて構ひはし

なかつた。がふとボリースの方を見ると、此の友達迄が普通師團の輕騎兵たる自分を、きまり悪く思つてゐるのに氣附いた。アンドレイ公爵の不快な、人を馬鹿にしたやうな調子にも拘らず、又かうした司令部附の副官共（今入つて來た男も此の仲間には相違ない）に對して、普通師團式の武骨一遍な見地からして、兼々彼が抱いてゐる侮蔑の念にも拘らず、ロストフは何となくばつ、の悪いやうな感じがして、赤い顔をしながら口を噤んだ。ボリースは司令部の方で何か珍しい話があるか、我軍の豫定について何か聞いた事はないか、もし不躰けでなくばと問ひ掛けた。

『前進でせう、多分。』見受くる所他人の前で、餘り餘計な事を話し度くないらしく、ボルコンスキイはかう答へた。

ベルグは此の好機を利用し特に鄭重な調子で、噂の通り今度普通師團の中隊長に、馬糧費が以前の倍額渡るだらうかと訊ねた。アンドレイ公爵はこれに對して、自分はさうした重大な國家的施設について、何とも判断する事が出来ない、とほ、笑みながら答へた。で、ベルグも嬉しさに笑ひ出した。

『あなたの用件は、』アンドレイ公爵は再びボリースの方へ向いた。『又後で話しませう（と彼はロストフを見返つた）。檢閲が済んだらわたしの所へ來て下さい。出来るだけの事は何でもしますから。』

それから室の中をぐるりと見廻して、ロストフの方へ向いた。そして打ち勝つ事の出来ない子供らしい狼狽から、忿怒へ移らうとしてゐる相手の心の状態には、何等の注意をも拂はうとせずにかう言つた。

『あなたは多分シエングラベン會戦の話をしてをられたのでせう？あなたもあの戦争に参加しましたか？』

『え、僕はあれに参加したです。』と腹立たしげにロストフは言つた、丁度此の言葉で副官を侮辱しようとするかのやうに。

ボルコンスキイは輕騎兵の心持に氣附いたが、却てそれが寧ろ興ある事に思はれた。彼は一寸輕蔑したやうに微笑した。

『さうですね！あの時の事に就いては目下中々噂話が盛んですね……』

『え、噂話がね。』不意に氣狂ひ染みて來た眼附で、ボリースとボルコンスキイを交る／＼見詰め乍ら、ロストフは大きな聲でかう言つた。『さうです、噂話が盛ですよ。けれども我々の噂は實際砲火を浴びたもの、噂です、我々の噂には重みがあります、何にもしないで行賞を受ける、司令部附の若造の噂とは違ひますよ。』

『で、わたしも其の仲間だとお考へなんですね。』特に氣持のいい、微笑を浮べつ、アンドレイ

公爵は落ち着き拂つてかう言つた。

憤怒の念と、同時に此の男の落ち着き拂つた様子に對する尊敬の念が、不思議にロストフの胸に入り錯つた。

『僕はあなたの事を言つたのぢやありません。』と彼は言つた。『僕はあなたを知りませんし、又實の所知り度いとも思ひません。僕は一般司令部附の人達の事を言つたのです。』

『ぢや、わたしはかう言ひませう。』落ち着いた權威を聲に持たせ乍ら、アンドレイ公爵は遮つた。『あなたはわたしを侮辱しようと思つてゐられる。そしてわたしもそれを行ふのは易々たる事だといふ、あなたのお考へに同意します。但しあなたが自分自身に對して、相當の尊敬を拂つて居られない場合の話ですよ。併しあなたも御異存はないでせうが、これを行ふには時と場所の選擇が極めて悪かつたです。近い中に我々一同はもつと大きな、もつと眞面目な決闘に出なくちやならないのですからね。それにわたし容貌が、不幸にしてあなたのお氣に入らないからつて、あなたを舊友と呼んでゐるドルベツコイ(ポリ)の罪では決してありません。併し、『彼は立ち上り乍ら言つた。』あなたはわたしの姓を御存じでせう、そしてわたしが何處にゐるかといふ事も御存じの筈です。が、これは忘れないで下さい。』と彼は附け足した。『わたしは自分にしろあなたにしろ、何方も侮辱を受けたものと認めてゐません。ですから年長者として忠告しますが、此の件はこの

儘水に流した方がい、ですよ。では金曜日に、檢閲の後で待つてますよ、ドルベツコイ君、左様なら!』とアンドレイ公爵は怒鳴つて、兩方に會釋して出て行つた。

ロストフは何とか對手に答へなければならぬ、といふ事を想ひ出したが、それはもう彼が出て了つた後であつた。彼はそれを言ひ忘れた爲めに尙腹が立つて來た。ロストフは直ぐ馬を牽いで來るやうに命じ、ポリースに素つ氣なく別れを告げて、自分の宿舎へ歸つて行つた。明日本營へ出掛けて行つて、あの澄し込んで居る副官に決闘を申し込むか、それとも本當に水に流して了ふか?これが途々彼を苦めた問題であつた。時にはあの小ッぽけな、弱々しい、高慢ちきな男が自分の拳銃の下で憎えてゐる様子を見たら、何んなに胸がすくだらうなど、考へるが、又時には此の憎む可き副官くらゐ自分の親友にし度いと思ふ者は、すべての知人を通じてたゞ一人もないのを感じて、吃驚するるのであつた。

## 八

ポリースとロストフと會見の翌日、奥太利軍と露西亞軍の閱兵があつた。露西亞軍の方は新しく本國から着いたのも、クトツゾフと一緒に戦争から歸つたのも、兩方ともこれに参加する事となつた。兩陛下——皇太子を伴つた露西亞皇帝に、太公をつれた奥太利皇帝——が八萬の聯合軍の

檢閲を行ふのであつた。

美しく清められ飾られた各隊は、要塞前の原に整列す可く、朝早から行動を開始した。或る處ではひらくと翻る旗と共に、幾千となき足や銃剣が動いてゐるかと思ふと、將校の號令につれて立ち止つたり、方向を變へたりした。そして別な軍服を着けた同じやうな歩兵の集團を迂回し乍ら、一定の間隔を置いて整列するのであつた。或る處では青、赤、緑の刺繡をした華美やかな軍服姿の騎兵が、黒毛、栗毛、葦毛の馬に跨つて、一面に刺繡だらけの服を着た軍樂隊を先頭に立て、拍子正しい蹄の音と武器の觸れ合ふ響を立て乍ら、肅々と練り廻すのであつた。又或る處ではびかくに磨き立てた大砲が、車の上で震動して銅器特有の音をたて、火索杖の臭のぶん／＼する砲兵隊が、歩騎兵の間を長々と列を作つて、指定された場所に位置を占めてゐる。赤い頸を襟で突き上げ、太い腰や細い腰を矢鱈に締めつけた大禮服を着用し、ありたけの動章に飾帶を掛けた將官や、頭を綺麗に撫でつけて、出来るだけおめかしをした將校達ばかりでなく、念入りに洗つて剃刀を當てた爽々しい顔附をして、到底これ以上光らす事は出来まいと思はれる程、磨き上げた武器を持つた兵卒や、胴體が縞子のやうに光つて、濡れた鬘を一本竝べに手入れた馬に至る迄——一同は何かしらたい事でない、意味のある、莊嚴な或る物の行はれようとしてゐるのを感じた。すべての將官も兵卒も、此の人間の海の中に入つたら砂粒も同じだ、と自分で自分の弱小

を感じたが、又同時に此の偉大なもの、一部分だと思つて、自分の強大を感じもするのであつた。朝早くから緊張した努力と奔走が始つたが、十時には一切の物が所定の秩序に配置された。宏い原の上には無数の列が竝んだ。全軍は三段に別れて連つた。前方には騎兵、其の後には砲兵、その又後には歩兵といふ順であつた。

列と列との間はさながら一つの往來が出来上つてゐた。此の三つに別れた軍隊は、きつぱりと互ひにけぢめを見せてゐた。それは、戦闘に参加したクトゥゾフ軍と（此の中で第一線の右翼にバヴログラード聯隊が立つてゐた）、露西亞から新たに到着した普通近衛兩師團の各聯隊と、塊太利の軍隊であつた。併し一同は同じ長官同じ軍規の下に、同じ線の上に立つてゐた。

「お見えになつた！ お見えになつた！」といふ昂奮した囁きが、木の葉を渡る風の如く傳はつた。と、びつくりしたやうな聲が聞えて、最後の準備をする混雜の波が各隊を走り過ぎた。オルミユツから前方に當つて進み動く一群が現れた。それは風の無い日であつたけれど、此の時に一陣の輕風が全軍を流れ走つて、竿に當つてはた／＼と鳴る聯隊旗や、槍に付けられた大隊旗を一寸顛はせた。それはまるで、軍隊自身この軽い動搖で以て、皇帝接近の喜びを表はすかのやうであつた。

『氣を付け！』の一聲が響き渡ると、やがて曉の雞鳴のやうに、此の聲は其處でも此處でも繰



り返された。さうして又すべてが静まり返つた。

死の如き静寂の中に馬蹄の音のみ聞えてゐた。これは兩皇帝の扈從であつた。皇帝が側面に近寄ると、將軍進行曲を吹奏する、最初の騎兵聯隊の喇叭が響き初めた。それは何だか喇叭手などの吹奏ではなく、軍隊自身が皇帝の接近を喜んで、自然この音を發したものの、やうに思はれた。此の響の中にアレクサンドル皇帝陛下の若々しい、優しい聲がはつきり聞えるのであつた。彼が軍隊に挨拶の言葉を述べると、第一の聯隊は、「ウラアア」と叫んだ。耳を聳するやうな長々と引き伸した悦びの聲は、兵士等自身すら、自分達の作り成してゐる此の大塊の數と力に、びつくりする程であつた。

ロストフは、最初皇帝の近寄つたクトゥゾフ軍の第一列に立つてゐたが、その瞬間全軍の一人一人が感じたと同じ感じを経験した。それはこの瞬間の偉大さを意識する誇らしさと、この莊嚴感の源たる人——皇帝に對する熱狂的な忘我であつた。

此の一大塊が（彼自身もその中へ結び附けられてゐる、取るに足らぬ砂粒であつた）火水の中に身を投じ、犯罪や死や偉大なる功業を執行するのも、只この人の一言で決しられるのだ、とかう彼は直感した。それ故彼は將に近附きつ、あるこの一言の前に、慄へ戦かすにゐられなかつた。

『ウラア！ウラア！ウラア！』の聲が四方からどよめき起つた。そして各聯隊は相ついで最初

に將軍進行曲、次に『ウラア！』を以て皇帝を迎へた。將軍進行曲と『ウラア！ウラア！』の響は次第に力を増して來て、耳を聳するやうな一つの轟に溶け合ふのであつた。

皇帝が近附かない中は、各聯隊とも不言不動の姿勢を保つてゐて、生なき體のやうに見えてゐたが、皇帝が自分達の傍まで來るや否や、聯隊は急に活氣ついて、皇帝がもう通過した部隊の轟に加つて、叫喚の聲を上げるのであつた。これ等の恐しい耳を聳するやうな聲の響に包まれ、四邊形のまま、化石したやうにじつと動かぬ大集團の前を、鷹揚に恰好よく、そして何よりも驚嘆すべき事には、自由に身をこなしながら、數百人の扈從が騎馬で進んだ。其の先頭に二人の人——兩皇帝が馬を進めるのであつた。大肉團の熱情を抑へたやうな注意が、此の二人の上へ一つに溶け合ひながら注がれてゐた。

若く美しいアレクサンドル皇帝は、近衛騎兵の軍服を着、三角帽を横向きに被つてゐたが、その氣持のよい顔と、餘り高からぬ朗らかな聲とで、すべての注意を引き附けるのであつた。

ロストフは喇叭手から程遠からぬ邊りに立つてゐたが、遙かに皇帝の顔を鋭い目で見分けたので、近付き來る其の姿を一心に見成つて居た。皇帝が二十歩の距離に近寄つて、見事な若々しい幸福けな顔を、巨細な點まではつきりと見分ける事が出來た時、ロストフは嘗てこれ迄経験した事のない、優しい愛情と感激を味つた。一線一劃一舉一動、皇帝に屬する一切のものが、彼には

美しく思はれたのである。

バゾログラード聯隊に面して立ち止ると、皇帝は埃太利帝に佛蘭西語で何か言つて微笑した。此の微笑を見てロストフも我知らず微笑し始めた。そして皇帝に對する愛が一層激しく寄せて來るのを覺えた。彼は何とかして皇帝に對する自分の愛を表白し度かつた。がそれは不可能だと知つてゐたので、彼は泣き出し度いやうな氣持がした。皇帝は聯隊長を呼び出して、一つ二つ言葉を掛けた。

「あ、若し陛下が俺に言葉を掛けて下さつたら。俺は本當に何うなるだらう？」とロストフは考へた。「幸福の餘りに死んで了ふ。」

皇帝は又將校に向つて、

『朕は满腔の熱情を以て諸子一同に感謝する。』といふ一語々々がロストフには天籟の響のやうに聞えた。

今皇帝の爲めに死ぬ事が出來たら、何んなにロストフは幸福であつたらう。

『諸子はゲオルギイ勳章を贏ち得られた。しかも諸子はそれを受ける資格を有してゐられる。』

「唯死に度い、陛下の爲めに死に度い！」ロストフはかう考へた。

皇帝は尙何やら言つたが、ロストフは聞き分ける事が出來なかつた。兵士等は胸を張つて、「ウ

ラー！」と叫んだ。

ロストフも同じく有りたけの力を振り絞つて、鞍の上に屈み込み乍ら叫んだ。彼は此の叫び聲に依つて自分の體を害つてもい、只々皇帝に對する己れの歡喜を、完全に表白し度いと願つたのである。

皇帝は輕騎兵と相面して何やら決し兼ねた體で、幾秒かの間じつと佇んでゐた。

「何うして陛下が躊躇されるなんて事が有り得るのだらう？」かうロストフは考へた。が、やがて暫くすると、此の躊躇の有様さへ、皇帝のすべての動作と同様、ロストフには神々しく魅惑的に見えて來た。

皇帝の躊躇はほんの一瞬間ばかりであつた。當時一般の風で爪先の狭く尖つた皇帝の靴が、乗つてゐる英吉利式仕立ての栗毛の牝馬の鼠蹊に觸れ、白い手袋をはめた手が手綱を繰ると、彼は不秩序に海のやうにどよめき立つ、副官達に送られて動き始めた。順々に他の聯隊の傍へ立ち止りながら、皇帝は次第に遠く離れて行つた。そして遂に其の帽子の白い飾り毛が、兩皇帝を取り巻く侍從隊の陰から、ロストフの目に入るだけになつた。

侍從の人々に交つて、怠儀さうにぐつたりと馬に跨つてゐるボルコンスキイを見掛けたとき、ロストフはふと昨日の争ひを想ひ出した。が、それと同時に、決闘を申し込む可きかどうかの問

題が浮んで来た。「無論そんな事をする必要はない。」と今ロストフはかう考へた。「それに今のやうな場合、そんな事を考へたり、話したりする價值があるだらうか？かうして愛と歡喜と自己犠牲の瞬間に、我々の爭論や侮辱が何れだけの意味を持つてるものか？俺は今すべての人を愛する、すべての人を許して遣る。」かうロストフは考へた。

皇帝が殆どすべての聯隊を巡回し終つた時、各隊は皇帝の傍を分列行進し始めた。ロストフは新しいヂェニーツフから購めたベドウィンに跨つて、自分の中隊の背後につき、全く一人切りで皇帝の目に立つ場所を進んで行つた。

ロストフは優れた乗手であつたから、皇帝の傍まで行き着かない中に、二度ベドウィンに拍車を打ち込んで、巧く熱したベドウィンを凄じい駆足に誘き出した。ベドウィンも同じく自分の體に皇帝の視線を感じたらしく、泡立つた鼻面を胸の邊へ押し當て、尻尾を上へ跳ね擧げ、まるで地面に觸れないで空を飛ぶやうにし乍ら、見事に高く持ち上げた足を交る／＼踏み出しつ、鮮かに疾走するのであつた。

ロストフ自身も兩足を後ろへはね、腹をぐいと引いて、まるで馬と一體になつたやうに感じ乍ら、眉を擧めてゐるけれど仕合せらしい顔(ヂェニーツフの所謂鬼面)をして皇帝の傍を通り抜けた。

『バヴログラードの隊は勇士揃ひだ！』と皇帝は言つた。

「若し陛下が今直ぐ火の中へ飛び込めと命じられたら、俺はまア何んなに幸福だらう。」とロストフは考へた。

閱兵が終つた時、新らしく來た將校もクトゥヅフに附いてゐるのも、其處此處に群を作つて、褒賞の事や、埃太利兵の事や、其の服裝の事や戦線の事や、ボナバルトの事などで談しを始めた。

今こそ——殊にエッセン軍團が到着して、普魯西亞全體我軍に味方するやうになつたら、ボナバルトも酷い目に合ふに相違ない、などと語り合つた。

併しどの群でも、一番餘計にアレクサンドル皇帝の噂が出た。皆その言語動作を一つ／＼傳へ合つて、感激するのであつた。

一同は只々片時も早く皇帝の指揮の下に敵に向ひ度いと、そればかり待ち望んで居た。皇帝自身の指揮を直接に仰いだなら、たとへて敵が誰であらうと勝てない筈がない、こんな風にロストフを始め將校の大多數は、檢閲の後に考へたのである。

檢閲後一同の者は、二度も續けて勝つた戦争の後よりもつと強く、近い將來に於ける戦捷を確信して疑はなかつた。

檢閲の翌日ボリースは取つときの軍服を着て、友のベルグから成功を祈るといふ言葉に送られつゝ、オルミュツなるボルコンスキイの許へ出掛けた。それはボルコンスキイの知遇を利用して一番工合のいい位置を得る爲めであつた。彼は大頭株の副官が、軍隊でも殊に好ましい位置のやうに思はれた。

『親父から一萬留づゝも送つて貰へるロストフは、誰にもお辭儀をし度くない、誰の小僧にもなり度くないなんて、太平樂を竝べてゐられるけれど、俺みたいに自分の頭より他何も持たない人間は、自分で自分の出世の方法を講じて、すべての機會を遁がさず利用しなくちやならない。』此の日彼はオルミュツでアンドレイ公爵に會へなかつた。けれども大本營及び外交團の所在地、兩皇帝陛下を始め侍臣達の居住地たるオルミュツの町の姿や、延臣近侍達の華美やかな姿は、此の上流社會の一員になり度いといふボリースの望みを、一層烈しく燃え立たせるのみであつた。

彼は誰も知人を持つてゐなかつた。彼がはいからな近衛の軍服を着て來たにも拘らず、前立てや飾帶や勳章をつけ、華美な馬車に乗つて往來を行き交ふ上流社會の人達は、廷臣も武官も皆一様に、ボリースの如き一介の近衛將校の存在など、認めようとしなければ、認める事も出來な

い。皆自分よりは比較にならぬ位、高い處に立つてゐるやうに思はれた。彼は總指揮官クトゾフの宿舎でボルコンスキイに面會を求めたが、其處に居合はす副官や從卒達までが、お前のやうな將校は掃き捨てるほど此處へ舞ひ込んで來る、我々はもうそんな連中に飽き／＼してゐる、といふ事をボリースに思ひ知らせるやうに、じろ／＼と彼を眺めるのであつた。それにも拘らず、といふより寧ろそれに刺戟されて、翌十五日の午後彼は再びオルミュツへ行つた。そしてクトゾフの住んでゐる家へ入つて、ボルコンスキイに面會を求めた。

アンドレイ公爵は在宅であつた。ボリースは以前舞踏室だつたらしい大廣間に通された。其處には今五つの寢臺と、寄せ集めの雑多な家具——卓、椅子それにピアノが一臺据ゑてあつた。戸口に近く座を占めてゐる一人の副官は、波斯風の寛衣ガランを着て卓に向つて書きものをしてゐた。今一人の赤ら顔の肥えた副官——ネスギーツキイは両手で後ろ頭を支へて、寢臺の上に横になつた儘、自分の傍へ腰を下した士官を相手に談笑してゐる。今一人はピアノに向つて維納風のヴルツを弾き、又一人はそのピアノの上に寢をべつて、曲に合して歌つてゐた。ボルコンスキイは其の場に居なかつた。これ等の人々はボリースの顔を見ても、誰一人自分の位置を變へるものはなかつた。書きものをしてゐた副官はボリースに問ひ掛けられて、忌々しげに振り返り乍ら、ボルコンスキイは今日當直だから、若し彼に會ひ度いなら、左側の戸口から應接室へ入るがよいと言つ

た。ボリースは謝辭を述べて應接室へ入つた。すると其處には十人ばかりの將校や士官がゐた。

丁度ボリースが入つた時、アンドレイ公爵は輕蔑したやうに目を細め乍ら、若しこれが職務でなかつたら、わたしは一分間もあなたと話なんかするのぢやないんですよ、と言ひ度さうな一種特別な、わざとらしく慇懃な、怠儀さうな顔附をして、ぴか／＼と勳章を光らせた露西亞の老將官の言葉を聞いてゐた。此方は爪先立ちで氣を附けの姿勢を取つて、眞赤な顔に兵隊のやうな恭しい表情を浮べ乍ら、何やらアンドレイ公爵に報告してゐた。

『大いに結構です、何うぞお待ち下さい。』輕蔑的な口の利き方をしようと思つたとき何時もするやうに、露西亞語を佛蘭西風のアクセントで發音し乍ら、アンドレイ公爵はかう言つた。そしてボリースの姿を見附けると、何かもう少し聞いて呉れと頼み乍ら、拜むやうにして後から走り廻る將官を振り返らうともしないで、愉快な微笑を浮べて點頭き乍ら、ボリースの方へ向いて了つた。

ボリースは此の瞬間、以前から豫想してゐた事を眼のあたりに見た。それは他でもない、軍隊には操典や要務例に明記してあつて、隊の人々や彼自身の心得てゐる階級や規律のほかに、又別なより以上本質的な階級があるといふ事であつた。此の階級こそは眞赤な顔をした嚴めしい將軍をして、一大尉アンドレイ公爵の物好きのために、少尉補のドルベツコーイと話してゐる間、恭

しい態度で待つべく餘儀なくさせたのである。ボリースは自分も今後操典に書かれてゐない、不文の階級に依つて勤務しようと、以前より一層固く決心した。彼は今アンドレイ公爵に紹介された結果、他の場合——前方勤務の時などには、自分ら如き近衛附の少尉補なんか、一息に吹き飛ばすことが出来る此の將軍より、上位に立つてゐるやうに感じられた。アンドレイ公爵は彼に近寄つて其の手を取つた。

『昨日君に會へなくて大變残念でした。わたしは一日獨逸の連中と一緒に駈けずり廻つてゐたのです。ヴィローテルと軍の配置アスボチーヤを調べに行きましてね。いや何うも獨逸人の「正確」といふ奴に掛つたら——際限がないんですからね。』

ボリースは、アンドレイ公爵がもう知れ切つた話のやうに仄めかしたことを、ちやんと呑み込んだ振をしてほ、笑んだ。其の癖彼はヴィローテルといふ苗字も、いや、配置アスボチーヤといふ言葉すら今始めて聞いたのである。

『時に何うです君、矢張り副官御志望ですか？わたしは此の間ぢうから君の事を考へてゐましたよ。』

『え、實はわたし』何故か自然に赤くなつてボリースは言つた。『總指揮官にお願いしようと思つたのです。閣下のお手許へはクラীগン公爵の手紙が届いてゐる筈であります。わたしがさう

し度いと思ふ譯は』彼は言譯のやうに附け足した。『近衛師團が實戦に参加しないらしいからです。』

『宜しい、宜しい！又後でお話しませう。』とアンドレイ公爵は言つた。『併し一寸此の人の取次をさして貰ひます、そしたらわたしはすつかり君のものです。』

アンドレイ公爵が眞赤な顔をした將軍の取次に行つてゐる間、不文の階級に依る勤務の利益に關して、ボリースと同じ觀念を持つてないらしい此の將軍が、副官との話を妨げた生意氣な少尉補をじつと穴の明くほど見詰めるので、ボリースは何だか間が悪くなつて來た。彼は顔を反けてアンドレイ公爵が總指揮官の書齋から出て來るのを、じり／＼し乍ら待ち焦れて居た。

『實はね君、かうしたらと思ふんですがね。』二人がピアノの有る大廣間へ通つた時、アンドレイ公爵はかう言つた。『君總指揮官の所へ行つたつて仕方が有りませんよ。閣下はうんと御愛想を振り撒いて、食事に招待されるでせう。それは例の不文の階級に據つて勤務する意味から見ても、何もさう悪い事ぢやない。』とボリースは考へた、併しその先は何にもありません。我々のやうな副官や傳令は、今に一大隊編成出來さうな程ゐるんですからね。かうして見たら何うです。わたしに一人仲のい、友達があるんです。それは侍從武官(將官)をしてゐるドルゴルーコフ公爵といつて、立派な人物です。君はご承知でないか知れませんが、問題はつまりかうなんです。今我々

はすべて、クトゥゾフ將軍も其の幕僚も、全く何等の權力も持つてゐないのです。一切の物は今皇帝の周圍に集中されましたからね。だからこれから二人で、ドルゴルーコフの所へ行かうぢやありませんか。わたしも行かなくちやならん用事が有りますから。わたしはもう君の事を話して置きましたよ。ドルゴルーコフ公爵が何と言ふか、君を自分の傍へ置くか、或ひは何處か太陽に近い處へ周旋出來ると言ふか、一つ見て見ようぢやありませんか。』

アンドレイ公爵は何時も若い人を指導して、社會上の成功を助ける機會が來ると、非常に元氣づいて來るのであつた。人から自分に助力して遣らうと言はれても、持前の傲岸な性質として承知する事が出來ないので、自分から他人に助力を與へてやるといふ口實の下に、彼は内心いつも牽引を感じてゐる社會、自分に成功を授けて呉れる社會へ出入してゐた。彼は極めて快くボリースの面倒を見て、一緒にドルゴルーコフ公爵の許へ出掛けた。

彼等が兩國皇帝、及び其の侍臣等に占められてゐる宮殿へ入つたのは、もう夕方遅くであつた。丁度此の日軍事會議があつて、兩陛下始め<sup>ホフスケックラット</sup>兵事會議局の議員一同も列席した。此の會議に於て老人派——クトゥゾフ及びシュヴルツェンベルグ(一七七一—一八二〇年、アウ)の意見と正反對に、直ちに進出してボナバルトと大決戦をしようといふ事に決議されたのである。アンドレイ公爵がボリースと共に、ドルゴルーコフ公爵を探しに宮城へ入つた時、丁度會議が終つたばかりで、大本營の人

々は、青年派の勝利となつた今日の會議の氣分に酔はされてゐた。未だ攻勢を取らないで、何やら待つてゐると勧める優柔派の聲は、満場一致で揉み潰され、彼等の論據は否應言はさぬ、攻勢有利論に顛覆されて了つた。それ故會議で論議された事、即ち未來の決戦と疑ひもなき味方の勝利とは、もう未來の事ではなくて、過去の事か何ぞのやうに思はれた。利益はすべて味方の側にある。疑も無くナポレオンの勢に優る偉大な兵力は、一箇所に集中されてある。兵は皇帝の來着に活氣を呈して、戰鬪を待ちこがれてゐる。活動の舞臺たるべき地點の戰術的意義は、全軍を率ゐる奧太利の將軍ヴィローテルが、極めて微細な點まで悉く諳んじてゐる（まるで幸運の神がわざとしたやうに、奧太利軍は今度佛蘭西軍と砲火を交へる可き原野で、去年機動演習を行つたばかりである）。又來る可き戰場の地形も微細に地圖に寫し傳へられてある。其の上ボナバルトも大分力を削がれたらしく、一向に事を企てる模様がなかつた。

最も熱烈な攻勢論者の一人たるドルゴルーコフ公爵は、丁度會議から歸つたばかりの所で、疲れてぐつたりしてゐるが、併し味方の勝利に活氣付いて得意氣であつた。アンドレイ公爵は自分の保護する將校を彼に紹介した。併しドルゴルーコフ公爵は、彼の手を丁寧にしつかり握つただけで、何にもボリースに言葉を掛けなかつた。そして此の時一番強く自分の心を占めてゐる思想を、言ひつて了はずに居られないやうな風で、アンドレイ公爵に向つて佛蘭西語で話し出した。

「ねえ君、我々は今實に激烈な論戦に勝つて來たんだよ！今たゞ願はくは、此の論戦の結果たる實戦も同様に、華々しい勝利であらん事をだ。併し君、」と彼は活氣に充ちた斷片的な調子で言つた。「僕は奧太利、別けてもヴィローテルに對して自分の罪を認めない譯に行かないよ。何といふ正確な、何といふ精密な、何といふ豊富な地勢の知識だらう。そしてあらゆる將然の出來事、あらゆる條件、あらゆる微細なる諸點に關して、何といふ鋭敏な豫察を遂げたものだらう！とても君、今我々の享有してゐるより以上有利な條件は、故意と考へ出す事も出來ないからね。奧太利軍の正確な知識に露西亞軍の勇敢を併せたんだもの、其の上に何を望む事が有らう。」

「では、攻撃は愈々決しられたんですか？」とボルコンスキイは言つた。

「さうぢやないかね、君、ボナバルトも全く血迷つて了つたよ。君知つてるかね、今日皇帝のお手許へボナバルトの手紙が着いたんだよ。」（とドルゴルーコフは意味ありげに薄笑ひした。）

「へえ、何んな事を書いてるんですか？」とボルコンスキイは訊いた。

「何を書くもんかね？何とかかとか竝べてるけれど、みんな時を移さうといふ策略に過ぎないんだよ。僕は今から君に言つておくが、彼奴はもう我々の手の中のものだよ、それは確かな事だ！併し何より滑稽なのはね、不意に人の好い笑ひ聲を上げ乍ら彼はかう言つた。『何うしても返書の宛名を考へ附けなかつた事さ。總督でもなければ無論皇帝でもない、とすればまあ、差しづめボ

ナバルト將軍殿となる譯だ、と僕は思ふね。』

『けれど皇帝として認めないといふ事と、ボナバルト將軍と呼ぶ事との間には、一寸相違がありますよ。』かうボルコンスキイは言つた。

『そこなんですよ。』と笑ひ乍ら早口にドルゴルーコフは遮つた。『君ビリビンを知つてゐるだらう。あの男は實に伶俐な人間だが、あの男がかういふ宛名を提議したのさ。』人類の敵兼強奪者』つてね。』

ドルゴルーコフは愉快けにからりと笑つた。

『それだけの者でせうか?』とボルコンスキイは訊いた。

『併しそれでもビリビンが眞面目な肩書を考へ出したよ。中々機智のある賢い男だ。』

『どう云ふんです?』

『佛蘭西政府の元首 — au chef du gouvernement français と云ふんだ。』ドルゴルーコフはさも満足らしくかう言つた。『さうぢやないか、實にい、ね』

『い、ですね、併し、さぞボナバルトの御意に召さないでせうよ。』とボルコンスキイが言つた。

『さう、嘘かしね! 僕の兄は彼奴を知つてゐるんだよ。兄は巴里にゐた時、一度や二度でなく彼奴——今の佛蘭西皇帝の所で食事をしたもんだが、其の話を聞くと、あれ以上洗練された狡獪

な外交家を見た事がないさうだよ。それ、佛蘭西式の巧者に、伊太利式の芝居氣を合はしてゐるんだからね。君彼奴とマルコフ伯爵の逸話を知つてますか? 彼奴と應對の出来る人はマルコフ伯爵一人切りだつたよ。君あの手巾ハンカチの一件を知つてますか? あれは實によく出来てるね!』

口まめなドルゴルーコフはボリースとアンドレイ公爵を、交るゝ相手にし乍ら語り始めた。ボナバルトは露西亞の公使マルコフを試す積りで、わざと手巾を彼の前へ落した。そして多分拾つて呉れる事と期待したらしく、ちつと對手の顔を見乍ら立ち止つた。するとマルコフは直ぐ其の傍へ自分の手巾を取り落し、ボナバルトのを拾はないで自分のだけ拾ひ上げた。

『い、ですね。』とボルコンスキイは言つた。『時に公爵、わたしは此の若い人の事でお願があつて來たのです。御存じでもありませんが……』

併しアンドレイ公爵が未だ言ひ終らぬ中に、一人の副官が室へ入つて來た。ドルゴルーコフ公爵を皇帝の所へ呼びに來たのである。

『あ、何といふ残念な事だ!』忙しげに立ち上つて、アンドレイ公爵とボリースの手を握り緊めつ、ドルゴルーコフは言つた。『いや、僕は悦んで自分出来るだけの事はするよ、君の爲めにも、又此の可愛い若い人の爲めにもね。』彼は人の好き、うな、眞實な、そして活氣に充ちた輕卒な表情を浮べて、今一度ボリースの手を握り緊めた。『けれども御覽の通りの仕末だから……』



又此の次にね。」

ボリースは自分が隊にゐる時、ほんの小つぼけな、意氣地のない、詰らない一部分として参加してゐた、あの偉大な集團の運動を悉く左右してゐる、最上の權力に今親しく接觸してゐるのだ、かう思ふと心のときめくのを覺えた。二人はドルゴルコーフ公爵の後から廊下へ出た。するとドルゴルコーフの入つて行つた皇帝の居間の戸口から、出會頭に文官服を着た脊の低い男が出て來た。利口さうな顔の下願が、鋭い線をなして突き出て居るが、それは少しも容貌の邪魔にならないで、却つて特殊な生氣と敏活な表情を添へるのであつた。此の脊の高くない男は、親しい友達か何ぞのやうに、ドルゴルコーフに點頭いて見せた。そして吸ひ附くやうな冷たい眼附で、じつとアンドレイ公爵を見据ゑ乍ら、眞直に彼の方へ向けて歩いて來た。それは丁度アンドレイ公爵が會釋するか道を譲るか、何方かするだらうと考へてゐるやうな風付であつた。併しアンドレイ公爵はその何方もしなかつた。彼の顔には憎惡の色が表はれてゐた、で、此の青年は顔を反けつ、廊下をこそそこそと通つて行つた。

『あれは誰ですか？』ボリースは訊ねた。

『あれは今最も有名な、そして僕に取つて最も不快な人物の一人です。あれは外務大臣のアダム・チャルトリーシュキイ(一七七〇—一八六六年)です。あ、あんな人達が——』二人が宮殿の外へ出た時、アンド

レイは抑へ兼ねた嘆息を洩しつ、かう言つた。『あんな人達が國民の運命を決するのだからね。』翌日軍は進出した。で、ボリースはかのアウステルリッツの役迄、ボルコンスキイの所へもドルゴルコーフの所へも顔出しが出来ないで、猶暫くイズマイロフ聯隊に留つてゐた。

一〇

十六日の拂曉、ロストフの勤務してゐるデニーツフ中隊は(此の隊はバグラチオン公爵の支隊に屬してゐた)、宿營地を發して所謂『仕事』(戦闘)に出掛けた。が、他の縦隊の後に随つて一露里ばかりも來た時、突然街道で進行を留められた。哥薩克兵、第一第二の輕騎兵中隊、數箇の歩兵大隊、砲兵隊、及びバグラチオン、ドルゴルコーフの兩將軍が、副官を連れて前方に進んで行つた。ロストフは傍を通り過ぎるそれ等の人々を眺めてゐた。何時も戦闘の開始に先立つて感ずる恐怖も、此の恐怖を壓伏しようとする心内の争闘も、又此の戦闘で輕騎兵らしい勳功を立てようといふ空想も、悉く煙の如く消えて了つた。彼の中隊は豫備へ廻されて了つた。ニコライ・ロストフは此の一日を佗しく退屈に過した。午前八時頃、彼は前方に小銃の響や『ウラア』の叫びを聞き、後方へ運ばれる負傷者を見た(それもさう澤山はなかつた)。遂に彼は佛蘭西騎兵の一枝隊全部が、哥薩克の騎兵中隊に取り卷かれて來るのを見た。明らかに戦闘は終つたらしい。その戦闘は大し

たものではないが、味方に取つて有利なものであつた事が察せられた。後方へ引つ返す兵士や將校達は、華々しい味方の勝利、ギシャウ市の占領、佛蘭西枝隊の捕獲などを話し合つてゐた。昨夜の烈しい凍ひやの後で、太陽は晴れくと空に輝いてゐた。此の秋の日の樂しげな輝きは、戰捷の報知と相待つて、更に晴がましく見えた。そして單に戰闘に参加した人々の物語りばかりでなく、ロストフの傍をあちこちする兵士、將校、將軍、副官等の悦ばしげな顔の表情も、やはりこの戰捷の報知を傳へるのであつた。それが戰闘に先立つ恐怖を徒らに忍んで、此の樂しい日を無爲に過したロストフの心を、餘計に鋭く刺すのだつた。

『ロストフ、此處へ來いよ、腹癒せに一杯やらうぢやないか！』フラツコ壕と肴を前に置いて道端に坐り乍ら、デニニツフが喚いた。

將校達はデニニツフの食糧箱ボットル、ケイスの周りへ車座に集つて、下物を頬張り乍ら話し始めた。

『やあ又一人引つ張つて來るぞ！』二人の哥薩克に引かれてとぼく歩いて來る、俘虜の佛蘭西龍騎兵を指さしながら、一人の將校がかう言つた。

哥薩克の一人は俘虜から奪つた、美しく逞ましい佛蘭西馬の手綱を取つて居た。

『馬を賣れよ。』とデニニツフは哥薩克に叫んだ。

『はッ、何うぞ、中隊長殿……』

將校達は立ち上つて哥薩克と俘虜を取り圍んだ。此の佛蘭西龍騎兵は若い可愛いアルサス州人で、獨逸風の抑揚で佛蘭西語を發音した。彼は昂奮の餘り息を切らし、赤い顔をしてゐた。佛蘭西語が一寸耳に入ると、彼はいきなり將校達の方へ振り向いて、代るく別な人を掴まへ乍ら話し出した——自分は決して俘虜になる筈でなかつたのだ、俘虜になつたのは自分の罪でなく、馬衣を取つて來いと自分に命令した伍長が悪いのだ、此の男が露西亞兵はもう餘所へ行つて了つたと教へたのだ、などと訴へるのであつた。そして一言々に、彼は *mais qu'on ne fasse pas de mal à mon petit cheval* (けれども此の馬を侮あだしなすな) と附け足して、自分の馬を撫でくした。見受けたところ、彼は自分が何處にゐるかといふ事を、よく合點してゐないらしかつた。彼は自分の捕まつた事を言譯するかと思ふと、今度は目の前に自分の上官が居るやうな氣で、兵士らしい規則正しさと、勤務に關する注意の細かさを示したりした。彼は味方とまるで違つた佛蘭西軍の新鮮な空氣を、その儘友軍の後衛へ運んで來たのである。

哥薩克兵等は馬を二十留で手離した。今度送金を受けたばかりで、將校の中でも一番裕福なロストフがそれを買つた。

『併し私の馬を虐めないで下さい。』

馬がロストフに渡された時、アルサス州人は此の輕騎兵に向つて、人のい、調子でかう云つた。

ロストフは微笑しながら龍騎兵を慰めて彼に金を與へた。

『歩け！歩け！』哥薩克は捕虜を先へ進ませようと、一寸其の手に觸りながら、聞き囁りの佛蘭西語でかう云つた。

『陛下だ、陛下だ。』不意に輕騎兵たちの間にかう云ふ聲が聞えた。

すべてのものが狼狽して、驅け出した。ロストフは帽子に白い前立を附けた幾人かの騎馬の人が、後方の道路に添うて進んで來るのを見た。一瞬にして一同は己れの位置に着いて待ち設けて居た。

ロストフは自分が定めの場合へ驅け附けて馬に乗つたのを、覺えても居なかつたし又感じもしなかつた。忽ちにして戦闘に參與しなかつた口惜しさも、見飽きた人々に交つてゐる中に、自然と生ずる平板單調な心持ちも消え失せて、己れ自身に關するすべての想念も束の間に影を潜めた。彼は皇帝の近接に依つて湧き起つた、幸福感に全幅を領されて了つたのである。彼は此の接近だけで今日の損失を償はれたやうに感じた。彼は長いこと待ちこがれてゐた、構曳の日の戀人のやうに幸福であつた。列中で後ろを向くやうな事は出来なかつたし、又もしもなかつたが、彼は感激の極に達した直覺を以つて、次第に皇帝の接近を感じた。彼は單に近づいて來る騎者達の、馬蹄の響でそれを感じたのみでなく、次第々々に自分の周囲が明るく、悦ばしく、意味ありげに賑々しくなつて來るので、尙その感を強めたのである。此のロストフの『太陽』はつ、ましく、而も嚴

かな光線を放ちつゝ、愈々近く進み寄るのであつた。と、ロストフはもう自分が此の光線を浴びるのを感じた、やがて皇帝の聲が聞える——あの優しい、落ち着いた、神々しい、それと同時に極端に素直な聲が聞える。當然さうなくてはならぬとロストフが感じたやうに、死の如き靜寂が襲うて來た。そして此の靜寂の中に皇帝の聲が響くのであつた。

『Les huzards de Pavlograd?』(豫備隊の兵隊だ?)と彼は疑問の調子でかう言つた。

『La réserve, sire!』(豫備隊の兵隊だ?)と誰かの別な聲が答へた。それは『Les huzards de Pavlograd』と

云ふあの人間離れのした聲の後では、恐ろしく人間竝に聞えた。

皇帝はロストフの側まで來て立ち止つた。アレクサンドルの顔は三日前の閱兵の時より、なほ一層美しかつた。その顔は樂しさ、若々しさ——まるで十四五の悪戯な少年を聯想させるほど、無邪氣な若々しさに輝いて居たが、それでも矢張り此の顔は神々しい皇帝の顔であつた。輕騎兵中隊を見廻して居るうちに、ふと皇帝の眼がロストフの眼と出合つた、そして二秒ばかりその儘じつとして居た。皇帝はロストフの心中を察したのか(ロストフには彼がすべての事を察したやうに思はれた)、彼は二秒ばかりその碧い眼でロストフを見詰めた。(その眼からは柔かなつ、ましい光が流れ出た。)それから不意に眉を上げ、左足で鋭く馬を打つて、駈足で前方へ進んだ。

若い皇帝は戰場に臨みたいと云ふ希望を、何うしても抑へる事が出来なかつた。そして廷臣等

の諫めも聞かず、今まで共に鹵簿を進めて居た第三縱隊を離れて、十二時頃前衛さして進んだのである。まだ輕騎兵隊まで行き着かぬ間に、幾人かの副官が勝ち戦の報知を持つて彼を迎へた。

此の戦闘は、佛蘭西騎兵の一中隊が俘虜にされた、と云ふだけの事に過ぎなかつたが、まるで佛蘭西の全軍に對する華々しい勝利のやうに報告された。それ故皇帝も味方の全軍も、まだ硝煙が戰場に残つて居るのを見て、佛蘭西軍は悉く撃破せられ、止むなく退却しつゝ、あるものと信じて了つた。皇帝が通過して幾分かの後、バヅログラード聯隊の二箇中隊に、前進の命令が下つた。ギシャウ——小さな獨逸の町で、ロストフは今一度皇帝を見た。皇帝の到着する前、かなり激烈な交射のあつた町の廣場には、まだ取り片付ける暇のない戦死者や負傷者が倒れて居た。武官文官の扈從に取り卷かれた皇帝は、閱兵の時と違つた栗毛の、英吉利風に仕立てた牝馬に乗つて、體を傍の方に傾け、黄金の柄付眼鏡を優美な手附で眼へ當てながら、帽子もない血みどろの、頭をさらして、俯伏しに倒れて居る一人の兵士を眺めて居た。此の負傷兵は實に不潔で、粗野で醜かつた。こんなものが皇帝の傍近く居るのを見て、ロストフは侮辱されたやうな氣がした。丁度寒氣が脊中を走り過ぎたやうに、皇帝の丸い肩がびくりと慄へ、左足が痙攣的に馬の側腹へ拍車を當て始めるのを、ロストフは見た。併しよく馴らされた馬は平氣で邊りを見廻しながら、その場を動かうともしなかつた。一人の副官が馬から下りて、兩手で兵士を抱き起し、來合せた擔

架へ乗せにかゝつた。兵士は呻き始めた。

「靜かに、靜かに、靜かにする譯に行かないのか？」瀕死の兵卒よりもつと苦しさうな聲でかう言ふと、其の儘皇帝は駈け去つた。

ロストフは皇帝の眼に溢れる泪を見た。そして彼が立ち去る時、チャルトリーシュキイに向つて、佛蘭西語でかう云ふのを聞いた。

「戦争は實に恐ろしいものだ、實に恐ろしいものだ。Quelle terrible chose que la guerre!」前衛の各隊はギシャウの前方、即ち終日の小競合で我に陣地を譲つた敵軍を、眼前に控へた所に位置を占めた。やがて前衛に對する皇帝の謝辭が發表せられ、行賞も約された。兵士等には定量の二倍だけウーтокаが分けられた。昨夜より尙樂しげに野營の焚火がぱち／＼と鳴つて、兵士の軍歌が響き渡つた。デニーツフは此の夜少佐昇任の祝宴を舉げた。もうかなり酒の廻つたロストフは、酒宴の終りに陛下に對する乾盃を提議した。「但しそれは正式の晚餐會とするやうに皇帝陛下として、善良にして魅力ある偉人に對する乾盃なのだ。」と彼は云つた。「陛下の健康、及び佛蘭西軍に對する正確なる勝利を祝つて、大いに飲まうぢやないか！」

「以前だつて我々はシエングラベンの役に於ける如く、全力を盡して戦つて、敵に少しも容赦をしなかつたが、今度皇帝が先頭にお立ち遊ばすやうになつたら、本當にどうなるだらう？我々は